

NO. 39
AUTUMN
1972

英語展望

ELEC BULLETIN

国際展望

朱牟田夏雄・山田和男・斎藤美洲・村田聖明・國弘正雄
「私の英語歴」 前田陽一
鼎談「アメリカ文化の光と影」
本間長世・北沢方邦・金山宣夫

“On Linguistics and Applied Linguistics”
「Mother Gooseの世界（その10）」
「世界における外国語教育(2)」
「日・英慣用表現の比較(2)」
「Oral Approach 実践の15年」

英語展望

NO. 39
AUTUMN
1972

ELEC BULLETIN

Edited by Fumio Nakajima

The English Language Education Council, Inc, Tokyo



【国際展望】

| | | |
|---|------------------|----|
| 国際交流その他..... | 朱牟田夏雄 | 2 |
| 英語の書き方について..... | 山田和男 | 4 |
| メルボンの花嫁..... | 斎藤美洲 | 6 |
| 難しきものよ汝の名は... | 村田聖明 | 8 |
| マガヴァン登場に思う..... | 國弘正雄 | 10 |
| 私の英語歴..... | 前田陽一 | 12 |
| 【鼎談】 アメリカ文化の光と影 | | |
| 本間長世・北沢方邦・金山宣夫..... | | 16 |
| On Linguistics and Applied Linguistics..... | Robert B. Kaplan | 28 |
| Mother Gooseの世界（その10）..... | 平野敬一 | 35 |
| 世界における外国語教育（2）..... | 星山三郎 | 41 |
| 日・英慣用表現の比較（2）..... | 長谷川潔 | 45 |
| Oral Approach 実践の15年..... | 森博 | 51 |
| 【翻訳】 方丈記..... | 草島時介 | 55 |
| 【新刊書評】 『実践英語教育』.....佐藤秀志 | | |
| 『英語の測定と評価』..... | 若林俊輔 | 59 |
| 新刊紹介..... | | 62 |
| 展望通信..... | | 65 |
| | | 68 |

国際交流その他

SHUMUTA NATSUO

朱牟田夏雄

昨年この欄に執筆の機会を与えられたとき私は 1968 年と 1970 年と、二度私自身が 18 世紀関係の国際学術會議に出席したときの報告を枕にして、わが國のおかれ島國的状況と、そこから生まれるわれわれ自身の島国根性とを嘆き、人文科学の方面、とくに英語英文学関係で、国際的交流をさかんにするように心がけることの必要を力説した。そういう考えは今もすこしもかわっていないが、そういう方向にむかってすこしづつでも学界諸方面の努力が見られるのは心強いことといわねばならない。

この頃私などの大きな注目をひいていることの一つは、この夏東京で開かれるときく心理学の国際會議であり、もう一つは英文学関係の若手あるいは中堅の年齢の学者たち十数氏の英文による研究論文が、1 書にまとめられて東大出版会から上梓されたことである。

前者、心理学について、私はまったくの門外漢であるから、東京で開かれるに至るまでの経緯とか、今後の学会の規模とか、あるいはそれが財政的にはどういうふうにまかなわれるのか、等々について、ほんのわずかの偶然の伝聞以外にはほとんど何も知らない。ただ私などにも想像できるのは、相当規模の国際的な学術會議を開催しようという場合、純学問上のいろいろな問題は別としても、まったくの事務レベルだけを考えても相當に手のかかる厄介なことにちがいないということである。世界各国（それが数ヶ国なのか數十ヶ国なのかは知らないが）の関係学会、関係大学、学者等々と事前からいろいろと連絡し（それは当然、1 ないし数個の外国语でおびただしい手紙を出し、ときに電話や電報を交換し、またこういう場合決して全関係者がのみこみの早い人ばかりというわけにはまいりまいから、一度通報した内容に關しても重ねて質問を受けたりして、手をかえ品をかえて同じことの説明のしなおしもせねばならぬ、それらのすべてを含むものでなければならぬ）、いよいよ開会の時期になれば外国からの参加者たち（それは多勢の夫人や家族を含むと考えねばなるまい）の、接待、宿の世話から、ときに買物の面倒まで見なければならぬ。それに

加えておそらく資金の調達のための奔走も必要だろうから、主催者側というものは、相当長期間にわたって心身ともにクタクタになるほどの労を強いられることであろう。しかもわが国の場合は、心理学会の内情は何も知らないが、多くの人文系諸学会の財政状態や事務局の組織などはまったくお粗末なものであるし、学会の中心になる諸大学の教授諸公にしても、諸外国の大学教授たちのようにたとえば有能な秘書を抱えているなどというのは、よくよくの例外であろう。私個人のことを考えてみても、英米豪等の同学の士と文通をするにも、むこうは秘書に口授して簡単にすむことが、こちらは一から十までフーフーいって一人で片づけねばならぬから、交信の彼我の ratio は権兵衛老の種蒔きにおけるごとく、3 対 1、あるいはそれ以下ということになり勝ちなのが実情である。自分のことはマア差し控えるとしても、日本の各大学の教授諸氏にすべて 1 人ずつ、あるいは 2 人に 1 人くらいでもよいかから秘書がついて、しかもその秘書は、留学の経験は持たぬまでもせめて ELEC の優秀な受講生ばかり、というような夢はいつになったらかなえられるのだろう。話がそれたようだが、必ずしもそうではない。現に日本的人文系学会のうち、そろそろ国際大会の主催国たることを懲懲されているのだが、以上のような事務局にかかるべき労と、その事務局の手うすさとを考えると、そう簡単に引き受ける勇気が出なくて足ぶみの状態だという実例を、すくなくとも二つは耳にしているのである。してみるとそういう中であえて開催にふみ切った心理学会に（何度もくり返すように内情も外情も何も知らないながらに）大きな敬意を表するとともに、あわよくばあとにつづくであろう諸学会のために衷心その成功を祈りたいと思う。

冒頭の第 2 にあげた論文集というの、"English Criticism in Japan" と題され、副題に Essays by Younger Japanese Scholars on English and American Literature と注記された一書、Compiled and Edited, with an Introduction, by Earl Miner, Published by University of Tokyo Press, 1972 というわけで、アメリカで

は Princeton University Press を通じて購入できるところとあってある。この編者 Miner 氏といふのは、私は知らなかつたが、1961 年ごろ Fulbright Lecturer として日本の大学に来ており、同年札幌では日本英文学会があつたときに講演をして、このような書物を出版することを日本の英学者たちに勧告したらしい。さらに 1968 年に再度来日の機会があつたときに、いろいろな学者たちと精力的に話をすすめて、みずから編纂の任にあたる決心をしたという。University of California, Los Angeles の英文学の教授で、17 世紀のあたりが専門らしいが、藤原定家の「近代秀歌」の英訳および研究なども出版している。本書におさめられているのは Chaucer, Shakespeare から George Gissing, T. S. Eliot に至るまでの、英米の作家あるいは作品についての論策であり、執筆者は、人選当時（つまり 1968 年だろう）40 歳に達せず、また「教授」の post に就いていない 'younger' scholars 15 人で、小池滋、高橋康也、安東伸介という諸君がたぶん最年長で、山内久明君あたりが最年少でもあろうか。本文 300 ページの堂々たる書物といってよい。Book-review ではないから、これ以上詳細にわたることは控えるが、日本の英学者たちがもっとこういうものを国外にむけて発表することを、私などもかねてから希望も期待もただけに、大いに歓迎したい出版である。編者は Preface およびある程度長文の Introduction をつけて、出版までの経緯や、また日本における英米文学研究の実情などを説明紹介しようと骨折っている。'Miner' 氏だけあって、名詮自性（読みまき），地下の隠れた資源を「掘り出して」西欧に売り込もうとする労と好意とをわれわれとしても多としたいが、同時にこれに満足することなく、われわれ自身の手による 'self-mining' の努力も怠るべきではないと痛感するのである。

☆ ☆ ☆

話はかわるが、この年度から突如として日本の政府も国際文化交流にある程度の予算をつけはじめたのは、これまでとにかく歓迎に値することである。また私個人のことになるが、今までにアメリカの政府から 1 回、オーストラリアの政府から 1 回、招きを受けてその国の大学の状況を視察したり、また国際的学会に出席する機会を与えられた経験があるだけに、逆に外国の学者を日本に招くのに、日本の政府が費用を負担してくれる道があればと、かねて強く感じもし、またそういう主旨を雑誌などに書いたこともあった。あるいは今は私自身も何がしか関係している Fulbright 委員会にしても、あれは合衆国と世界中の数多くの国とのあいだに個別にとりきめができる、両国から委員が出て運営されているのである

が、多くの国の場合、米とその相手国とが互いに費用も分担して、学者や学生の交換を実施している。日本のように、委員の人数は対等に出しているが費用はビター文出さず、すべてアメリカ側におんぶしているという例は、ごく新しい新興国等を除けば、今やほとんどないものである。何とも肩身のせまい話で、この辺にも日本政府の奮發を望みたいと、私のみでなくかなり多くの人が考えていた。今度新たに予算がつくことになったのは、私の知るかぎりでは二つあって、一つは日本学術振興会が扱って、さしあたりは毎年わが国から、十数人の大学院学生と、数人の研究者とを 1 年ずつ合衆国に送り出すものであり、この実施事務には、いわば先輩として経験を積んでいる Fulbright 委員会側が、可能なかぎり相談にも乗り応援もする体制ができて、この 8 月ごろには初年度の被派遣者が出かける段どりである。（新聞には「逆フルブライト計画」などと報ぜられたが、Fulbright は日から米と米から日と、学者・学生を交換的に送り迎えしている。今度のはその片道のほうだけである。）日本の場合も諸外国の例のように、Fulbright 委員会に日本政府も半分出資するという形をとったほうが、予算は倍額になって Fulbright の多年の経験も生き、いろいろな面でスムーズに行く点が多いように私などは思うけれども、それは今は問わないことにする。どうやら日本の政府あるいはお役所には、世界中で日本だけにしかないような独特な思考法もあるらしいからだ。要は、どこが窓口にならうとも、立派な人物を選ぶことを誤まらず（かりにもいわゆる年功序列型になるとか、人選についてだれか有力者の顔がきくというようなことになるのが一番困る）、また、特に学生の場合は送り出したあの面倒見もよくして、せっかくの予算を、日本の学界の将来のプラスになるように使うということにあると思う。幸いに日本学術振興会は官僚機構ではないから、こういう要望には十分こたえてくれるものと信じている。

新しく予算がついたもう一つは、いわゆる Japan Fund なるもので、これは上の学振の扱う分にくらべると、桁ちがいの大規模のものらしい。その全貌が明らかになるのは何でも秋ころになるとかで、今は各方面から委員をえらんでその内容、金の使途などについて鋭意検討中とかつたえられる。外務省が主管するような話だし、必ずしも文化「交流」だけに限らず、広い範囲の人物交流の資金とするような話もきく。今のところみなうわざ話の域を出ないから、何とも判断のしようもないが、このほうこそぜひ立派な計画を立てて、日本も国際交流にこれだけの寄与はしていますと、胸をはれるようにしてほしいと切望するのである。

（東京大学名誉教授）

英語の書き方について

YAMADA KAZUO

山田和男

国際化時代とかで、貿易、経済、その他社会の各方面で英語を書く必要に迫られる人、あるいは書きたいと希望する人が多くなり、その結果、日本人の英語を書く能力の一般的水準はあがっているが、同時に一方では、英語を書くことの難しさ、そのための勉強の効果のあげにくさを改めて痛感する人の数もふえているという。どちらも当然のことだろうが、私にはこのあとの方に関連することで世間とはいささかちがった考えをもっていることがある。それを書かせていただこうと思う。

日本では昔から、われわれが英語を書くには、間違いのないように、できるだけやさしい構文と語句を使って書くようにするといい、ということがいわれてきた。結論的には確かにそうであるけれども、そこにいたるまでの過程を問題にせず、ただ簡単にこういってまい、いわれた方はこれだけを心掛けているところに、われわれ日本人が一般に英語がよく書けるようにならない原因の一つがあると私には思われる所以である。

「中学のリーダーの巻3（これは旧制のそれで、今でいえば高校のそれの巻2にあたろうか）に出てくる程度の構文と語句さえ知りていれば、大抵のことは楽に英語で書ける。英語を書きたいと思ったらあれを暗記するに限る」という形で、よく今のべたことが説かれてきた。そして一般にこの説に対して疑いがもたれないできた。しかし私は、これは、理屈ではとにかく、現実にはなかなかそうは行かないことで、失礼ながら、高校の一般の英語の先生方が何よりもその証拠だといえると思う。

高校では一人の先生があるリーダーをある一つのクラスにだけ教えるということは先ずなく、同一学年のいくつかのクラスに教えるのが普通のようである。おまけに、ある学校で一つのリーダーを採用したら何年かは教えることができないという。そうとすれば高校の英語の先生はあるリーダーを採用して、1, 2年たてば、たとえばその第2巻を全部暗誦することはできないにしても、そこに使ってある語句や構文はすべてよく知っている筈である。その高校の英語の先生の中に、もちろん例外はあるけれど、普通の英語がすらすらと楽に書ける人が、

失礼ながら、それほど沢山はないところを見ると、ただ単に高校のリーダーを暗記すればそれで英語がよく書けるようになるとは、どう考えてもいえなくなる。

それでは何故、一般の高校の英語の先生がリーダーに出てくる語句や構文を全部頭にもっていながら、英語を書くことに堪能でないかというと、それは一つには、折角知っているその語句や構文を使って自分で文章を書く練習をあまりしないから、更にいえば、そういう練習をして英語がよく書けるようになりたいという強い motivation をもたないからであろう。これはしかし、ただそれだけではなくて、高校のリーダーの巻2程度の文章を暗記さえすれば英語がよく書けるようになると単純に考えることが間違いであることを証明しているのだとうともできそうに思う。

ここで話をちょっと別にするが、われわれの大部分にとって、英語を書くことは苦しみばかり多くて楽しみの少ない仕事であるが、何が一番それを面白くなくしているか。英語には日本語とちがった数の概念、時制の体系、構文様式、句読法とか、その他さまざまな修得困難な事柄がある。それをさんざん苦労して身につけて、一応いわゆる文法的に正しい達意の文章が綴れるようになっても、ただそれだけのことで、その文章の中に自分が出ていない。日本語だと、どんな気に入らない下手な文章でも、とにかくそこにはっきりと自分が存在する。文章を書くことは言語による自己表現をすることだが、その自己表現が行なわれている。それが英語で書いた文章には欠けている。ここに、われわれにとって英語を書くことを面白くないものにしている一番根深い原因がある。

以上を別な角度からいふと、英語を書くことを面白く楽しんでやるためにには語彙や構文の stock をできるだけ——本当はある程度でいいのだけれど、はじめからそういうてしまっては、その程度を達することも難しいので、敢てこういうのだが——とにかく、できるだけ豊富にするように心掛けることが必要になる。何故なら、（ある程度）豊富な語彙の中から言葉を選択し、その選択された言葉の配列の仕方についてもそれを行なう。そういうこ

とをしてはじめて、自分の個性を反映した文章が書け、本当の意味での自己表現ができるからである。

このように考え、その上に立って話をもとに戻すと、あの高校のリーダー巻2の程度の文章に親しんでそれを暗記さえすれば、われわれ日本人としては十分な程度の英語が書けるということは、間違いとはもちろんいえないであろうけれど、自分自身の文章を書く上で最も大切な語句や構文の選択ということに少しも触れていず、ただこれを英語を書く上の金科玉条として受け取らせるこには大いに疑問がある。

読者はすでに気づかれていると思うが、私は高校や大学の学生の書く、あるいはこれらの学生に書かせるべき英語を頭において、こういうことをいっているのではない。はじめに述べたような国際化時代を迎えた日本の大人、わけても英語の教師には、もうちょっと自分自身のスタイルをもった、その意味で自分の英語を書くことを望んでいいと思う。これは私自身のことを棚においての話だけれど、私のようなわざと足が棺桶に入ったような年寄りは若い人とは別にしてもらってよい筈である。まあそう考えてこれを書いているのだけれども、これからの人には是非このことを心掛けて欲しい。

こういうと、われわれにとって、どうせ英語は、いつまでたっても借り物である。その借り物を使って本当の意味の自己表現などできるものではない、と反論されるかも知れない。喧しくいえば、確かにその通りであろう。しかし同じ借り物でも、たった一つだけ借りて、それで間に合わせた場合と、いくつか借りた中から選択して自分に合ったものを使った場合とでは、そこに大きな差がある。それを考えて、くどいけれど、これからの人には、高校2年のリーダーの文章を暗記してなどとケチなことは思わず、もっと程度の高いものを沢山読んで語彙を豊富にし、それから選択をすることを通して自分のものといえる文章を書くことを努めてやっていただきたい。その結果が高校2年のリーダーを真似たと同じものになれば、それは大いに褒めるべきことであるけれども。

もうこのことについては書きたいと思ったことは大体書いてしまったが、与えられた紙数がまだ余っているので、繰返しみたいになるが、もう少し続けさせていただくと、日本の英学界では、英語を書くには高校のリーダーを暗記せよということと並んで、Maughm や Hearn を手本にせよと説くことも一つの伝統になっている。これも、それ自身としては間違っていない立派な助言であるけれども、これを受ける側にはもちろん、与える側にも、以上述べたリーダーを暗記せよというのと同じ考え方があるいは考えの不足が、あるように私には思える。

これは既にあるところに書いたことだけれど、Maughm も Hearn も作品に使われている語彙は普通の作家とくらべて確かに少ない。しかしこれは、どちらの場合も意識してやっていることで、どちらも大読者であった2人の頭の中にあった vocabulary はあれだけのものだったとは考えられない。ことに Maughm は *The Summing Up* その他で自分でいっているように、市井の一般の人にも楽に読んでもらえるように、わざと vocabulary をあそこまで reduce して書いているので、本当の意味で Maughm を真似るということは、彼のもっていた豊富な（少なくともわれわれから見れば非常に豊富な）vocabulary の中から選択を行なって、あのような平易な文章を書いた、その選択のきびしさを真似ることであって、これは外国人であるわれわれには、なかなかできることではない。Maughm の文章にきびしい選択の結果使われていると同じ程度の vocabulary しかない人が（それだけでも working vocabulary をもっている人は、普通の日本人には数えるほどしかいないと思うが）、その僅かな語彙を full に使って書いて、それで Maughm と同じことをやったと考えるとしたら、とんでもないおめでたいことである。

ここでまたもとに話が帰るが、私は決して、高校のリーダーのような英語を書くことがすすめられないといっているのではない。それは誰にもお判りと思うが、高校のリーダーに使われているそれよりはもっと豊富な、vocabulary をもっている人が、そこに見られる語彙や構文の選択を味わいながらあれを読む。そういう読み方をしてはじめて本当にあれに示されている文章が真似できると主張しているのにすぎない。

最後に、これも今上でいったのと同じところに書いたことだけれど、ここ数年、英語の単語がそれぞれにもつ formal, informal その他の level に注意して、それをまぜこぜにして使わないことが大切だということが喧しくいわれている。確かにその通りだし、同時にこの注意は守ることはなかなか大変だが、これも一つはわれわれの語彙が貧弱で十分に選択ができないからで、また沢山英語を読んでいず、英語の言葉に対する感覚がにぶいからだと思う。

（千葉商科大学教授）



メルボンの花嫁

SAITO BISHU

斎藤 美洲

先月、亡兄の法事があって久しぶりに一族が再会した。その席ですぐ上の兄から、彼の娘夫婦がことによるとオーストラリアに永住するつもりで、日本をたつのだという話を聞いた。

「それはまた思い切ったことで」と、多少事情を尋ねてみたら、若い主人は高等学校の先生で、未知のオーストラリアが好きになったのがそもそもその事の始まりで、かなり長い間夫婦で相談を重ねたあげくの話だという。嫁の方は私も小さい時から知っている娘らかな女性だが、向うでピアノの教師でもしてしばらく様子をみてから、暮らせるとなったら永住するつもりだという。まあ上野の芸大を出ているのだから、ピアノを教えるといつても、あながち無茶な事とはいえないが、「それにしても、ちょっとたよりない話だなあ」と私が言うと、兄も「まあ、そうなんだが、豪州で暮らしたいという気持も、聞いてみりあ分らぬことでもないんでなあ」と言う。どうも娘に甘い老人性が働いているようだ。

兄は仕事の関係からしばしば会議や視察の用で欧米やインド、豪州などへは行っているので、こんどの娘夫婦の豪州行きについても、現地の知人に頼んで、いちおうぶざまな事にならぬように手は打ってあるというのだが、学校の先生をやっている若亭主の方は、校長とも相談して休職願いを出して行くというのを、兄は「退職して行け」ときっぱり言ってやったそうである。その若い先生の気持はよく分らないけれども、「それはりっぱな注告だった」と私も賛成した。どうも若夫婦の話がすこし気ままにすぎると思ったからである。その青年にしてみれば相当の覚悟の上でやってることだろうが、しゅうとに当る私の兄にしてみれば、まだ子供もない若夫婦のことだから、ひとつどれだけやるのか見てやれという心の余裕も働いているのかもしれない。

とにかくそんなことで、もうビザもとっていそいそ出発準備中とある。明らかにがっくりしているのは、二人娘だけの一人——しかも可愛がっている方のその一人と生き別れになるかもしれないという老いた母親である。

「ねえさんが氣の毒だなあ」と私が言うと、兄は言っ

た。「いやあ、いまどき子供を手もとにおこうというのが親のわがままというものさ。われわれは老人ホームへ行くだけだよ。」

それからひと月ほどたったつい先日のことだった。兄から電話がかかってきて、「ちょっと頼みたい事があるんだが、これから行っていいか」と言う。ちょうど夕食時で、その日は私が子供のころよく食べた五目めしが食べたいということで、家内が半日がかりで作っていた時であった。兄にその事を言うと、おおと言って食事を共にすることにした。

兄の頼み事というのは、明後日ちょっと風変りな結婚式の媒酌人を依頼されてスピーチをするのだが、その原稿を英訳してくれないかということであった。

「いや、おれは日本語でやるんだが、花嫁側の両親、親戚がそれじあ全く分らないから、少々氣の毒なんだ。それで当日あらかじめ英訳したものをおいてあげれば、少しはつんばさじきの気まずさから救われると思ってね。」

手渡された原稿を読むと、なるほどちょっと風変りで、花嫁側はメルボン在住の英国人である。父君はメルボン市のある会社の経営者で一男一女の子持ち。息子さんは花嫁の弟で目下弁護士見習い中らしい。奥さんはドッグ・ファンスィアーで、毎年地元の品評会の審査員をつとめているというから、相当の犬好きらしい。

花嫁側は、これはもう見当のつくような家庭の次男坊で、御主人は東京のその方面ではちょっと知られている会社の社長さんである。花嫁が日本人だから式そのものはキリスト教会で執り行なうほかは、万事日本式にやるのだという。それで「ナコード」という役を兄夫婦が終始日本風につとめることになったのである。

「なるほどねえ。こりあちょっと珍しいケースだな。教会で式を行なって、ホテルで披露宴をやるという限りでは、イギリスだってそうだろうが、その内容となるとだいぶ違うだろうなあ。」

「そうだと思うよ。嫁さん側の両親、親戚一同ははるばる東京へやってきているんだから、郷に入つては郷に

従う用意はあるんだろうがね。そのスピーチだって、日本のナコードのやる話の骨組みで書いたんだから、あちら側からみておかしな所があったら、勝手に取捨して英訳してくれよ。ビジネス・レターとちがって人の心持に関係するような性質の文章だから、わざわざきみのところへやって来たわけさ。どうだい、英文学の先生！」

「いや恐れいります。それにしてもこれは待ってもらってる間に英訳して渡すような文章じゃないな。今晚心をこめてやりますから、ひとつ夕めしを食おうじゃないですか。」

兄をさそって茶の間へ行くと、もう色とりどりのきれいな五目めしが塗り箱に盛りつけてあった。五目めしというのは、お盆の季節に作るいわば精進料理の一種で、酢でしめた御飯にかんぴょう、にんじん、しいたけ、はす、さやいんげん、それに紅しょうがと焼きのりを散らしたもの。それから子供たちの好みで、いり玉子か玉子焼きの細そ切りをのせることもあった。そういうものを作つて、まず仏壇にそなえ、それから重箱に入れて、ご近所や親戚にくばつて、それから一家で食べるのである。それが子供の頃は楽しくてうれしかった。なぜならよそからは、おはぎなんかが届けられていて、子供のためにはめったにない大饗宴の日になったからである。

「いやあ、なつかしいなあ。何十年ぶりかな」と兄は如才なく喜んでくれた。家内も東京生まれで似たような思い出を持っている。しぜん話は少年少女時代の思い出話になった。お盆の季節の朝顔市やほおずき市、縁日の話…

「そういえば、ぼくが4つか5つの頃、よく『入谷のおばさん』というのが家に出入りしていたけど、ありあ何者だったの？」

「あれはな、かあさんの従妹だったんだ。たしか谷中の延命寺に墓があるはずだ。」

「ひとつ何十年ぶりに入谷の朝顔市へ行ってみるか。」

入谷の朝顔市、浅草のほおずき市、大伝馬町のべつたら市——家内の亡父も好きだったとみえて、そういう思い出を彼女もよくしゃべった。ただひとり面白くもなさそうに聞いていたのは24歳の私の息子だった。この若僧も近頃はスペインへ行きたいと言っている。

兄を送り出してから、私は例の英訳にとりかかった。「花嫁はご列席の方々もよくご存知のことと思いますので、私はむしろ花嫁のことをややくわしく御紹介申上げます」という文句があって、兄は明らかに不均衡なほど、花嫁の話に行数を費している。これは遠来の花嫁側に対する思いやりのせいだろうと考えて、英訳する私もそれを尊重した。彼女はメルボンの学校を卒業すると、すぐヨーロッパへ行き、「ウィーン、ソルボンヌ、フランスと留学」している。帰国するとこんどは大阪の万国博覧物に来日して、日本がたいへん好きになった。そこで東京にひきつづき滞在して「日本文化の勉強をお始めになるかたわら、英語会話の先生をなさいました。」その生徒の一人になったのが花嫁で、それがこんにちのご縁の始まりであったというわけ。

私は訳し終わって、タイプに打ちやすいようにていねいに清書して、明朝とりにくる女の子に渡せるようにして、「やれやれ」と茶の間にひきあげた。

1カ月もたつかたたぬ内におきた身辺の話だが、若い日本の夫婦が永住するつもりで異国へ出かけるかと思えば、いかがわにその異国の若い女が日本へ永住するつもりでやってくる。親にしてみればよくよくの思いであろうに、彼らはまことによどみなく行動する。国際理解とか国際感覚とか、そのための英語教育とか、ふんべつ盛りのよとな達はいろいろ苦労するのだが、こういう若い連中は、なんだかそれを先ず体で始めるというところがある。ことばはそのあとから生まれるというのだろうか。考えてみりあ、どの国でも近代ナショナリズムに染まりぬいていて、文化にしても国境を越えぬ要素、つまり「イギリスらしさ」とか「アメリカ国民性」とかいうものを強調しようとする。そうしておいて、だからこそ国際理解が必要だというのである。

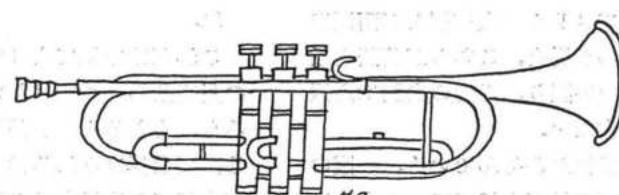
「もう五目めなどをうれしがっている明治・大正の人間はひっこむ時か。」

「そうよ、気のきいたお化けならひっこむ時よ。そのうちお盆も終わるしネ。」

「なにいってやがる。お化けにあいつら若い連中のスポーツサーがつとまるかい！」

(1972年7月)

(東京教育大学教授)



難しきものよ汝の名は…

MURATA KIYOAKI
村田聖明

世界の平和のためにには国家間の相互理解が必要だということは、今までなん度もいわれて来た。

しかしこの考え方自身は大いに誤解されているのである。というのは、こういうことに聞きなれた人はとかく、「相互理解」なるものさえ充分にあれば世界の平和は保たれる、と安易に考えるからだ。

理解と平和は等号で結ばれない。つまり、次のような方程式はなりたないのである。

(国家間の)相互理解=世界の平和

いうまでもなく、二つの国民がお互いを知らない時でも、つまり相互理解がない時でも、両者の間に平和はあり得る。反面、今まで知らなかつた相手がよく判ってくると、相手が憎らしくなり、敵意が生まれることも多い。現実の世界を見ても、二つの国間に「相互理解」をふやす余地はなくとも、はげしい敵意や、武力衝突の危険が存在することは多いのだ。

相互理解が国際友好に貢献するのは、一定の条件のもとにおいてのみ可能である。それは理解の増長が、敵意の原因である誤解や情報不足を是正する場合である。

したがって、正しい情報がもっと多量に国家間を流通することは一般的に望ましいことといえるだろう。誤解に基づいた国際的友好などというものは、必ずしも望ましいものではあるまい。

国語の異なる国家や民族の間の情報の流通に伴ういろいろの障害については多くが語られて来た。にもかかわらず、この問題についての関係者の自覚は決して充分とはいえない。

日本と英語国との間についてのみ考えても、われわれの側から言えば、英語のむずかしさというものが充分に認識されていないと思う。

たとえば、日本の首相とアメリカの大統領とが両国家の重要な問題について話しあう場合、こちらが英語を話すか、先方が日本語を話さない限り、両者の会話は通訳を通しておこなわれるを得ない。

そこには当然、誤解の可能性がひそんでいる。一国の政治の最高責任者が、別の国の最高責任者に、自国政府

の方針について語ったことばが、誤り伝われば、及ぼす所は大きいのは当然だ。

佐藤前首相がニクソン米大統領と会談を行なった時、日米間の織維問題が重要議題として討議された。米大統領は日本側の譲歩を迫った。これに対し、佐藤氏は「善処します」と答えた。

後になって、アメリカ側は日本の方針が一向にアメリカに有利な方に変化しないので苦情を言い出す。佐藤氏の信用度まで問われることになった。

これは外国语の理解のむずかしさ、くだいていえば、日本語を英語に訳すことのむずかしさを示す絶好の例である。

佐藤氏の「善処します」はアメリカ側には

I will take care of it.

と伝えられた。この it はいうまでもなく、アメリカ側にとっての日本の織維問題をさす。日本の首相がこれについて、I will take care of it. といえば、問題は解決したものと見られても仕方はあるまい。

「善処します」というのは、いわば典型的にあいまいな日本語表現であって、日本人同志でも、正確にその意味を推し図るのはむずかしい。このことばが用いられる特定の情況によって、そのことばを用いる人の地位、権限、問題との関係などが、その真意を決める要因になろう。

「善処する」を研究社の *New Japanese-English Dictionary* (1954年版) で引いて見ると次のような訳が掲げられている。

make the best of; tide over ((difficulties)); act with prudence; use discretion ((in)); deal adequately (= wisely) with; deal with ((something)) as one thinks fit.

これだけを見ても to take care of ~が「善処する」の対応語の一つではないのではないかという疑問が起ころう。もちろん、和英辞典があらゆる現実の情況に応じる訳語を掲げられるはずはない。しかし、佐藤・ニクソン会談での織維問題の討議という特定の情況において

も, to take care of ~ は明らかに不適であるといえよう。

ではあの場合, 「善處します」はどう伝えたらよかっただろうか。一寸考えつく範囲でも次のようにいくつかがある。

1. I will do my best.
2. I will act accordingly.
3. I will try to dispose of it as best I can.
4. I will try to deal with the problem as best I can.
5. I will handle it in the most appropriate manner.
6. I will deal with it in the best interest of our two countries.

もちろんこれだけではないが, そのどれをとっても I will take care of it. のような断定的な意志を表わすものではない。一番最後の例などは, 私が勝手に意味を布衍(ふえん)したもので, 「善處します」の適訳とはいえないかも知れない。

しかし大切なことは, こういうあいまいな日本語の表現を外国語に言い直す時には, 遠慮なく原話者に, もっと明確な表現を用いるように注文すべきである。その場合, あるいは 6 番の例のような表現が一番適当だということになるかも知れない。

通訳をする人で, 一度も原話者に聞きただす必要のない人があるとすれば, それは次のいずれかの場合である。

- (1) 原話者の発言が明確で, あいまい, 不明瞭な部分は全くない。
- (2) 原話者の発言が明確でなくても, 通訳は推量で, 充分に任務を果たすことができる。
- (3) 原話者のいうことに不明瞭な点があっても, 通訳はこれについて訊ねることは, 自分の英語理解力が不充分だと思われることは恐れ, 適当にごまかしている。

最近のアメリカの著名新聞が掲げた東京発の記事は次のように始まっている。

Tokyo—A Japanese proverb goes, "Men and autumn sky are alike." And what it means is that neither is to be trusted.

日米間の信頼感 (trust) が失なわれたという主題の記事だが, 書き出しの日本の諺なるものが面白い。いうまでもなく, 「女の心と秋の空」を間違って, 「男心と秋の空」としてしまったのである。

この場合この特派員に責任があるのか, この諺を説明

した日本人に責任があるのかは不明である。しかし, ことばを用いて情報を伝達する専門家であるはずの新聞人でも, このような間違いを犯すということのよい見本であるといえよう。これなど害を伴わない誤報であるが, 同じ程度の間違いでも情況によっては重大な結果を招くこともあろう。

まさにことばをあなどることはできない。「私は英語が判る」と思いかけた時は「まだまだ」の段階なのだ。『英語はむづかしい』と切実に感じるようになれば, 相当進歩したと言えよう。

英語にはかなり自信を持っていると思われる大学の先生が書いた文章(最近のある総合雑誌)の中に, 次のような箇所がある。

アメリカ葬式企業の内幕をいきいきと描きだした諷刺文学の傑作が, イーヴリン・ウォーの「ザ・ラブド・ワン」(一九四八年)であることはよく知られている…「ザ・ラブド・ワン」, すなわち「愛されていたもの」とは, 死人とか死者という言葉を忌んで, 婉曲に言いかえたもので, 「故人」とか「物故者」, あるいは「亡くなつたほとけ」という言葉にあたるものである。ここには単純でしかも基本的な誤解がある。

つまり, the loved one とは「愛されていたもの」ではなく「愛されているもの」である点だ。ウォーの小説の指すところはまさに「死者」にちがいなかろうが, この loved は過去分詞形の形容詞に過ぎず, the loved one は someone who is loved であって, someone who was loved ではない。

日本で封切られる洋画の字幕(俗にいう「スーパー」)は, 大ていが馴れた人の手になるものようだが, それでも, 原音と較べて見ていると興味深い誤訳が, 一つの映画で必ず二三つはある。

先日は, ニューヨークの麻薬密売人を追う刑事の活躍を描いたアメリカ映画を見た。2人の刑事が主人公で, 話の終わりでは, 犯人の一味を追いつめて何人かを逮捕する。最後に英語の字幕があらわれて, 犯人の一人が僅か4年の刑しか受けなかったとか, 主謀者は今なおどこかに健在とか, 他の一人は無罪になったとかという説明がある。

そして, 手柄のあったはずのニューヨーク市警麻薬課の2人の刑事は

…were transferred and reassigned.
とあって, 字幕は終わる。

つまり, 一生懸命に麻薬犯人を追って生命を危険にさらして逮捕までこぎつけながら, 犯人の全部がきびしい

(p. 15へつづく)

マガヴァン登場に思う

KUNIHIRO MASAO

國 弘 正 雄

マガヴァン上院議員が民主党の大統領候補者にきまつた。アメリカ人の専門家もこれは意外だったらしい。少くとも数ヶ月前までは、だれもが彼を泡沫候補とみなして疑わなかった。その意味で、アメリカの政治評論家のだれかが、不明を恥じると述べているのは、もっともなことと思われる。日本式にいえば、さしづめ髪を切って坊主になる、とでもいうところであろう。

それにつけても、ほぼ同じ時期に行なわれた自民党の総裁選との対比は、單に知的興味があるばかりか、その実情を多少なりと知る立場にあったぼくには、やり切れないという思いを強いる。ある米人記者が使っていた表現を借りれば、あれは本質的には auction だったという。某週間誌があるリーダーについて巨額の金の授受があったとかなかったとかと、始めは脱兎のごとく勇ましい報道を掲げ、この分だと少しは黑白がはっきりするかと期待をもたされたが、終りは処女のごとして、うやむやのうちに了ってしまった。だれがどこでどう処理したのか、疑惑はむしろ高まったといってよい。

その米人記者が、山ほど臭い話が横行しているのに、なんの investigative reporting も行なわない日本のマスコミは不可解だ、といっていたことが思い出される。また、政治とマスコミのこの現状に対して、さっりぱり public indignation を感じない日本の国民が、なによりも解せないという。ただでさえエコノミック・アニマルの悪評が噴々たる日本のイメージだが、これではわれわれ自身が実証してみせているようなものである。セリ市同様のプロセスで、いやしくも一国の最高権力者がきまる、というのは、少くとも先進国——いやなことばだが——では想像もつかないのではないか。アメリカでも選挙が金を喰うのは常識だが、これとてもテレビの時間を買うとか、飛行機のチャーター料がかさむとかいうことなので、一票が売買の対象になる、という blatant な business transaction はちょっと考えられない。しかもアメリカという国は、イギリスなどと比べると、政治的にはあれでけっこう後進国なのである。

こう考えてくると、54才のコンピューター付きブル

ドーザー首相の誕生とやらで、マスコミも国民も、野党までが武装解除され、警戒と監視の役割を失念してしまったらしくみえるのは、はたしてどんなものであろうか。たしかに老人支配には大痛棒を与えたし、学歴の過大尊重も打ち破られたかにみえるし、なによりも非官僚総理の出現は今までの重苦しい気分を一掃してくれた。そのかぎりでは大いに評価されるべきであろう。が本当に日本の gerontocracy が変化するのか、近年とみに増大の一途をたどりつつある反主知主義——とくに政財界にいちじるしい。国民所得に占める教育投資の比率が、55年までの先進国中最高から68年以降の最低に落ちこんでいるのはその一例である——のあらわれという捉え方も可能ではないのか、それでも東大法學部は日本を動かしつづけるのではないか、しかも新総裁が選ばれたプロセスが、金、派閥、古くさい人間関係など、旧態依然であったことを見逃すべきではあるまい。

政策不在もいつものことながら一大特長であった。その点、マガヴァンの登場は、政策が大きくかかわっていた。マガヴァンという人は、元来が歴史学の教授で、カリスマ性や、庶民性とやらには乏しい。ぼくも、彼が平和のための食料計画 (Food for Peace) の長官をしていた当時、シカゴ近郊で二度ほど会ったことがあるが、物静かな学究はだで、喋り方もゆっくりなら物ごしもおだやかを極めた。上院議員としても、あまり目立った活躍はしていない。ただ彼を際立たせてくれたのは、ここ数年来、彼が一貫してベトナム戦争反対を唱えつづけていた、という点である。今日でこそベトナム反戻などの政治家も口にする。下手に擁護でもしようものなら、落選まちがいない。アメリカの世論はいまや大きく変わってしまった。そのきっかけになったのは、ミライの大虐殺事件であり、『ベトナム秘密報告』であった。またその変化の主たる荷い手は若者であった。そして、アメリカは、不十分とはいえ、基本的には草の根の民衆の意志が政治や政治家に feedback する、民本主義の国なのである。草の根の民意を注意してさえいれば、アメリカの動きを予見することができる、とぼくがかねてから主張し

てきたのもこれが理由である。

それはともかく、彼がベトナム反対を唱えはじめた当時は、荒野に呼ばれる声でしかなかった。すでに若者の間では、無目的かつ没義道な戦争に命をはらされることに対し、当然の抵抗がおきてはいたが、徴兵カードを焼き払い、アメリカ国旗を足下に踏みにじるなど、奇矯ともみえる行動をともなっていたために、一般国民を疎外し、大方の支持は得られなかつた。したがつて、政界のリーダーの多くは、ベトナム戦を弁護して正当化する方向をとつていた。当時副大統領のハンフレイ氏が、プライベートにはすこぶる柔軟でむしろ批判的であったにもかかわらず、おもてむきは大統領の政策を支持する発言をしていたのなどは、その一例であつた。彼のように人間的でリベラルな人ですらそうせざるを得ぬ雰囲気——もっとも彼の場合は、副大統領の椅子が大きな足かせになつてゐたが——があの国には横行していた。また、ライシャワー氏の大使当時の発言——大森実問題、ないしはベトナム反対を主張する平山照男牧師らとの熱氣を帶びたやりとりの際にみせた姿勢はいまもぼくらの脳裏に残つてゐる——も、大使という制約はあつたにもせよ、それ以後の言動とは似ても似つかぬものであつた。

それだけにマガヴァン氏の一貫した態度が高く評価される。低次の世論に節を柱げることなく、信念をつらぬくことはそれだけで決して容易ではない。ましてや、戦争か否かの選択に際し、あえて不人気を承知の上で戦争の否定に堵ける人をぼくは人間として信用してよいように思う。マガヴァンがあれよあれよという間もあらばこそ、民主党候補者に指名されたかけには、彼の人間としての基本的な decency に対する信頼が、とくに草の根の若者を中心に大きく高まつていった、という事情が介在する。つまりベトナム戦争反対という彼の「政策」と、その背景にあるであろう彼の人間性——ぼくにとって人間性の根幹とは皮膚の色や制服、旅券のちがいなどによって他の人間を殺すことを拒否する姿勢にある——が、若者をゆり動かし、不可能を可能にしたといえるであろう。政策不在のまま密室でことが運んだ総裁選とは、全く異質だったのである。もちろんマガヴァンの草の根における組織づくりの巧妙さ——したたかという形容詞すらあてはまろう——など、戦術面での成功も無視できない。しかし、アメリカは悪しき過剰な介入をすべきでなくアメリカ人の生命であれ北ベトナム人の生命であれ、悲惨かつ無意味な殺りくをこれ以上つづけるべきでないという基本的な哲学があつてこそはじめて戦術も生きて活用されたので、その点を無視してマガヴァンのイメージ戦略に学べ、などと銘うち広告代理店が視察旅行団を

組織したりしても、この内奥に迫るわけにはいくまい。むしろ彼に共鳴し、彼を押し出したアメリカの新しい力をじっくりと観察していくことが肝要であろう。

ぼくはかつて本誌に、アメリカの若者の間に進行しつつある文化大革命(?)について書いたが、いま一度その特色を個条書にすれば(1)アメリカ至上主義からの脱却(2)物質の量的拡大を最高至善の価値とする意識からの脱却(3)一国一民族というタームでなく、より広い地球大の視野で物を考えるという、地球宇宙船的発想

(4)エコシステムの一貫としての人間という生態学的位置づけ、などを挙げることができる。この種の意識変革を考えれば、彼らが反ベトナム戦を旗印にしているのは当然の成りゆきであろう。そして戦争努力と密接にからみあつてゐる軍産複合体のいまわしさ、環境破壊の深化にみられるような生活の質の低下、などを痛撃する。そこにマガヴァン登場の背景があったとみるのがもっとも妥当である。事実、民主党の大会代議員の8割は新顔で、30才以下の若者の数は、前回と比べて4倍にものびている。(女性代議員の数も同様に激増している。)また18才まで有権者年令がひき下げられたことによって2,500万もの若者が新たに選挙権を入手した。これがどう動くかは勝敗の帰趨を大きく左右するであろう。

もとより結果は予断を許さない。ぼくとしては非常な接戦を予想しているが、たとえ敗れたとしても、マガヴァンの登場と政策自体、アメリカのこんごの政治外交に与える影響は少なくないであろう。人の國の大統領選なんぞといつてはならない。ひょっとすると、日本の首相のそれ以上に、アメリカ大統領の一挙手一投足はわれわれやわれわれの子弟の運命を動かしうるからである。もちろん日本人には一票も与えられてはいない。(総裁選も同じだというのは痛烈な皮肉である。)それだけに、代表権なき破滅(annihilation without representation)の可能性は大きい。せめてものことに関心だけは、生き生きと保ちたいものである。

さいごに、とくに若いアメリカの変化を知りうる何冊かの書物を拙訳一冊を含めあえてご紹介しておこう。これらの書物をお読み下されば、草の根のアメリカの変貌がかなり明確になると思われるからである。

角間博『燃えるアメリカ』 (中公新書)

ルヴエル『アメリカに始まる革命』

(タイム・ライフ社)

ライヒ『緑色革命』

(早川書房)

セント＝ジェルジ『狂ったサル』

(サイマル出版会)

(国際商科大学教授)



私の英語歴

MAEDA YOICHI

前田陽一

私は小学校6年のときに初めて英語を習い始めたのです。私の入ったのは成城小学校といって、そのころは牛込原町にあったのですが、現在の成城学園の前身です。あのころとしては珍しい自由主義の学校で、小学校のときから英語をやつた方がいいというので、6年生のときから、普通より1年早く、英語を始めたのです。その上私は、非常にやんちゃ坊主で、うちへ帰って一ぺんも強勉したことがないのに、4年から6年になったのです。仲間は5,6人で、中には優秀な人がいまして、大歳省のその後惜しまれて途中で亡くなった杉山知五郎君とか、いまの興業銀行頭取の正宗猪早夫君とか、そういうような人と一緒に7人ばかりがとんだのです。そのために私は、6年というけれども年からいうと5年のときに英語を始めたので、(語学を始めるのは、4,5年くらいが一番いいと思うのですが)時間的には第1外国語ということになります。

私はあばれん坊で、6年くらいにならうちへ帰って少しは勉強したかもしれないけれども、英語は好きだったらしいのです。小学校のときに児童劇の主役に選ばれて得意だったことを覚えているので、英語はよく勉強したんだろうと思います。そのときの先生はミス・ブリッジスというアメリカ人の女の先生で、その通訳みたいに助けに来られたのが当時は三谷文子さんといわれて、そののちの東京女子大の有名な英文学の先生天達文子教授ですが、そのお2人に1年は習ったわけです。そのときは児童劇なんかをやったりしてるので、私は英語が好きだったらしくて、その後の話ですけれども天達先生が私が非常に熱心に目を光らせて授業を聞いていたというので、私もそんなときがあったのかなと覚えています。英語が好きになった一つの理由として考えられるのは、私が小学校へ上がる前の年くらいに、そのころ内務省の役人をしていた父がアメリカとヨーロッパへ視察旅行に行つたのです。母もその間に1度アメリカに行っているのです。そのため小学校へ上がるころから両親からア

メリカやヨーロッパの話をよく聞いているので、外国语に幼心にも興味を持って、それで英語の時間に一生懸命やったのではないかと思います。

ところが中学の1年の秋から、父がいまのILOの政府代表になり両親がスイスにいくことになったのでつれて、3年ばかりスイスにいたのです。そのときまず最初に3か月くらいフランス語の個人教授を受けてそれからいきなり向こうの小学校の6年に入れられたのです。何にもフランス語ができない。妹たちは年が小さいからもう3か月ごろからそろそろフランス語がわかるようになっているけれども、こっちは学校で習う内容が6年というのか中学1年か知りませんが、複雑なのでなかなか覚えられない。そのときに先生は、ともかく1年ちょっと英語をしたと聞いたので私に仏英辞典をあてがうのです。ところが小学校で1年くらいやった私がフランス語を引いて英語がわかるわけがないので、あのときくらい英語の辞典をうらめしく思ったことはありません。

その学校に1年か半年かいて、どうしてもついていけなくて、神経衰弱になってしまいました。ちょうどその時、国際連盟の次長をしておられた新渡戸先生が日本にお帰りになるというのでつれて帰ってもらうというので予約までしたくらいなのです。ところが新渡戸先生が、ものはためしだといって、ご自分が非常に援助しておられた、ジュネーブからかなり離れた、いなかにあるイギリスのクエーカー宗の人たちが経営している「ザ・フェローシップ・スクール」という国際平和を旨とした全寮制度の学校を紹介して下さいました。それでそこで私は一生懸命フランス語を勉強したわけです。主にフランス語をやりましたが、かなりの数のイギリス人の先生がいて、その先生たちとも私はフランス語で話したのですが、そのときには知らず知らず英語を聞く機会はあったのです。そのときただイギリス人と接したというだけで、たしか英語の授業はなかったと思います。スイスの3年目は国際学校というところに行ったのですが、そこには英

語を使って教える組とフランス語を使って教える組と2つあって、フランス語で教える方に入ったので、もっぱらフランス語をやりました。

ですから私は、日本で1年ちょっと英語をやったのちあとは3年間英語をやらなかったわけです。もっぱらフランス語をやったわけです。これは語学形成の話で、おもしろいのですけれども、それで日本へ帰ってきて、また3年に入って今度は成城で普通に英語を学んだわけです。成城では3年、4年がいわゆる尋常科というので、旧制高校というのは4年の尋常科と3年の高等科があるわけです。4年の尋常科は旧制中学に相当して、3年の高等科は旧制高校に相当するわけです。そこで3年、4年と尋常科で英語を学び、高等科も成城にはフランス語はないので、1学期だけ第1外国語のドイツ語と英語を学んで、2学期から3年の終わりまでは英語を第1外国語にして、ドイツ語を第2外国語にしたわけです。

そのように成城で英語をやりだしたわけですが、ともかくスイスに3年いてフランス語が読めるようになっていたために、英語は3年断絶したけれども少しも苦労しなかったことを覚えてます。帰ってきて苦労したのは漢文で、ふうふういってやりました。しかも、これは語学経験として大事なことで、よく人に話しているのですが、成城は外国語を重んじたので、小学校のときにさえアメリカ人の先生がいたし、中学のときにもイギリス人の先生がいたわけです。そのイギリス人の先生が4年のときにこういうことを言われたのです。自分はフランス語を学校で勉強したことではなく、寝るときにフランス語の小説を片っぽしから目を通したということです。読んだとはいえない。ただ目を通した。ただ目を通していくうちに、初めのうちは何にもわからないけれども、だんだんわかるようになってきた。ということは、テーブルならテーブル、これは英語もフランス語も同じですが、かりに違うとしても、その上に物を置くところとか、その前に腰かけるところとか、そこでご飯を食べるとか、いろんなsituationの中に同じことばが出てくるから、だんだんにこれはテーブルだということを思うよりも直感的にわかってくる。結局そのprocessというものは子どものときに、まわりのおとの言っていることを聞いているうちに、おぼろげにいろんなものがわかっているのが、だんだん相関関係で精密になってきて、それでことばがわかる。全くそれと同じで、自分はフランス語の小説にただ目を通すだけでフランス語が読めるようになった。だから君たちもあまり文法だの字引きだのの勉強ばかりではなく、英語の本に目を通せ、ということを教えてくれたのです。私はフランス語をまさにそうやって覚えたわけ

です。学校で苦労して神経衰弱になるまでになってだんだんやっているうちに覚えたので、あまり文法とか何とかやったわけではない。みんなの言うのは聞いたり、本を読んだりしているうちにだんだん覚えたわけですから、私もなるほどと思って英語の本を読んでみたのです。そこでもう中学の4年のときですから、父にどういう小説を読みましょうというと、忘れもしないジョンソンの『ラセラス』を読みというのです。『ラセラス』を1冊読んでわかったことは何かというと、「エチオピアの王子とその妹の王女が高いところから山を抜け出して逃げて下へ降りた」ということだけなのです。これは笑い話みたいですが、おとなになってフランスへ留学するころ、ちょうどそれからしばらくたってからエチオピア戦争がおこってエチオピアのことが新聞によく出るようになると、エチオピアが高いところにあるということがわかつて、それだけは私の知識は正確だったなということがわかった。2冊目は、これもまた父に教わって、ベンジャミン・フランクリンの『自叙伝』を読んだ。これは前よりは少しあわかって、ことに有名な13条、これは大事だと思って、先生のお勧めにもかかわらず字引きを引いて、そのところだけは、はっきりわかったことを覚えてますが、とにかく2冊目はいくらかわかったのです。しかも13条は大事だ、だから字引きを引いてみようというくらいの程度にわかったわけです。3冊目はもう父に相談しないでゴールズワージーの戯曲集を読んだのです。そうしたら戯曲だったせいもあるし、もともと子どものときにイギリス人の会話なんかを耳にしているせいもあるので、これはわかつちゃったのです。これを読んでから先是おもしろいように英語の本がどんどん読めるようになったのです。私はフランス語がらくでしたから、比較的早かったわけです。しかし、これは何も私みたいに特殊な経験をした者でなくても通用するわけで、それから高等科になって自分のクラスメートの何人かにそれを勧めたのです。中にはそれを実行したのがいて、あとになって、「君のおかげで読めるようになった」と感謝されました。

そんなわけでこれはただ日本で英語だけ勉強した人にも通用するということがいえると思います。しかもそれについておもしろいのは、ずっとあとになって一高の教師になったころ、戦後間もなくですが、そのときに、ある出版社から若い学生に対する助言みたいなものを集めた本が、題は忘れましたが、出たのです。その中に、私も何か書いたのでその本を送ってきたのですが有名な政治学者の丸山真男さんが書いておられるのを見たら、「外国语の勉強に本を読むには、あまりこまかく字引きなど

引かないでわからなくてもいいからどんどん読むということをやった方がいい。自分はそれで英語の本が読めるようになった。こんなことを言うと語学の先生にしかられるかもしれないけれど」と断わってそう書いてあるのです。あとで丸山さんに会ったときに、「いや、語学の先生おこりませんよ、ぼくは学生に勧めてるんです」と言ったのですが、それ以来私は語学の教師として常に学生に、学校の授業はちゃんと文法を考えたり字引きを引いたりしても、うちではむしろそれを離れて、自分ではわからなくてもわかるいいから目を走らせろ、そういうことを勧めているわけです。これが私の中学時代の英語の勉強で得た教訓です。

学校の授業は、高等科は第1外国語ですから1週10何時間ありました。外国人の授業もあるし、それから成城にもずいぶんえらい先生もおられるし、東大から有名な先生が来られたのですが、ただそのときにもうひとつ私の経験でおもしろいと思ったのは、そうやってフランス語も英語も日本語を介さないで直接に覚えたわけですが、学校の授業というのはご承知のように全部日本語に訳さなければならない。だから大体の意味はわかっているけれども字引きを引いて訳語を探す。それを私は結局中学の3年間、高等科の終わりまでやったわけです。さらに大学へ行ってさえ英語をやったので、7、8年間というものは直接意味がわからても字引きを引いたのです。その時はめんどくさいなと思いながらやりましたが、後で振り返ってみると外国語と日本語の「ずれ」を知るために、これが大変役立っているので、非常によかったと思っているのです。

高等学校のときはフランス語はアテネ・フランスに一週9時間くらい通って忘れないようにしました。

大学はフランス文学科に入ったのですが、また英語と縁が切れなくなったのです。大学に入った最初のときに辰野隆先生が私達新入生を集めて、「フランス文学をやっても絶対に飯は食えないから、どうしても大学を出て稼がなきゃいけない者は英語か国語の免状を取るように」といわれたわけです。すでに私は高等学校で第1外国語が英語だったので、その頃世の中が物騒で革命がおこるかもしれないと思っていたので、そうなったら中学の英語の先生になろうと思って申請してみました。さいわい成績がよかったのでしょう、大学へ入ったとたんに中学校の英語の先生の免状をもらったのです。だから中学の英語の免状は取る必要がないので、今度は高等学校の免状を取ってやろうと思ったのです。先生のおっしゃることを真に受けて、ところがそれをやるのはたいへんなんで、英語、英文学の講義や演習を9科目以上取らな

きやいけない。フランス語はもちろん取ったわけですが、2つ目は英語を取ったわけです。しかも私の年から意地悪い規則ができて2つ目以上を取る場合にはその科の平均以上の点を取らないとやらないというのです。そのとおり私は9単位取ったのです。市河三喜先生とか齋藤先生の授業を。フランス語の方はどんなに成績が悪くともくれるわけですが、英語の方は中以上じゃなきやいけないというので試験の前は英語と英文学の勉強ばかりしてました。しかしともかく英文科の平均以上の点を取ってめでたく高等教員の免状をもらったのです。ですから英語は学校教育としてはほとんど英文科出身の人に準ずる勉強をさせられたことになるわけです。

それからすぐフランスへ留学したのですが、それだけ英語を勉強したので、何かと英語に触れることがあって、ことにフランスにいる間英語を忘れないと思ってBBCのニュースを毎日聞いていたのです。これは耳のために非常によかったです。またライシャワー大使がちょうどパリに留学に来ていて、日本の史学雑誌のレジュメをアメリカの学会誌に送るというので、英語のできる日本の学生を募集したわけです。それで私は行って手伝ったりしました。それからフランスだとかえって外国人の学生同士がわりあい仲よくなるので、かなり英米の学生と付き合いました。ことに半年たって家内が来てからは、家内も女子大で英語をやったので、そのころ2、3年くらいしかいるつもりがなかったから、2、3年ぱっちフランス語をやってもしょうがないから、むしろ英語を勉強しろといって、英米人の友だちを彼女のために探して、そのために私もその連中と英語で付き合ったりしたのでフランスにいても多少英語を使うことがあったわけです。

さらに英語とのお付き合いでおもしろいのは、戦争中外交官をやっていたのですが、終戦後帰ってきてしばらくしてから、一高の教師になったのです。終戦の翌年の春からですが、一高で理科のフランス語を新たに始めるからというのでフランス語を新たに始めるからというのでフランス語の先生になったのですが、最初の年には1年しかないから3分の2は余るわけです。そうしたら私が英語の高等教員の免状を持っていることがわかったので、じゃあ英語も教えろということになりました。ところが学生に教えるとなると大変で、ことに一高なんかは頭のいい学生だから先生をいじめておもしろがるわけです。もちろんフランス語の方は大したことなかったけれども、英語は学生につっこまれないように一生懸命勉強したわけです。いまから思うと涙ぐましい努力で、発音なんかも発音記号を書き込むのはもちろんのこと、アクセントの居所迄いちいち書いたのです。少しでも危ない

のはみんな字引きを引いて書いて準備した。中野好夫さんがそのころまだ東大の教授で、一高にも来ておられたのです。たまたまあるとき中野好夫さんと同じ教科書を使ったので新米の私がものすごくこまかく調べているということを知っているので、中野さんもずるいんで調べてこないで、朝「おい、前田君、君のを見せろ」と言って私の教科書を見て写したりしてました。そのときに英語とフランス語と一緒に教えながらわかったことは、フランス語の場合は原則として、はっきり意味がとれなければ書く人が悪いのですが、英語はご承知のようにいくらつっこんでいってもぼおっとしているところがあるということなのです。フランス語というのはラテン語の子供ですから語源がはっきりしているので、文法と辞書は非常によく整っておりますが、その点英語とか日本語は祖先が書かれないことばですから上へいくとぼおっしてしまうわけです。そういう意味で私は教師としてのわずか2年の経験ですけれども、英語の先生というのにはたいへんだなということを感じました。

話は少し飛躍しますが、その後国際会議でユネスコの総会に出たときに、アフリカの代表が非常に英語なり、ことにフランス語がうまいのにびっくりしたわけです。彼らは小学校からフランス語を習うので、目をつぶっているとフランス人が話しているようです。ところが、ひと月も聞いているうちにおもしろいことに気がついたのです。それは、彼らが言うことはフランス人と少しも違わないということです。発音がいいだけではなく、言っている内容もフランス人が話しているのかアフリカ人が話しているのかわからない。ということは、彼らは全部知識をフランス語から吸収しているので、自分たちの国について話すことでも、そこにいるフランス人が言うようなことしか言えないわけです。私が英語なりフランス語で外国人と話すときにいつも考えていることは、こういうふうに言えば彼らはすぐわかる。そのかわり、彼らはそれで誤解する。実際は少しづれてるんだから、それをどういうふうに説明したらいいか。たとえば机でも机といえばわかるけれども、しかし、日本の机は低い、そこが違う。それが心になるともっと違います。だからわれわれが西洋人と話すときにいつも苦労するのはそれなので、めんどくさいときは簡単に言ってしまうけれども、どういうふうに説明したらいいのか、たいへん苦労するわけです。その違いがあるということがわかるのはやはり学校時代のあの古めかしい字引きを引いて訳すという作業です。ですからもちろん語学の最初の学習にはダイレクト・メソッドで覚えた方がいいのですが、しかしほんとうに深いこととか、微妙なことを外国人と議論

するには、やはりめんどうでもそのprocessをやらないといけないです。それをやらないと、いくら向こうの文学に通じても、また日本のことにつじても、その橋渡しの練習をしないとだめなのです。そういうことを私は高等学校で英語の小説、その他のものを訳させられて覚えたわけです。小説とか、すぐれた思想書とかいうのは、人間の感情が含まれますから非常に文章のこっているものが多く一番苦労するわけです。よく語学の勉強に小説ばかりやるのはくだらない、社会科学、自然科学関係の本を読ませたらいいんじゃないかといいますが、私が初めて一高の教壇に立ったとき手もとにあった社会科学の本を選んでやって1学期でやみました。簡単すぎて今言った「ずれ」の問題が起り難いのです。ですから、本当に高度の話ができる、あるいは文章を書くということになるためには、やはりそういう「ずれ」の激しいものの勉強が役に立つわけです。

現在私はもっぱらフランス語専門で、英語は使うだけですが、東京にいる限りは何といっても英米人の方が多いですから、実際英語を使うことは非常に多いわけです。それから国際会議も、私は毎年4、5回は行っておりますが、半分以上は英語を使います。しかし何といってもフランス語は私の専門ですし、子供の時長い間いましたから、フランス語歴の方がはるかに長いことになります。(速記:林 節子) (国際文化会館専務理事)

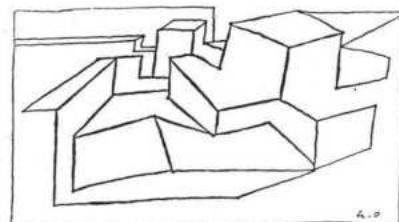
(p. 9 よりつづき)

罰を受けるのでもない。のみならず、当の刑事たちは麻薬課から他の部署へ配置転換されたということである。これがこの映画の強力なしめくくりになっており、製作者が世に訴えようとするのもこの点であると思われる。

ところが、日本語の字幕を作った人はこの transferred and reassigned を誤解して、転勤されたのち「復職した」としてしまった。残念ながらこれではブチこわしである。

本当に英語はむづかしい。

(ジャパンタイムズ編集局長)



アメリカ文化の光と影



本間長世 東京大学助教授
北沢方邦 桐朋学園大学助教授
(司会) 金山宣夫 日本総合研究所国際研究室部長

アメリカ文化とは何か

金山 現代の世界は政治的には、第二次大戦後のアメリカとソ連を中心としたいわゆる二極構造がくずれて、多極化の方向に進んでいると言われていますが、これを文化的にみるとヨーロッパへの劣等意識が克服され、いわゆる Americanization というものが良きにつけ悪しきにつけ定着してきたということです。巨大さ、あるいは量で Americanization というものが、少なくともその一面を理解されているように思うのですが、そういうものについてアメリカが非常に自信を持ってきた。

ところがこれを内容的にみると、非アングロサクソン系、特にユダヤ系というのが背後にある。学問の分野ではヨーロッパからの頭脳流出。そういったもので文化が支えられて来たと思います。そこでそちらの系統を押して行くと、「アメリカの解体」とか、さらにはベトナム戦争から来る挫折感とかによって、アメリカ文化も一つの危機に直面しているのではないかという見方が出てくる。アメリカは一応自信は持ったものの、その後には自信を失って、歴史的な達成ないしは文化的な所産を改めて問うようになって来た。こういうふうに思うわけです。

そこで今日のテーマは「アメリカ文化の光と影」ということですが、まずアメリカ文化を歴史的な観点からとらえてみたいと思います。

本間 アメリカ文化という是有るかということがまず問題になると思いますが、アメリカ文化はヨーロッパとはまた異った特色を持った文明なり文化であるというふうな考えがいつごろからまとまって出てきたのだろうかということを考えてみると、それはあまり歴史の古いことではないと思うのです。American civilization というものを研究の専門分野にして、それでたとえば Ph.D. をとるというような program ができたのは 1930 年代

ころでしょうか、アメリカの極東外交史を書いたイエール大学のグリスワルドという人が実は大学時代にはアメリカ文明を専攻したのだそうですが、その辺が初めともいわれているし、それからアメリカ文学研究家の間によく知られている Virgin Land をあらわしたヘンリー・ナッシュ・スミスなどがハーバードの American civilization の course で Ph.D. をとった最初の学生であるともいわれている。その辺が初めてであるわけです。それからもう少し下がって、大体第二次大戦後に文明としてのアメリカということが言わねだしたというのはマックス・ラナーが 1957 年に書いた本のタイトルが America as a Civilization ですね。あの中で、アメリカははたして一つの civilization といえるかという議論を展開して、彼はもちろんいえるといっていたのですが、その書評などにもまだ、a civilization というふうにいえるかどうかということを問題にしていた人があったはずなんです。ですからアメリカ文化ということをまっ正面から掲げるということはそんなに古いことではない。日本でも欧米文化ということはずいぶんあったのですが、欧米、欧米と一緒に言っていたのであって、アメリカ文化は、ということはあまり言わなかったかもしれないわけです。これはまた、アメリカ文化という呼び方の系譜があるだろうと思いますが、そういう点からみると、やっと 50 年代のいわゆる、冷戦時代にアメリカがいい意味でも悪い意味でも対外責任をになうことになったということがあって、いわばそういう意味でのアメリカの時代ですね。やはり政治、経済の中心的な力になるということは文化的な影響力も及ぼすということもあり得るわけです。それが Americanization ということにもなったのだろうと思いますが、ようやくアメリカ文明が一つのものとして認められるようになった。それから 60 年代に入って、60 年代半ば過ぎになると今度はアメリカの中からアメリカの文化に対する反対、例の counterculture,

反文化というのですが、そういう運動が起こってきている。だからたいへん短い間にアメリカの文化というのは登場し、そしてたたかれるということになってきているわけです。

ただし、それをもう少しさかのぼって考えますと、アメリカ文化ということをアメリカ人が一つのものとして感ずるようになったというのは、やはりこれも歴史が浅いわけでして、1930年代あたりではないか。つまり、「アメリカ」というときに、アメリカの土地全体ですね、ある特定の地方、南部とか西部とか、あるいは各州とかいうのではなくて、nationalなものを考えるというのはどうも1930年代あたりらしい。そういう点からいうとアメリカ文化をアメリカ文化として議論するということ自身がすでに新しい。新しいのに、すでにアメリカ文化の中の反文化が問われているというのがまず考えてみるべき一つのワクではないかと思うのです。

北沢 初めにお断りしておきますけれども実は私はアメリカが専門ではないので、たまたま去年アメリカへ行って本を書いたことからたぶんこういう座談会に引っ張り出されているのだろうと思うわけです。ですからいま本間先生が概念的なレベルというところから問題を提示なさったので、私はちょうどそれと正反対といいますか、非常に感覚的なレベルからアメリカ文化というものがあるかどうかということをちょっと問題にしてみたいと思います。たまたまきのう“Soul to Soul”という映画を見たので、その感想から話してみたいと思います。それはアメリカの黒人のsoul musicのgroupやなにかがガーナに行った記録映画なんです。アメリカの黒人たちがアフリカの西海岸から奴隸として来た人たちですから、いわば彼らの故郷に帰るといって非常に興奮していくわけです。そして実際に上陸していろいろ現地の人たちと交流したり音楽会をやる。まあこれは彼ら自身もそう思ったでしょうけれども、映画を見ているとつくづくと、もうアメリカ黒人はもはやアフリカ人ではないという決定的な、これは日常の身ぶりから音楽から、すべてbehaviorのpatternが違うわけです。ですから彼らのstageを見ていてまず私感じたことは、アメリカの黒人たちのそういうsoul musicのstageというものは、いい意味でも悪い意味でもブロードウェイ化されていると思ったのです。それからまた逆に、ブロードウェイのorthodoxなものを見れば、ある程度ジャズなんかの影響によって黒人化されているという側面を知ることが出来る。つまり、いまアメリカというcultureの中で、black cultureとかblack powerとかいろいろ黒人の独自の主張がなされているけれども、しかしその独自の主

張 자체がやはりinternationalにみれば、もはやアフリカのcultureではなくて、独自のアメリカのcultureの一つのpartとして黒人文化がある、そういう印象を受けたわけです。いま本間先生が30年代のことをお話しになりましたが、ある意味でほん



本間長世

とうに現代のアメリカの文化のpatternというのはたしかに30年代に一つ強力に出てきたことがあると思います。それは政治的にいえばルーズベルトのNew Dealとか、そういったところで強力に出てきて、そして戦後の国際政治の世界はある程度そういう理念なり思想なりがずっとleadしていたと思うのです。

このことはいま言った文化の問題からみれば、その一番基本となったのはやはりWASP(White, Anglo-Saxon, Protestant)の文化だったろうと思うのです。それがヨーロッパの近代文化を受け継いでいるだけれども、やはり独自のアメリカ的なものがいろいろな社会的、あるいは政治的な背景からつくられてきて、特にいま言ったように30年代にも独自性を主張するようになったと思うのです。それが少なくとも、アメリカの主流というか、あるいは正統的な文化になりつつあったと思うのです。ところがいま本間先生おっしゃったように、早くも60年代後半になるとそういうorthodoxなold liberal的なものに対して、若者や、黒人その他少数民族がblack cultureとかcountercultureというものを唱えだして異議を唱えているという状況が現在だと思うのです。他方ヨーロッパに、たとえばああいうcounterculture的なものがあるかというと、非常に希薄なんです。というのは風俗現象なんかではかなりあるけれども、それが政治の面であらわれてくると、いわゆるNew Left的政治主義というか、そういったものとしてしかヨーロッパの場合には出てこないというわけで、それを私はcultural revolutionと名付けているわけですけれども、そういう現象がみられるのは、やはり世界的にいっても現在アメリカだけで、ヨーロッパのそういういろいろな現象が出てるのは、アメリカの影響下で若い人たちが変わってきたというところです。アメリカではそういう意味でcounterculture的なものもたしかに現在はorthodoxなもの



北沢 方邦
アメリカの culture というものがあるのだという感じがします。

金山 いま先生方のお話をうかがっていると 1930 年代を通じてアメリカ文化と呼ばれるようなものが、その存在を指摘されるほどに出てきた。ところが 1960 年代になって、北沢先生の用語に従うと異端というか、あるいは counterculture 的なものが出てきて、それはまたアメリカ以外にはみられない。つまりアメリカ文化という a civilization として位置づけられるべきものであるということですか。

北沢 私はそう考えております。

金山 その点、本間先生いかがですか。

本間 私もそうだろうと思います。

WASP とその伝統

本間 話を後へ戻すようで恐縮ですが、やはりこの orthodox なものに対する挑戦自身にアメリカ文化の系譜があるわけです。たとえば WASP, Anglo-Saxon 中心の価値観というものに対する挑戦ということはある意味で今日非常に強くなされている。大体 WASP ということばがいつから使われるようになったかというのはよくわからないけれども、どうも比較的最近のことであってそれ以前は使っていない。けれども WASP に対する挑戦は 20 世紀の初めにすでにに行なわれているわけです。ヨーロッパからいろいろな人が入ってくるとか、それから Anglo-Saxon 以外の要素が目立ってくるというようなことは、20 世紀の初めに移民が非常にふえたときに一度行なわれた議論であって、従来アメリカは人種のつぼであると言われていたのが、いっぱい人が入ってきて、どうもつぼでないということがはっきりしてきたころなわけです。つまり、同化してみんな同じになればつ

と対立しているけれども、いま言ったように、正統、異端をとにかく一つでくくってしかもいままさに異端の影響で正統が変わりつつあるという感じがするわけです。だけどそれはともかくとして、その中にいろいろ異質なものを含みながら、たしかに一つの

ぼとして作用しているわけですが、そういうつぼ説が唱えられた同じときに、アメリカはそうじゃなくて、文化的に多様な要素を持っているのが特色であるとか、ちょうど政治が連邦制であるように、文化的にも、いわば文化の連邦制がアメリカ文化であるという議論がされているわけです。

そのときに、では Anglo-Saxon というのは何かということになって、Anglo-Saxon というのは今まで自分が Anglo-Saxon であるということを変えないずっときている、WASP 中心主義であるわけですから、そういう点からいうと、実はアメリカに最も同化していない連中ではないか。WASP がいたためにアメリカ文化の豊かさというものはかえって達成されなかったのではないかというような言い方をする人もすでに 20 世紀の初めに出てきているし、それから WASP と結びつけて考えられる例の Puritanism についても、Puritanism こそ人間性を抑圧するとか、豊かな文化の創造を妨げる要素であるというようなことは、これまた 20 世紀の初めに文学者たちが盛んに言ったわけです。ですからそういう点では系譜がありまして、若者の反逆も 1910 年代、20 年代に前例があるし、婦人の解放も 1910 年代、20 年代に前例があって、婦人は台所から外へ出ようという呼びかけがなされているし、結婚こそは婦人をしばるものであるというような主張も、つまり今日のウーマンリップのさきがけになるようなことはそのころ言われているわけです。ですから既成的価値に対する反逆というのは今日始まったのではなくて、やはりアメリカの一つの文化の系譜の中にあるということすら言えるわけです。

そういう点からいうと、アメリカ文化の特質の中にそういう既成のものに対する反発ということ自身を含めてもいいのかもしれません。それとちょっと話がずれるかもしれないが、アメリカ文化の特徴ということで議論を進めるときに考えておかなければならることは、ふだんわれわれがアメリカというと思い出すいくつかのものがあるわけです。アメリカは democracy の国であるとか、Puritanism の国であるとか、それからアメリカは frontier の産物であるとか。それからもう一つ、これはあまり言われないのでけれども、アメリカの都市文化の伝統ですね、これも非常に強い。そうすると、アメリカ文化を高く評価するというか、光の面をみるにせよ、影の部分をみるにせよ、都市という要素を忘れるわけにいかない。それから frontier の場合もそうして frontier こそアメリカのよき面を生み出した。それは個人主義とか民主主義とか、アメリカの nationalism であるとか、そういうものは frontier から生まれてきた

ということが強調されたが、今度は逆に、frontier こそ暴力主義の大もとであるということが言われてきているわけでしょう。先ほど言った Puritanism もまさにそうなんです。Puritanism こそアメリカの理想主義を生んできたというふうな見方、これは光の部分ですが、Puritanism があったためにアメリカは偽善者であり、それから自分が認めない相手は滅ぼしてもかまわないというような、思いあがりだと言われる。ですからアメリカの文化の特徴をつくり出しているいくつかの特質そのものが光でもあり、影でもあるということになるのではないかと思います。

金山 歴史をさかのぼってのお話をいろいろうかがっていて非常に教えられるところが多いわけですが、たとえば若者の反逆というのですか、若い世代の問題ということについて見てみると、1950年代にはアメリカの若者というのは静かな世代ということを言われていたように思います。それが 1960 年代になって若者というのはみんな radical になったみたいな受け取り方も一部にはされている。そのちょうど分かれ目の 1960 年というのは日本で何やってたかというと、安保闘争で日本じゅうがたいへんな騒ぎをしていた。ところがそのときアメリカ人は、日本というのは後進国だからあんなことをやるというような見方をしていたように思うのです。実際、たとえばそれと前後して出版されたセイモア・リップセットの『政治の中の人間』とか、ダニエル・ベルの『イデオロギーの終焉』なんていう本を見てみると、政治が大衆をかきたてるような時代はアメリカでは過ぎたというような結論が提示されていたわけです。そういうことからみるにつけ、先ほどの本間先生のお話をたての糸とすると、横の糸もあるのであって、国際的な広がり、たとえば学生運動にしてみても、これはどうしてもアメリカだけの現象ということはない。それから都市文化のお話がありましたが、都市文化というものについても、いまアメリカのかかえている問題というのは、たとえば都市というものを少なくとも表面的にみる限りでは、いわゆる東北部の都市においては黒人の人口が非常にふえている。いざれにしても何か新しい文化というものがそこにある。それがまた国際的なつながりを持っていて、世界各都市において同じような問題、つまり人種問題とか公害の問題とか、消費者運動の問題とかいうようなものが横の糸として考えられるような気がするのですが、その点はいかがですか。

北沢 さっきおっしゃったことで、なぜ 60 年代の後半にそういう変化があらわれてきたかという問題がたしかにあると思うのです。直接の契機になったのは、たと

えばベトナム戦争、都市問題、環境汚染、人種問題など、いろいろ具体的な問題はあると思うのですが、その具体的な問題というのは、ほんとうはすでにもう 60 年代から根ざしていたある種の病理現象、それが 60 年代の末期になって爆発的に出てきたという形で、

金山 宣夫



イデオロギーの終焉的な立場は少し楽観的にすぎたと思うのです。その問題に関連して、なぜ変わったかということもありますけれども、もう一つ、さっき言ったアメリカ文化の独自性というか、それのもう一つの問題と関係してくると思うのです。というのは、たとえば日本ですと変化の可能性というものは大抵外からの衝撃がないと変わらない。ところがアメリカの場合、これは世界でもかなり独自のアメリカの特徴だと思うのですけれども、変化する factor と mechanism が内在しているというか、つまりこれは例の有名な日雇い労働者で哲学者であるエリック フォーファーが言っておりますけれども、アメリカという国がなぜ独自かというと、いままで地球上に存在したすべての国は必ずエリートがつくってきた文化を持った国だというわけです。ところがアメリカだけはそういう意味で世界史上唯一の大衆がつくり出した近代国家だというわけです。この大衆がつくり出したといいい意味でも悪い意味でも大衆社会という特徴がやはりアメリカの社会だ。その中で、かつてはリースマンのいうところの内部志向型というか、inner directed のタイプである、それこそ WASP が文化の中心を占めてきたし、また、かつては量的にいっても支配的な民族であったわけです。ところがだんだん移民が流入してきて、もはや量的にいってもそういう内部志向型のがんこな WASP というものはだんだん少数派になっていった。それでリースマンが指摘しているように、特に 20 世紀になってから他人志向型というか、other directed の大衆が非常にふえてきた。それにいま言った民族問題がからんで、つまり WASP 的な正統派が量的にも幅が狭まりつつあって、一時はとにかくあとから入ってきた移民たちもそういう WASP 的な identity に收れんしようという努力をしてきたでしょうけれども、大衆化という mechanism がアメリカ社会に内在しているので、だん

だんそういうふうにならなくなってきた。そういうわけで、移民がふえて大衆文化の基盤、それから社会的な基盤が変わってくるとどうしても変わらざるを得ない。ただしそこにはいろいろ摩擦があったり、葛藤、あつれきがあるのですが、そのトラブルが最終的には何らかの形で解決していく。そういう私に言わせればいい mechanism があるのではないかというわけで、つまり 60 年代の後半に出てきた変化は、たまたまベトナム戦争等を契機にして噴き出してきたのではあるけれども、いままでに歴史上に何回か繰り返してきたであろう、そういう変化の一つの、かなり大規模な変化が60年代の終わりに働いてきた。それはいま言ったように、大衆社会が持っている変化の mechanism がしからしめたところであるというふうに言えるのではないかと思うのです。

少数民族と反文化

本間 大衆文化というのは日本でもひところずいぶん議論されたことなんですけれども、アメリカの文化の一番大きな問題の一つは、アメリカという社会で、つまり民主主義社会でどのような文化をつくり出すことができるか、ということだったろうと思うのです。それは文学者などを見てみましても、19世紀にヨーロッパで書かれたような小説はなかなか書けない。なぜかというと、アメリカには貴族もない、お城もない、坊さんもいないとか、ないものをあげていくと、たいへん小説の材料に、あるいは戯曲になるようなものが少ない。その中で一体何を書くかというような問題があるわけです。片方では、ウォルト・ホイットマンのように、いやそうじゃない、自分をうたうのである。自分をうたうことによって、いわば民主主義の文学の創造ができるのだということがあるわけです。ところがその問題は 20 世紀に入ってきて 2 つに分かれて、大ざっぱにいって、いかにしてアバンギャルド（前衛文化）が可能かという問題と、それからいかにして大衆文化をつくっていくかという問題になっていったのではないかと思うのです。で、大衆文化というのは、非常にこれもあいまいなんですけれども、要するに大衆の楽しみのための文化であるというふうに考えると、ラジオ、映画、ポピュラー音楽というふうに、こういうジャンルに属するものが 20 年代のアメリカで一齊に出てくるわけです。

ところが例えば映画なんていうのは、スターをはじめとして、スクリーンの表面に出ない監督とかプロデューサーとかディレクターとか資本を出している人とか、そういう人が Anglo-Saxon でない人、non-Anglo-Saxon

ですね、そのような要素はおそらく30年代に入ってくると文学にも及んでくる。そこに実はアメリカの独自性というものがあるはずなんです。学問の分野にしても、たしかに 1930 年代までのアメリカの自然学者にだれがいたかということを言い出すと、ほとんどいない。戦後はそういう情勢は確かに変わったのです。問題はどういうふうに変わったかということが一つと、この次の段階、どういうふうな文化の創造が可能かという問題が今問われていて、それはどうもまだあまりはっきりしないように私は思うのです。

金山 いまおっしゃったように、次の段階ということを考えなければなりません。それに関係して、先ほど北沢先生は counterculture の基盤は健全であるといわれましたが、その点を少しご説明願いたいのですが。

北沢 Counterculture という場合、私は、たんに白人の youth だけではなく Black や Indian など少数民族の culture も含めて考えたいのです。現在では少数民族は White に対して独自性を主張しているわけですけれども、先ほど言ったように、すでに黒人自身がもはやアフリカではなくアメリカ化されているわけです。ですからいまはたとえば Black culture と White の youth culture とかなり隔たりがあるかもしれないけれども、もう少し長い目で見ていけば、たぶんそれはまた一体となっていくであろうと私は予測しているわけです。

民族文化といっても、将来は、結局それぞれ独自性を持ちながらも、全体としてやはりアメリカ文化としか言いようのない一つの共通性というものがあるということです。そういう状況にたぶん達するのではないか。いま過渡期ですからほんとうにバラバラだと思うのですけれどもね。それからもう一つエリートと大衆の問題ですけれども、かつての、たとえば私音楽が専門ですけれども音楽からみると、アメリカの classic、つまりエリート文化のアメリカの音楽というものはほんとうにつまらなかった。非常に academic で、保守的で、ヨーロッパでは 20 世紀になってからずいぶんいろいろな前衛的な実験が行なわれていたのだけれどもほとんどアメリカにはそういうものがなかった。ところがそれが最近破ってきたわけです。

たとえば代表的な人物をあげると、ジョン・ケイジなんかですけれども、どうしてそれが破れてきたかというと、つまり大衆文化と前衛文化の壁やワクがなくなりつつあるのが現在の状況ではないか。というのは、たとえばいま言った counterculture で好まれている音楽というのは rock music ですね。それから黒人の間では soul music ですが、そういう soul とか rock と若い classic

出身の、かつてであればエリート・カルチャーをになう人たちとの間に何か壁があるかというとほとんどないに等しい。かつ、彼らも rock の音楽に興味、関心を持っているし、それから rock のほうでもそういう若い前衛的な芸術家を受け入れるということ。

それから jazz もそうですね。今迄の modern jazz が行き詰まってきて、60年代の終わりから new jazz というものが出てきた。new jazz というのはもちろん rock とは違うけれども、ほとんど差別がないくらい大衆的なものと接近して、現在はそういう前衛と大衆性というものと壁がなくなりつつある状況だと思います。ですから将来は上下の面でも、前衛的なものが完全に大衆的なものに吸収されるとは思わないけれども、しかしお互いに壁がなくなって影響し合いながらいくというような徵候が現にあるのではないかと思うのです。だからもしアメリカの未来の文化というものをいまから予測するとすれば、そういった方向で予測できるのではないかと考えております。

金山 こういうことはどうなんですか。例の soul ということで精神文化的なものが提起されている。その一つの見方というのは、やはり文化がいままでは理性に基づいたものであったのが、感性に重点を移していく、あるいはエトスからバトスというのですか、そんなような転換を示しているということではないでしょうか。これはいま先生のおっしゃったワクの中に入ることなんですか。

北沢 それは結局、現代文明全体の国際的な問題にも関連してくると思うのですけれども、やはり私は広い意味で現代は文明の転換期だと思うのです。特に近代文明というのは何で築かれてきたかというと、やはり理性的なものの尊重というか、それを中心にしてつくられてきている。ところが現在のそういう1つのそれに対する反逆としての counterculture というものは、さっきの “Soul to Soul” という映画の中で “soul とは何だ、それは feeling だ” という歌詞が出てくる。つまり人間は理性的なものによって control する対象ではない。もっと本源的なというか、つまり人間というのは本来そういう feeling とか soul とかそういう用語で呼ばれるところのある種の全体的な感性がまず人間の存在の前提なんであって、その上にもし理性があるとすればあり得るわけで、だから理性が主人づらして感性を手足のごとく使うというのは逆じゃないかという。わかりやすくいえばそういう考えが counterculture の中にあるだろうと思います。

金山 そうすると、いままでは感性のほうが理性によ

って抑えられていて、これからはそれが対等というか、相補い合うものとして持ち出された、それが健全な counterculture だと。

北沢 そうですね。現在にもその底流はあると思うのです。だから多少は混乱しても振子がもとに戻っていけばもっと健全なものが出てくると思うのです。

本間 健全とは何かということ自分がいま問われているわけですね。理性中心の文化ということから明らかなに健全でない要素がたくさん出てきているということになるだろうと思うのです。そういう考え方自身が実はもう検討され、あるいは調節されているのだということになれば、新しい健全さの基準というものが模索されているのだということになれば、話は別になるわけですね。ただ、私はここでわれわれ日本人からみてもいくつかの非常に大事な興味のある問題があると思うのです。

一つは、counterculture とか若者文化というものが今日のアメリカの既成価値、既成文化に対する挑戦である。たしかにそのとおりなんです。他方で、少数民族というか、minority がそれぞれに自己の主張をして WASP 中心の文化に対する反逆を行なっている。これもそのとおりなんです。そうすると、いわば挑戦を受けている体制なら体制というものは1つかもしれないですがその挑戦をしているほうからみると、2つあるわけです。もし少数民族、黒人も含めて、黒人なら黒人、あるいはその他の白人の中でもボーランド人、アイルランド人、イタリア人、その他がそれぞれに自分たちは簡単にはつぼの中でとけるのではないのだと主張するのが今日の状況であるとすれば、これは少数民族が何をもって自己を主張するかといえば、自分たちの文化的伝統であるわけです。アフリカへ戻って自分たちのふるさとをたずねてみたらいかに自分はアメリカ人であるかということがわかるという問題もあるのですけれども、よってもってたつというものは文化的伝統のはずなんです。そうでなければとけるとかとけないとか、Americanize されるされないということが問題にならないはずである。そうするとそれは歴史的文化というものを前提にした主張ということになる。

ところが青年の反逆とか、若者文化の主張にみられるかなり大きい部分というものはそうではなくて、自分たちはいわば一個の人間存在なんだ、それが歴史に締めつけられ、文化にがんじがらめにされ、体制にしばられているのが今日の状況であり、これが窒息させられそうな事態である。それから解放されることが自分たちの願いであるし、また解放されるべきものであって、自分は自分であるということを主張することがまず第一だとい

う。これは必ずしも歴史的とか文化的とかいうことを前提にしない、むしろそれに対して反対するほうの側ではないか。だから少数民族中心の自己主張というのと、それから青年を中心とするような counterculture の主張というのはその点では相矛盾してくるのじゃないか。つまり少数民族は自己の主張をすればするほど、黒人であればかつてのアフリカというものを何か思い起こさせるものを強調する。アフロスタイルの髪とか着物とかいろいろあるでしょう。音楽でもそうでしょう。青年の文化の場合はどういうことになるかというとそれとはちょっと種類が違うのです。そうではなくて一切を捨てて自我をむき出しにすることのほうが差しあたって大事なことなんです。自我の内面を豊かにするためには LSD でもよからうし、何かサイケデリックな経験というものでもいい。要するに自我の内面をどれだけ広げられるかというほうに関心があるわけです。そうなると、どうも両者の主張というのはあまり理屈の上ではかみ合わなくなるのではないかという気がするのです。

金山 一つの共通項として指摘されたように、自分は自分であるということを主張するという、それは別に民族とか歴史とかいうことには関係ないと。

本間 ですからその次の問題があるのです。自分が自分であるゆえん、identity の主張が少数民族の場合と counterculture の場合で違ってくる。ところがそれを取りまく全体が、たしかに北沢先生おっしゃるようにやはりアメリカ文化なんです。それは私も間違いないと思うのです。ところが今度はそれをさらに越えて、このアメリカの新しい動きというものがどうも国境を越えて方々に影響しているようである。つまり日本も人ごとと思えない。アメリカを見ていることが日本を見ていることじゃないかという気がたしかにするのです。それはどういうことかという問題が出てきちゃうのではないか。

北沢 そうですね。だからたしかに理論的にいうと、そういういわば nationalism の主張と youth culture の internationalism というのはたしかに矛盾していると思うのです。ところがそれが実際みていると矛盾していないのです。というのはなぜかというと、youth culture の internationalism というものが今まで、これはイデオロギーの右、左を問わなかったと思うのですけれども、今までの internationalism というものはいくらマルクス主義が internationalism といっても近代文明の internationalism なわけですね。もっとも20世紀になって中国とかいろいろな国が、革命が起っていくことによって、結局そういうマルクス主義の内部でも西欧中心的な側面というものが打破されつつあるだろうと思うのです

けれども、少なくとも今まで一般的にはそういう傾向があったと思うのです。ところが現在 counterculture あるいは youth culture で主張されているある種の internationalism というのは私に言わせれば第3世界の internationalism というか、つまり今までそういう世界史の支配的なというか、あるいは表面的なものにあらわれなかつた層というか、あるいは culture というか、そういうものに対する sympathy という、それが counterculture の一つの側面にあるのではないか。だから、たとえば彼らの服装見ればわかると思いますが、アメリカインディアン風であるとか、冬になればエスキモー風であるとか、インド風であるとか、アラブ風であるとかとにかくおよそ今までの伝統的な西欧の近代の服装以外のものなら何でも着てしまうというような側面があると思うのです。ですから、そういう internationalism と、少数民族の nationalism の主張と一見理論的にはたしかに矛盾しているのですけれども、にもかかわらず、結びついているという側面もいま言ったようなところからあるのではないかと思います。

金山 いまお2人のお話をうかがっていて、ぼくがチラッと思いついたことなので暴論かもしれません、たとえば少数民族ということでインディアンを考えてみたいと思います。アメリカ政府、つまり WASP 側のやり方というのは、最初は明らかに絶滅政策だった。ところが、あとで本間先生にうかがいたいのですが、それがある時期から同化ないしは保護政策に転じたのではないかと思うのです。いまそういう絶滅政策から保護政策に移った、そのひとつのあづれきみたいなのが出てくる。そしてその過程においては、たとえば映画でも "Soldier Blue" といったような、あるいは本多勝一式の、インディアンならインディアンの側からみた、そういう歴史が少なくとも部分的には提示されるということが起こる。それから私もたまたまアメリカにいたときに NET (教育テレビ) を見ていたら、よく覚えてはいませんが、アメリカのインディアン出身の学生が 50 何歳の白人の主婦を強姦して裁判を受けるというケースを紹介しているのですが、そのテレビフィルムの結論は、やはりそれは個人の問題ではなくて文化の問題であるというようなことを、それこそ WASP 側のテレビが言っているわけです。そういう、つまり相手の立場というか相手側からみた歴史というか、そういうものを提示するということの、同化政策とか保護政策の一種の反省みたいなものであるような気がする。もしそういう仮説をここで一応受け入れるとすると、たとえば若者というのは同化の対象なのではないか。つまり体制に同化してもらわないとい

けない。そういう意味で若者とそれから少数民族というのは共通した立場を持ち得るのではないかというような気もする。暴論だとは思いますけれどもいかがですか。

本間 若者は常に社会に同化させられるわけです。生まれてから教育というのは一つの、常にいまある価値を教え込み、いまの制度の中で、いまの法律のもとで、習慣の中で生きていくような存在をつくり上げるわけですから、なにも60年代のアメリカがそれをやったわけではなくて、社会というものはそういうものだと思うのです。それがあるからこそ人間は社会というものを歴史的に保ってきたわけです。しかしそれはあくまで半面であって、常にまた社会は変わってきたわけで、常に同化の面があつて、それに対する反発の面があつたと思うのです。ただ、いまのアメリカの場合に同化をきらうというか、そういう面が特に強い。つまり、いわば自己嫌悪ということはありますね。自己というのは個人としての自己ではなくて、アメリカ人である自己ですね。アメリカの歴史をきらう。そこに生まれ合わせた自分をきらう。だから逆にインディアンの立場からみようというのが強い。インディアンに関する本があとからあとから出て、白人はインディアンに対していかに悪いことをしたかということを書く。悪いことをしたのはずっと前なんです。それをいままではだれも言わない。これはブームなんです。インディアンに対するアメリカの白人の残虐非道、非人間性を唱えることが一種の流行なわけです。そういうことは、自己嫌悪がいかに強いかということがわかる。それは前をたどると、19世紀の後半に、たとえば*A Century of Dishonor*という本が書かれていて、白人自身がいかにインディアンに悪いことをしたかということで責めるという本が出てることは出ているのです。しかしブームになったのは最近なんです。だからそれはやはり一つの自己をにくむ、アメリカの歴史をにくむということのあらわれなのではないか。それに比べると、アメリカの中で少数民族が自己を主張するというのはちょっと違うかもしれないと思うのです。それはアメリカ全体をにくむということから出発しているのではないかもしれないのです。アメリカの中で自分たちがまだ差別されているということに対する不満であって、アメリカの中で平等でありたい、ほかのものに比べて、そういう主張のほうが強いのではないかと思うか。

北沢 インディアンがブームだということをおっしゃったのですが、たしかにそのとおりなんですけれども、いまの問題に関連していえばなぜインディアンがブームかというと、いまおっしゃったように、たしかに自己罪責感というか、白人側からの自己告発の側面があること

は事実ですが、もう一つ、そういう Counterculture に commit している人たちからみると、インディアン社会というのはそれ自体でアメリカの社会の未来の一つの model になり得るのだという考え方なんです。というのは、インディアンはたしかに人種的には mongoloid で一つの共通性がありますけれども、実にたくさんの部族に分かれている。ということは、その部族によって言語が違うし、文化も違う。にもかかわらず、全体としてインディアン文化というような共通するある種のものがみられるわけです。かつ、彼らは歴史的にみれば、部族間戦争とかいろいろな形で小さいトラブルを繰り返してきたけれども、全体としては共存共栄してきたという実績がある。それを一つの model としてアメリカ社会に移しかえてみると、アメリカ社会というのは移民によって成り立っている。インディアンという先住者もいますけれども、あとは黒人が奴隸として来て、あとは移民として来たという多人種、必然的に多文化国家である。それをいままでは無理に、ある種の WASP 的な文化に統合しようとはかってきましたけれども、そうではなくて、今後は、つまりいま少数民族の問題に関連して起こっている声というのは、分離しつつ、かつ平等である、そういう原則だと思うのです。

現に私もいろいろな人に会って、われわれは将来のアメリカの一翼としてアメリカ文化をつくっていくのだということを聞きましたけれども、ということは、言いかえればかつてインディアンの部族社会が非常に多言語、多文化の社会でありながら、しかもそういう統一性や共存というか、繁栄をはかってきたようにたぶんアメリカが将来もし最良の選択があり得るとすれば、文化的にはそういう地方や民族を横断した形で、それを民族ということばで呼んでいいかどうかわかりませんけれども、ある種のそういう文化的単位が分権的な形で存在し、しかも全体として集まってアメリカ文化をつくっていくという方向になるのではないかと思います。

日本との対比

金山 今迄のお話しから考えると、それと対局的な立場にあるのが日本ないしは日本文化。これは一言語・一文化です。国際化というのは、そういった一言語、一文化といったような国にも、多言語ないしは多文化的な状況が及んでくるということでしょうね。

北沢 そうですね。細々ながらも日本にもある種の youth culture としての internationalism というものが現にあるし、だからそういう形でたしかに日本も変わら

ざるを得ない側面もあるけれども、果たして変わるかどうかということははなはだ私は悲観的ですけれどもね。

金山 アメリカの場合には悲観的ではないわけですか。

北沢 そうですね。というのは、アメリカ自身には変化の mechanism というものが内在しているけれども、日本の社会自体の中には変化の mechanism がないのではないか、よほど何か外部から衝撃がない限り変わらないのではないかという悲観論なんです。

本間 先ほど北沢先生がおっしゃったことが非常に大事なんで、多様性はあるけれども、多様性をひっくるめたアメリカというのもあるのですよ。言語にしたって、とにかくこれだけ少数集団、これを民族と呼べるかどうか疑問だというお話があって、アメリカでは ethnic group というわけですね。その ethnic group の自己主張がこれだけ強くて、しかし英語を使っている。これは変わらないわけですね。Ethnic group の自己主張が強いから Polish American はこれからポーランド語を使いましょうということに絶対ならないです。英語を使うという事実は変わらないでしょう。そういう意味からいようと、アメリカは一言語です。だからその点では、日本と同じです。日本だって、日本人が一言語の民族であるかどうかということに対する挑戦みたいなものが出でてくるわけです。東京語がいかにいんちきな人工語であるかという主張をしたりする人が出でますね。私は言語の問題一つとっても、実は今まで大ざっぱに言われてることをずいぶん検討しなければならないことが出てくると思うのです。

国際化ということからいようと、日本の受けている挑戦というのは非常に深刻なわけで、一方において日本はあまりにアメリカに影響され続けてきた、Americanize され続けてきた。Americanize されるというのは「光と影」という題目がいま掲げられているわけですが、光もあったが、影の部分も非常に大きい。むしろ Americanize されたことで困った点が多いということが最近強調されているところがあるわけです。そうすると日本人が日本文化を取り戻すためには、アメリカから受けた影響を、あるいはこれから受けける影響を払いのけないといけないというような主張も出でてくる可能性十分ありますね。それから、日本のほんとうに日本的なものをもう一ぺん掘り起こそうというような、そういう意味での nationalism があって、それはより土着的なもの、今まで表面から隠されていたものをさがし求めるということになっていく傾向がかなりある。他方では、日本はますます国際化しなければならないといっているわけでしょ

う。そうすると文化的交流とか、接触とか、相互影響の問題というものをどういうふうに考えたらいいかということになってきて、一つの悲観論は、要するに相互理解はできないのである、文化の交流というのはきれいなことをいうけれども、お互いにほんとうのところはわからないのだという考え方ですね。それから、ほんとうのところは受けつけないのである。日本はこれだけ国際化しているようで、さっきの議論と逆になっちゃうのですが、これだけ Americanize されたようで、実はちっとも変わっていないのではないかという議論にもなるわけでしょう。だから問題は、アメリカ文化が現在持っている国際性というものはどういう性格のものであって、日本はそれをどういうふうに受けとめていくのかということを今までずいぶん大ざっぱに考えられてきているから、もう一度考え直せということです。

金山 そうですね。その点で、振り返って日本を見ると、たとえばアイヌについては、いまだに旧土人法というのがあるのです。あの第1条は「北海道旧土人ニシテ農業ニ従事スル者、又ハ従事セント欲スル者ニハ、一戸ニ付土地1万5,000坪以内ヲ限り無償交付スルコトヲ得」つまり reservation と全く同じじゃないですか。いまだにその法律は生きているのです。そんなようなことを考えると、いま国際化の横糸と、実際こういう問題がアメリカのように、いや Black power だ、Red power だということになって表われるとしたら、ちょっといまは想像できないけれども、たいへんなことだと思いますね。

北沢 もし日本がそういうふうになればぼくはけっこうだと思うのです。というのは、いま本間先生が言語の問題をおっしゃったのでそれに関連して言いますと、インディアンもいまの世代は英語を使うわけです。もちろん reservation の中に帰れば彼らの固有のことばを使いますけれども、たとえばわれわれと話す場合は英語を達者にしゃべるわけです。そういうわけでアメリカが全体として、その点がインドなんかと違うわけですけれども、英語を一元的に使っているという意味で、英語というものが一つの文化的な統一の強力なきずなになっていると思うのです。ただ、言語学的にいようと、そういう意味で syntax のほうは一元化されていると思うのです。ところがこれからアメリカの未来の文化を考えしていくと semantics 的な内容というか、つまり意味論的な内容が多様化していく。たとえば単語一つにしても、soul といとばはほんとうに黒人独自の用語で、白人が soul いうことばを使ってもあれだけの意味内容を与えられないのではないか。あるいは、インディアンが使う spirit と

いうことばは黒人には理解できないし、白人にも理解できない側面が非常に多い。そうすると、syntax とか vocabulary は変わらないけれども、いま言ったように semantics の内容が非常に多様化していくということは全体としてみれば文化の豊かさだと思うのです。そういう意味でアメリカ文化というものは、むしろそういう少數派や ethnic group の主張が強まれば強まるほど非常に豊かになっていくという側面があると思います。

金山 それについてちょっとお聞きしたいのだけれども、アメリカの象徴である自由の女神、Statue of Liberty ですが、これも Statue of Freedom だということではないとアメリカ文化でないということですか。その点いまおっしゃた semantics の上で freedom と liberty というのはどういうふうに違うのか、それをご説明願いたい。

北沢 Semantics の内容というのは歴史的に刻々と変化しているわけです。ですから初めからそうであったかどうか知りませんけれども、現在使われている用語法からいうと freedom ということばは黒人たちからきた意味内容だと思うのです。というのは、有名な黒人靈歌で *Oh, Freedom* というのがありますけれども、それは要するに奴隸たちが、いわゆる奴隸輸出の城というものがあるのですね、アフリカ西海岸にいまでも残っていますけれども、その牢獄に閉じ込められていてこれから船積みされようというときに、はるか故郷を振り返って、牢獄から解放されてほんとうに故郷に帰りたいという願いを込めて *Oh, Freedom* というものを歌ったという、そういう意味で非常に肉体的、感性的な内容が freedom ということばにあるのです。もちろん英語には本来 liberty と freedom というのは vocabulary の中にあったわけですけれども、それがはっきりいま使われているようなしかたで、いわば対立する用語法になったのは、そういう黒人たちの影響だろうとぼくは思うわけです。ですからいまたとえばアメリカの都市に行くと、落書に 'Freedom Now' ということばが書いてありますけれども、それはたしかに liberty というのは、憲法はじめいろいろなもので法的には保証されている。しかし liberty には freedom が伴っていないのだというそういう内容、つまりほんとうの意味での自由というか、解放というか、解放ということばのほうがむしろ freedom という訳語にはふさわしいのではないかと思いますが、そういうものがいまだないのだということだろうと思うのです。

本間 文化の内容が豊かになる可能性がある。それはことばの意味内容が豊かになっていくことにも示されているということはおっしゃるとおりだと思います。問題は、健全ということに戻って、一体アメリカ文化、そ

れから文化と社会をもし分けて考えるとすれば、文化を支えているはずの社会というものがこれから健全であり得るかどうか、そして現代文明は果たして健全であり得るかどうかということにかかわってくるわけですけれども、その場合に私は、社会とか生活ということからいうと、自己破壊をしてしまう社会というのはやはり健全と言えないのではないか。なぜならばそれは自分をつぶしてしまうし、自分からあとに来る人たちに対して何も残さないということですね。これはたいへん不健全な話である。それから非常に狭い意味で生活とか社会というもののから一応切り離して考えた場合の文化、つまり狭い意味の学問とか芸術とか、そういうものの創造ということを考えたときに、すぐれたものが生まれ続けるということであれば健全と言えるのではないか。これはいろいろ異論があって、社会が不健全でもりっぱな作品が生まれるということもありますけれども、それゆえにすべてが幸福なプラになって芸術の創造がないこともあるかもしれないし、それはわからないですが、私は欲張って考えれば、社会もそういう意味で健全であって自己破壊を行なわない。それから芸術的創造ということが行なわれ続けるということが健全なのではないか。その健全の保証というものは現在見えてはいない。つまり、現在非常な混乱期ですからね。

金山 その点についてちょっと確認しておきたいことがあるのですが、先ほど、いわゆる counterculture 的なものが大衆文化化するというようなお話をありましたね。それで思いあたるのは、たとえば例のサイケとかポップとかいったようなものの商業化、それからヒッピー・ブルジョアというか、ヒッピーでありながらたいへんな金持ちであるという、そういうような現象はどういうふうにお考えになりますか。

北沢 ヒッピーなどはある種の運動、movement だと言えますが、その中には非常にさまざまな要素がある。それからその周辺的な部分には、それこそシャロン・テート殺しのような非常に病的な現象もあり得ると思うのです。それからまた他方では、そういうヒッピー的現象がコマーシャル化されて、それこそニューヨークやサンフランシスコに行くとヒッピー用品を集めたマーケットがあったり、それが中産階級の子弟の間にも浸透して一種の風俗現象になっちゃっているとかそれからさらにそれを commercialism が利用するとか、いろいろな多種多様な問題を含んでいると思う。だからそういう marginal なところから見ていけば、いま言ったようにいろいろ病理的な現象もあれば、それから健全の尺度をどこ

に求めたらいいかということは問題だけれども、一般的にいって健全な現象もあることはたしかに事実なんです。

金山 それからさっきジョン・ケイジの名前が出ました。彼の作品に「3分何十何秒」というのがありますねピアノの前に坐って何もしないでふたあけてまたしめてという、ああいうのは音楽の中心部分になるわけですか。

北沢 ケイジが始めたのですけれども、いまそういう前衛的な部分で、いわゆる environmental arts (環境芸術) という運動がある。それはつまりいま言った counterculture の中の今までの一番 classic な文化から出てきたところの前衛部分だろうと思うのですが、彼らの主張というのは、たとえば演劇でいえば、いままでは劇場という密室の中で環境から、それから街頭から切り離されたところで演劇がつくり出された。ところがそうではなくて、まさに街頭と接続するところ、あるいは街頭であってもかまわないし、それから、かつ、音であれば、そこにいろいろな生活の物音や騒音が入ってきてかもまわない。だから、それと対決し、またそれを組み入れるという形で環境の中の芸術が入り込んでいく、かつ芸術によって今度は逆に環境を変えていくというわけで、まさに芸術を環境の中に解放しつつ環境を変革していくという要素、つまりそれは芸術でなくてもいいわけで、風俗でも何でもいいのだけれども、だから counterculture の健全な部分というのは、自分自身をそういう環境の中に解放していくことによって逆に環境を変えていこうという、そういう運動だろうと思うのです。

金山 そういうことを考えると、先ほどおっしゃられたアメリカにおける puritanism の伝統というものがやはり問題になるように思うのですが、歴史的にみて、たとえば現在ボルノブームというようなささか風俗的なレベルで受け取られている現象は、そういったアメリカにおける puritanism の伝統というものを断絶せしめるものですか。それとも、そういうものは表面的なことであって puritanism は依然として生き残るだろうというのですか。

本間 Puritanism の伝統というものをどういうふうに考えるかということがまず問題でして、一般に、アメリカは物質主義の国だと言うわけです。そしてアメリカに文化なしということを言う。そう言っておいて、そのあとすぐ、アメリカは puritanism の国である。アメリカはそんなに puritanism の伝統が強いのだったら、それじゃあ物質主義ということはどういうことになるのだという問題があるわけです。それを説明する一つのしか

たは、puritanism であるからこそ資本主義が生まれ、資本主義は物質主義である。間に資本主義ということを入れると説明がつくようなところがあるのです。Puritanism の伝統というのはそんなに強いかということが一つ問題なんで、たとえば先ほど言ったように、1920年代に映画が非常に盛んに起きてきて、映画というのは今日の商業的なセックス・ブームをつくったわけですね。しかし、そういう映画というのは puritanism の伝統があったとしても、外から主として出てきているはずなんです。だから puritanism があったから一たんボルノ解禁になったら徹底的に今度はむき出しの sex を追求するのだという説明のしかたというのはちょっと無理があるのではないかと思うのです。どの道いまお話を出したように、いわゆるボルノブームみたいなものは商業主義であって、これはもうすでに少し落ち目なんじゃないかと思われます。

ただ、むしろもっと根本的な問題は、puritanism と、それから移民たちの例の「アメリカの夢」ですね。アメリカへ行ってせっせと働けば暮らしあはよくなるのだという考え方ですね。それと結びついたような形でのよく働きという、そういう生活観ですね。それがどうなるかという問題のほうではないですか。

現代社会の可能性とアメリカ

金山 さてそれで、いよいよ非常に重要なしかも現代的な問題にわれわれの議論を導くことになりますが、働き、働きという puritanism と、それから物質主義というものの中間項に資本主義を入れるとまことにうまく説明がつくのだというお話があった。考えてみれば日本も似たような事情にあるのではないか。というのは、外国人が日本について議論するときに、日本というのは economic animal だと一方で言っていると思うと、いや、非常に儒教的な伝統が強い国だと、何かわけがわからない。ところが間に資本主義というものを入れるとうまくいくんだというようなことがある。たしかにアメリカと日本というのはこれまた一面的なとらえ方かもしれないけれども、似ているところが非常にあるのであります。たとえば科学技術というものに対する態度はアメリカと日本は非常に積極的だと思うのです。そのおかげをもちまして、われわれはアメリカとも経済の高度成長を試み、そしてまた非常に大きな成果をあげてきた。ところがそのやり方としては、いわゆる効率中心、生産中心といったようなものがあって、アメリカ人と日本人は働き、働きで、ネズミ競争のまっただ中に投げ込まれた。

そして、いまや技術中心の社会にわれわれが取り込まれる時代になってきた。そういったようなところで、一体これをアメリカ文化なり、あるいは日本文化なりの中でのどういうふうに受けとめるべきであろうかというところに、まことに深刻な問題があるよう気がするのですが、その点、北沢先生いかがですか。

北沢 そういう情報化と呼ばれているような新しい技術社会の進展ですね、それはある意味では避けようのない事態だと思うのです。ただ、そういう科学技術というものを使うのは人間のほうであり、社会のほうなわけです。ですから科学技術がいつもそういう意味で両刃の剣であって、いいほうにころぶか、悪いほうに作用するか、それはほんとうにばかとはさみは使いようではないけれども、人間と社会の問題だと思うのです。ところが同じような、たとえばそういう技術的な進展の度合があるとしても、アメリカの場合には実際に政治的にいっても地方分権が発展しているし、それからさっき言ったように、それこそ今後文化的な地方分権というか、そういう ethnic groups の主張がだんだん強まっていくということがあるだろうし、また期待されるわけですけれども日本の場合は地方分権もないし、いわゆる 3割自治ということで美濃部さんあたりが一生懸命抵抗しているけれども、なかなかその抵抗も有効性がないというようなところで、それからまた文化的にいっても、ほんとうに画一化のほうがむしろひどいのであって、だからたとえ同じ条件であっても日本はそれこそ dis-utopia というか、そちらのほうにいく危険性が非常に大きいと思うのです。だから同じように現代社会の条件といっても、つまりその行く先というか、方向というものは日本とアメリカを比べてみた場合にも、どうもだいぶ差があるような気がします。

本間 アメリカの中にも悲観論があることはあるのです。アメリカはあまりにも画一化されていて救いなしという意見もずいぶんあることはあるのです。ただ、これは比較の問題で、それじゃあ世界を見渡してみて、産業文明が技術的な発展を遂げて、それが生み出した問題のたためにいま苦しんでいる社会の中で新しい可能性をさぐっているという状況を見渡した場合に、可能性はどこが大きいかということになると、これはやはりアメリカであるといって大体間違いないのではないかと思うのです。

金山 なるほど言われてみると、日本の社会の動き方というのは非常にあぶないところがあると思いますね。ブームというか、一方向性の膨張主義によって動かされることがあると思います。振子の振幅が非常に激しいということですか。ところがアメリカも、たとえば禁酒法

にみられるように、非常に思い切ったことを、それこそ善悪の二値的な判断でやるとか、あるいは人種問題でも白か黒かというような命題があるような気がするのです。こういうことをみるとアメリカもなかなか振幅が大きいのではないか。先ほどご指摘のように、なるほど地方主義的なところ、あるいは集権が強いということもあるかもしれませんけれども、そういう点はどういうふうにお考えになりますか。

北沢 日本人は熱しやすくさめやすいといっておりますけれども、だからたしかに日本も振幅があるし、アメリカも振幅があるけれども、その質が根本的なところでずいぶん違うのではないかと思うのです。たとえばベトナム戦争に対する態度なんていうのは、やはりアメリカ人が昨年ぐらいですと 80% は反対しているわけです。何がそう変化させたかというと、まず根本的に、道徳的に間違っているのだというところから大多数が反対を表明するわけです。初めは少数派だったけれども、彼らが道徳的に告発し続けた結果、世論が動かされたようになった。ベトナム戦争は、他の人間、他人種に対する不正である。それがやはりアメリカ人の判断だと思うのです。ところが日本がかつて日中戦争なり太平洋戦争なりでやってきたけれども、まさに不正を行なったとか、あるいは不正をやっているという意識で戦争が告発されたことはほとんどないわけです。だからかりに日本が海外を再び侵略したとしても、アメリカのような形で反戦運動が起こるかどうかというのははなはだ心もとないです。

金山 ただぼくは、ちょっと先生のとは違って次元が低いのですが、こういうことを考えるのですね。先ほど技術主義ということが問題になったのですが、日本人の場合には、こういうふうに公害だ、福祉ということになると、非常に振子の振幅が激しくて、何か物をつくるのは一切悪いのだというふうに少なくとも頭の中が動くような気がするのです。そういう点からいようと、日本のほうが anti という精神的態度が強いような気もするのです。

北沢 ぼくはいまの段階では日本では全面的な anti も必要だと思いますからそれも大いにけっこうだと思っておりますけれども、ただ、いま言った問題を比較してみると、日本人の場合には反応が非常に情緒的なわけで、もし欠点があるとすれば、非常に情緒的、情念的であるにとどまっちゃっているという、そういう側面だと思うのです。

金山 ベトナム戦争に対するアメリカ自身の自己反
(p. 40へつづく)



ON LINGUISTICS AND APPLIED LINGUISTICS

Robert B. Kaplan

Professor William Mackey, in his encyclopedic work entitled *Language Teaching Analysis*,¹⁾ remarks that "language teaching is influenced by ideas on the nature of language, by ideas on the particular language being taught, and by ideas on how language is learned." For purposes of this discussion, it is assumed that *linguistics* is concerned with the theoretic study of language; with the elucidation of a grammatical model which will account for all and only the grammatical structures of any given language, as Chomsky says. To put it in a slightly different way, as Chomsky and Halle have stated in the first chapter of *The Sound Patterns of English*,²⁾

General linguistics attempts to develop a theory of natural language as such, a system of hypotheses concerning the essential properties of any human language. These properties determine the class of possible natural languages and the class of potential grammars for some human language. The essential properties of natural language are often referred to as "linguistic universals."

For purposes of this discussion, it is assumed that *applied linguistics* refers to a broad range of activities essentially involving human beings in communication situations; the activities derive basically from assumptions about human behavior. To put it in another way, applied linguistics is human centered while linguistics is language centered. One of the central activities which constitutes the core of applied linguistics is language teaching because language learning is one of the most human of activities and one of the most constant of human activities. H. R. Robins in his *Short History of Linguistics*³⁾ points out that

...in America, as in Britain, probably more effort is devoted to teaching methods, courses, and projects, than to any other single application of linguistic science.

Granted this distinction, it may be perhaps unfortunate that the last word in theoretical linguistics has frequently been the first word in applied linguistics. It may be unfortunate because *linguistics* and *applied linguistics* really deal with different subjects under different circumstances. If it can be assumed for the moment that language teaching is a significant (though scarcely the only) function of applied linguistics, and if it can be assumed that language teaching draws not only upon ideas about the nature of language, but also upon ideas about how language is learned, then it is clear that applied linguistics may draw as heavily upon such diverse disciplines as psychology, anthropology, sociology, even biology, as it does upon linguistics itself. Considering for the moment only the area of psychology, there are at least two major, somewhat conflicting, theories of language learning competing for attention today. Leon Jacobovits, in an unpublished report prepared for his colleagues at the University of Illinois in 1968⁴⁾ summarized the situation rather well:

Two theoretical approaches take up most of the attention of language teachers today. One, the habit-skill approach, views language behavior as a chain of habit units, the main problem in teaching being defined as making these habit chains automatic. The other, the rule-

3) (London: Longmans, Green & Co., 1967), 232.

4) "Research Findings in Language Learning and Teaching with Reference to Foreign Language Requirements in Colleges and Universities," a report prepared...for the LAS Committee on the Foreign Language Requirements (Urbana), 1-2.

1) (London: Longmans, 1965), x.

2) (New York: Harper and Row, 1968), 4.

governed behavior approach, views language competence as the ability to generate novel utterances on the basis of a finite set of rules, the main problem in teaching being defined as imparting adequate knowledge of these rules. The habit-skill approach emphasizes oral practice techniques with a minimum of explanation of grammar rules....The generative approach discounts the usefulness of traditional concepts in learning theory such as practice, conditioning, reinforcement, and instead, concentrates on arranging the linguistic input to the learner in a way that would maximally facilitate his acquisition of structural patterns and rules....Both the generative approach and the habit-skill approach on the nature and structure of language theory on the nature and structure of language relying on generative transformational theory and contrastive analysis. Both tend to give greater emphasis to speaking and understanding....

A number of scholars have pointed to certain limitations in both concepts of learning. As early as 1966, John Carroll was calling attention to some of the problems.⁵⁾

What is needed... is a profound rethinking of current theories of foreign language teaching in the light of contemporary advances in psychological and psycholinguistic theory. The audiolingual habit theory which is so prevalent in American foreign language teaching was, perhaps, fifteen years ago in step with the state of psychological thinking at the time, but it is no longer abreast of recent developments. It is ripe for major revision, particularly in the direction of joining it with some of the better elements of the cognitive code-learning theory. [Italics added.]

Quite the contrary, both theories have been proceeding, side by side, in competition with each other, and not joined at all. In a recent article in the *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching (IRAL)*⁶⁾ Fran-

cisco Gomes de Matos reports on a study of claims in language textbooks about the "linguisticality" of the contents and about the learning theory implicit in the structure. He is able to show that many of the claims, on both sides, are simply false in terms of the real content of the books. The evidence continues to illustrate that the two theories are, in practice, competitive.

Language teachers and authors of language textbooks have tended to pay lip service also to the theoretical bases of anthropology, sociology, and biology as these disciplines are applicable to language teaching in the narrower sense and to Applied Linguistics in the broader sense. The unfortunate situation has been supported by textbook publishers, who seem to be much happier with a book if it at least claims that it is based upon a linguistic theory, and by linguists themselves. As Chomsky said in his comments to the Northeast Conference on the Teaching of Foreign Languages in 1966, "Linguists have had their share in perpetuating the myth that linguistic behavior is 'habitual' and that a fixed stock of 'patterns' is acquired through practice and use as the basis for an 'analogy.'" And Carroll, in the article already cited above, writes "Let me point out that neither the audio-lingual habit theory nor the cognitive code-learning theory is closely linked to any contemporary psychological theory of learning.... Actually, neither theory takes adequate account of an appreciable body of knowledge that has accumulated in the study of verbal learning...." (104) Still the myth persists that audiolingual habit theory is somehow inextricably tied to structuralist linguistics and that cognitive code-learning theory is somehow significantly related to generative transformational theory. In fact, what seems to have occurred is what is known as a *post hoc, ergo propter hoc* fallacy—a fallacy based on sheer chronological accident. This fallacy has been in large part responsible for the dilemma in which the language teacher now finds himself—the dilemma in which the last word in theoretical

5) "The Contributions of Psychological Theory and Educational Research to the Teaching of Foreign Languages," *Trends in Language Teaching*, ed. Albert Valdman (McGraw-Hill), 105.

6) "Linguistic Claims in English Language Teaching" IX/3 (1971), 209-217.

studies is often the first word in application.

I want to claim that applied linguistics is a separate and viable field with a *raison d'être* of its own, and I want to claim that it is high time that language teachers and other participants in applied linguistics (like sociolinguists and psycholinguists and language planners) began to seek to define applied linguistics as a discipline separate from theoretical linguistics and significantly different from theoretical linguistics. I want to claim, perhaps extravagantly, that only the semantics implicit in the term *linguistics* which occurs in both titles constitutes the real link, just as there is only a semantic link between what happens in traditional *English* studies and in *English as a second language*. Let me in the remainder of my time try to justify my claims.

First, it can be demonstrated that second-language learning is quite different from first-language acquisition. While little is yet known about the phylogenically conditioned mechanisms which are responsible for first-language acquisition, it is fairly clear that all human beings within the normative ranges come equipped with such a mechanism and that the mere presence of a linguistic environment is sufficient to trigger the mechanism. It is further recognized that the mechanism is not language specific but that the linguistic environment specifies the mechanism toward one or more languages. Second-language learning commonly occurs at a somewhat more advanced stage of maturation; at a very late stage in the case of the adult highschool or college student. It is possible that first-language acquisition involves certain motor activites which perhaps are strung together in necklaces of acts comparable to what is known in biology as "path learning." Second-language learning commonly occurs at a stage of maturation when motor-skills acquisition may already be in partial atrophy. Furthermore, second-language learning, as it is commonly induced in most societies, is a function of the formal educational process; that is, it normally occurs in a school environment. Granted these differences between first- and second-language reception, it is

possible that neither audio-lingual habit theory nor cognitive code-learning theory are individually applicable.

Second, because second-language learning occurs at a different time and in a different learning environment, it may be considered to fall into the same basic learning-classification as other skills which are acquired at comparable stages of development and in comparable situations; that is, it may at least in some senses be considered a skill. It is generally recognized that skill acquisition in normative populations tends to distribute over a normative scale; that is, within a given population, not all individuals have the same capabilities for the acquisition of any given skill. Some individuals may acquire any given skill easily, others with greater difficulty, and some not at all. Second-language learning seems to fall out in exactly this way.

Third, there appear to be a number of external (non-linguistic) factors which influence second-language learning and which are reflected in the distribution of the capability to acquire linguistic skill. These external factors can be roughly subdivided into three basic categories: aptitude, attitude, and motivation. Aptitude has already been discussed briefly. If one assumes some model of the human intelligence like the one posited by Guilford, a model in which a relatively large number of factors operate and in which different factors combine in different configurations to constitute any particular aptitude, then the empirical evidence of variable capability to learn may be at least partially explained. But in addition to the operation of a number of intelligence factors, one must take into account the purpose for which language is learned, the desire of the learner to learn it. Lambert and his colleagues working with bilingual populations in French Canada have demonstrated intrinsic and extrinsic motivation in second-language learning. In one case, if the learner desires to be like the pseakers of the language he is attempting to learn, if he wishes to identify with them in significant ways, learning seems to proceed rather rapidly and effectively; in the other

case, when the learner's desire is based upon incidental (economic or other non-essential) motives, then learning proceeds slowly if at all. Quite aside from motivation, the learner's attitudes toward the community of speakers of the language he is trying to learn constitute still a third dimension to the problem. The issue of attitude is more ephemeral in the sense that it may change drastically any number of times within the individual's learning-life; that is, his attitude may be modified by immediate political changes, by temporally proximate encounters with members of the target-language community, and by other virtually accidental events even including the transmission of bias or prejudice through another incidentally related individual. Societal attitudes and peer-group pressures may modify attitude rather rapidly. These three variables—aptitude, attitude, and motivation—may individually or collectively influence the distribution of individuals along a learning curve. Regrettably, none of these variables is at present measurable in any meaningful way, although Paul Pimsleur, John Carroll, and others are presently working on such measurement instruments.

Fourth, there are political factors to consider. As Richard Noss has pointed out⁷⁾ in his article "Politics and Language Policy in Southeast Asia," and elsewhere the terminology employed to describe the status of languages in a given population is politically derived. Noss cites three kinds of governmental language policy: 1) *Official language policy*—which he defines as "the practice of government as to which language is recognized and for what purpose;" 2) *Educational language policy*—which he defines as "the practice of responsible authorities who control public and private education concerning the use of language media and the teaching of language as various levels: i.e., what they require,...allow,...forbid, and...provide;" 3) *General language policy*—which he defines as "the practice of government in re-

gard to sponsoring or condoning the use of language in sectors other than education..." He further distinguishes among *national languages*—indigenous languages identified by government as principal; *vernacular languages*—any indigenous languages other than the national language; *foreign languages*—"any other language relevant to educational language policy of some kind." The term *second language* he defines as any non-indigenous language to which a government gives special prominence, but he further points out that the term is different in the sense that it cuts across the three other categories and is not of the same order; for example, the national language may be second language for significant segments of the population of a given country. Thus, a *national language*, a *vernacular language*, or a *foreign language* may be designated a *second language*. The terminology has no linguistic reality, and the policies of government not only define the terms but by their definition influence attitudes toward the community of speakers of that language and thus—directly or indirectly—the attitude of the learner.

Fifth, social and economic factors within a society must also be considered. For the sake of simplicity, dialect will be used as an example, although everything said of dialect in this discussion is equally true for language. In the United States there are a relatively large number of geographic dialects and, it has recently been recognized, a significant number of social dialects—all variations of English. Certain sections of the country are, in the folk ethic, regarded as being marked by certain characteristics; thus, the geographic dialect of New England has prestige value for certain purposes in the United States especially following the death of President John F. Kennedy. By the same token, there appears to be a rather rigorous stratification by social dialect. (See, for example, William Labov, *The Social Stratification of English in New York City*.) Certain characteristics of the speech of the American Black, even on the telephone, serve as cues for social response, as do certain characteristics of the speech of the Mexican-

7) "Politics and Language Policy in Southeast Asia," *Language Science*, No. 16 (August, 1971), 25-32.

American and the American Indian. In many countries, the same sort of phenomenon may be observed in relation to the dialect of the capitol city as opposed to the dialects of the provinces, or in relation to the native language as opposed to one or more vernacular languages. These geographic and social attitudes in the populace, especially in instances where they are of long duration and well established in the social order, may affect the attitude and motivation of the language learner. Thus, Lambert's studies in French Canada demonstrate a greater willingness on the part of native speakers of French to learn English than on the part of native speakers of English to learn French where and when English is assumed to be the prestige language. (Political factors may, however modify such willingness dramatically.)

The audio-lingual habit theory or the cognitive code-learning theory taken individually cannot account for the variables which affect second-language learning. Taken collectively, the two theories, with considerable modification, may account for a greater number of the variables than either of them can individually. However, there is still another dimension to the problem. Essentially three different approaches to the description of language have occupied the attention of teachers during the past quarter of a century: the so-called traditional approach, the structuralist approach, and the generative transformational approach. It would probably be incorrect to view these three concepts as existing along a continuum; they really seem to be quite different ways of looking at the structure of a language. It would be pointless to review the three in detail here; not only would the attempt be too time consuming, but the job has been better done elsewhere. (If I had to pick three and only three books about English for such a purpose, I would be inclined to pick Otto Jesperson's *Growth and Structure of the English Language*, W. Nelson Francis' *Structure of American English*, and Jacobs and Rosenbaum's *English Transformational Grammar*.) Suffice it to say that the traditional grammar approaches language analysis from the point of view of a Latin ideal model, the struc-

turalist approach depends essentially upon a description of a given language in its own terms, and a generative transformational approach comes at a language through the linguistic universals which it has in common with all other languages.

There are two related problems involved with these three views of language. The first of the problems is perhaps the more serious from the view of the applied linguist. Each of these approaches attempts to describe the formal idealized structure of a given language; indeed, while the concept of the idealized speaker/hearer is Chomskian in its inception, it has in a sense constituted the basis for all formal language analysis. But the performance of real speakers in real "speech acts,"⁸⁾ a term which I use in the same sense in which Sircello used it, has very little to do with the competence of an idealized speaker/hearer. In other words, a *formal theory*, whether of language or of anything else, is, in the very sense that it is elegant, circular. In his book *The Structure of Scientific Revolutions*⁹⁾ Thomas Kuhn develops the concept of what he calls a "paradigm" in which he shows that a theory regulates the acceptability of other problems by denying or affirming their reality simultaneously and regulates the acceptability of instruments while it provides a demand for new ones along with the guidelines for their capabilities. By the same token, a formal grammar defines what shall constitute that grammar and simultaneously prescribes what is and what is not grammatical. The three views of language which have claimed the attention of scholars during the past quarter century have each operated in this circular way, each claiming a certain power. Since all three really are categorically different, comparisons among them are fruitless. There is little question that the transformational generative model is the most elegant, and at least in that sense the most powerful. But, because its elegance is evident, that does not prevent its circularity.

8) The term is used in the sense in which G. Sircello uses it in "Expressive Qualities or Ordinary Language," *Mind*, 76 (1967), 548-555.

9) (Chicago: Phoenix Books, 1964.)

Formal theories of language, in order to be elegant, define certain features out of existence. Structuralists, for example, refused to concern themselves with meaning, and transformationalists only lately have begun to work with semantic restrictional rules. But there are still whole vast areas of language that have not been included even within the most powerful of theories. For example, empirically speaking, no sentence ever exists outside of a context, and it is the context which accounts for many of the grammatical features in the sentence. But linguistic theory, at least in the United States and with certain very minor exceptions, has restricted its concern to the sentence. Obviously, no theory has concerned itself with the paralinguistic features of gesture, proxemics, and such matters; but more importantly no theory has really yet concerned itself with discourse. Now, while theoretical models may generate single sentences, live students tend to want very much to generate discourse and tend to be very much concerned about semantics and about the paralinguistic features of both the language they know and the target language. The applied linguist must deal with the realities of the language. It seems to me that one of the most inhibiting features of early audio-lingual technique was its artificiality in terms of the kind and amount of language the student was permitted to produce. Language is, at least in some senses, a significant mechanism for communication. (I believe it has another vital function, but that is not relevant to this discussion.) The applied linguist must deal with language as a mechanism for communication and not as an isolated model. In dealing with language in communication, the language teacher must concern himself constantly with the features of language which may have been excluded from the theoretical model. The language teacher cannot be concerned with the elegance of the theory because he must include in his teaching what the elegance of the theory may have defined out of reality.

Applied linguists, and language teachers in particular, cannot be concerned with the elegance

of a theory; rather, they must be concerned with the effectiveness of a teaching strategy. If I may be forgiven for the inept use of a metaphor, perhaps a language teacher ought to espouse some of the doctrines of Buddhism. Buddhism, I believe, posits an eight-fold path to the attainment of Nirvana. If I may be permitted to compare the learning of a second language to a form of Nirvana, perhaps the language teacher ought to seek the eight-fold path. To deviate from the metaphor slightly, it matters little which path one takes so long as the ultimate objective is reached. What I am trying to suggest is that no single theoretical view of language may provide all the answers necessary to successful language teaching, just as no single learning theory may account for all—or even a significant number—of the variables involved in language learning. The language teacher does not need to be a linguist; indeed, it is better if he is not a linguist because if he is a linguist he should be teaching linguistics and not a language and if he attempts to teach a language he may teach his students more language theory than language use. Certainly the language teacher ought to know something about linguistics; he ought to be aware of the findings of as many theoretical models as he can afford to study. Such an awareness will make him a better teacher because it will increase his knowledge of the operations of the language he is teaching and of language in general, because it will allow him a broader range of information from which to draw his teaching, and because it will open to him a variety of strategies to accomplish his teaching. The more the language teacher knows about the language he is teaching, the more effective he may be in teaching it. That is something of a generalization because the same variable factors which affect learning also affect teaching, and the teacher is—just as the student is—a product of the socio-cultural environment.

In summary, then, there are several learning theories and several language theories which have occupied the stage of Applied Linguistics during the past quarter of a century. By semantic fallacy

and logical error, individual learning theories and language theories have been linked. Each of the theories has something to contribute to applied linguistics, but no one of the theories by itself can account for all or for a significant proportion of the variables involved in the complex activity of language learning. (Chomsky himself has on several occasions questioned the applicability of transformation theory to language teaching.) It is the function of the applied linguist and of the language teacher as an applied linguist to do what the title of his discipline implies: to apply the findings of linguistics—all of them that can possibly have any pragmatically defined utility—to the strategies of language teaching. It is not the business of a language teacher to become a linguist, nor is it the function of the linguist to become a language teacher. Rather, their functions are complementary; the linguist provides theoretical models from which the language teacher can draw, and the language teacher discovers the problems which can help the linguist to test his theories and to devise new ones. If one credits this separation of interests, then it seems to me that one must—recognizing the existence of theoretical postures in linguistics—concede the necessity for an independent theoretical position for applied linguistics, including, but greater than, any theoretical linguistic model.

In the King James Bible, it is written:

And the whole earth was of one language,

and of one speech. And it came to pass, as they journeyed to the east, that they found a plain in the land of Shinar; and they dwelt there....And they said, Go to, let us build us a city and a tower, whose top may reach unto heaven....And the Lord came down to see the city and the tower, which the children of men had builded. And the Lord said, Behold, the people is one, and they have all one language; and this they begin to do: and now nothing will be restrained from them, which they have imagined to do. Go to, let us go down, and there confound their language, that they may not understand one another's speech....[Genesis 11:1-9.]

In this brief and cursory presentation, I have tried to indicate that it is the business of linguists to examine each of the languages that has developed and to trace those languages back to their common ancestry, and to try to find the universals of that ancestry which may have survived in the offspring languages. It is the job of the linguist to do the work of the Lord. But the applied linguist has a greater and a nobler task. His task is to bring the children of men back not to one language but to mutual understanding. It is the job of the applied linguist to undo the Lord's mistake. I ask you to join me in that undertaking, and I ask you to formulate the principles on the basis of which we may move ahead. Thank you. (A paper delivered at ELEC, June 21, 1972)

(Professor, University of Southern California)



Mother Goose の世界

—雑感的序説（その10）—



HIRANO KEIICHI
平野敬一

口承と活字

伝承童謡というものは、ほんらい作者不詳（少數の例外はあるが）の口から口へと伝承されてきた童謡のことだから、どの唄をとってみても、その唄の決定版的な最終的な形というものは、ありえない。古い文献例が現存しているばあいでも、それは口承されてきたもの一つの version にすぎない。一つの唄には、通常いくつかの別形があり、それがまたたえず変動をしているのである。そういうさまざまの versions の総体がその唄なのであり、活字にされ印刷されているのは、その総体のごく一部分にすぎない。たとえてみれば、活字になっているのが氷山の海面上の部分、実際に伝承されているさまざまの versions がその海面下の部分——というふうにとらえることもできるのである。

Opie 童謡集の限界

Opie 夫妻には *The Oxford Nursery Rhyme Book* (1955) (以下 *ONRB* と略す) にはほぼ 800 篇の伝承童謡を採録しているが、その 800 篇の背後には陽の目をみなかった何千篇あるいは何万におよぶさまざまの versions の蒐集があったはずである。蒐集したものを無差別に羅列することはもちろん不可能であり、どの唄のどの version を採るかというところに、編者の力値、教養、人がらなどがおのずとあらわれる。自動的に取捨選択が行なわれるわけではない。わたくしは本稿で童謡を引用するとき、可能なかぎり Opie 夫妻の version に従うのを原則としてきたが、それは便宜上そうしているにすぎないのであって、Opie 夫妻の掲げた形を “authorized version” と考えているからではない。

Opie 夫妻の伝承童謡に対する態度¹⁾は愛情にみちたものであり、個々の唄についての解釈や判断は、けっして奇

にはしたことなくおおむね穏当なものである。ただ強いて難をいうなら、この夫妻の取捨選択の基準に 2 人の人がらが反映しそぎてあるところがあり、その点がときどきわたくしには気になるのである。たとえば Webster 大辞典の第 3 版と比べてみると、Oxford 系の辞書がもっているあるつつましさ——prudery とでもいいうべきもの——がはっきりするが、Opie 夫妻の仕事にもそういう性格がある（それは版元の Oxford 大学出版局の性格であろうが）。伝承のどの唄のどの version を採りどれを捨てるかという判断にあたって、Opie 夫妻は、おそらくほとんど無意識に、ある道徳的なものさしを適用している。いくら広く流布している唄でも、その内容が健全な市民社会の通念に著しく反するばあい、Opie 編童謡集にはいることは許されない。夫妻はけっして道學的でなく、その態度はむしろ柔軟といつていのだが、世間の respectability というものを無視することをけっしてしないのである。とうぜん夫妻は下がかった唄や下がかった解釈を受けつけないし、極度にグロテスクなものも好きでない。したがって夫妻によって集大成された伝承童謡は、夫妻のふるいにかけられた、あるいは夫妻のめがねにかかった伝承童謡という性格（と限界）を有しており、実際に伝承されている伝承童謡の姿を必ずしも正確に反映するものでないという批判も成り立つのである。現実に伝承され多くの人に知られていないながら、Opie 夫妻の童謡集から縮め出されている唄も少なくない。たとえばこんな唄がある。

Lizzie Borden took an axe,
Hit her father forty whacks,
When she saw what she had done,
She hit her mother forty-one.
(リジー・ボルデンはまさかりで
おやじを40回めった打ち。
そのあとでこんどは
おふくろを41回めった打ち。)

1) この点についてはさらに拙稿「オーピー夫妻と伝承童謡」(『ほるぶ新聞』第138号〔昭和47年6月15日〕) を参照していただきたい。

内容からいえば、話にならぬほど残酷な親殺し (fratricide) の唄である。Opie 夫妻の童謡集にはもちろん収録されていはず、そのためこの唄について、その初出文献や背景などのデーターをわたくしたちは詳らかにしえないのである。ところが、この唄は英語圏では広く流布しており、過日筆者がイギリス人の S 夫人とラジオで対談をしたさいも、S 夫人はどこでだれに習ったかはっきりしないが、いつのまにかおぼえた唄の一つとして、このリジー・ボルデンの唄を紹介し朗読してくれた。いまわたくしの手もとにある童謡集でこの唄を採録しているのは、Alexander Calder のモダン・アート風の挿絵で人気の高い J. J. Sweeney 編の *Three Young Rats and Other Rhymes* (1944)²⁾ だけである。Sweeney 編の童謡集を Opie 夫妻は知らないはずはないし、広く流布しているこの唄のことも充分知っているはずなのだが、要するに夫妻のめがねにこの唄はかなわない、ということなのだろう。

「悲劇的で無気味」

アガサー・クリスティーはその 2 幕ものの戯曲 *The Mousetrap* (「ネズミ取り」)³⁾ の中の一人物に “I adore nursery rhymes, don't you? Always so tragic and macabre. That's why children like them” (「ぼくは童謡が大好きなんだ。どれも実に悲劇的で無気味だからね。子供が好きになるのも無理ないな!」)といわせているが、人一倍マザー・グースの唄を愛用してきたクリスティー女史のいうことだけあって、これはマザー・グースの唄の本質をばりと突いたせりふとなっている。「悲劇的で無気味」というのはマザー・グースのまぎれもない特質の一つである。だからこそ子供が惹かれるのだと言ひきってしまうと、いやいやそれだけでないと反論もしたくなるが、マザー・グースの世界のふしきな魅力の一部がそういう無気味さの中にあることは、ここで繰りかえすまでもなかろう。

このリジー・ボルデンの唄以上に「悲劇的で無気味」な唄に次のような例がある。

My mother has killed me,
My father is eating me,
My brothers and sisters sit under the table
Picking up my bones,

2) Published by The Museum of Modern Art, New York.

3) *The Mousetrap—A Play in Two Acts* (1952). 南雲堂版 (坂本・来住編注) あり。引用は同書 p. 17 より。

And they bury them under the cold marble stones.

(おふくろが私を殺した,
おやじが私を食べている,
弟や妹たちはテーブルの下に坐って
こぼれ落ちた私の骨を拾っている,
冷たい大理石の下に埋めようというんだ。)

これも上述の Sweeney 編の童謡集に採録されているものだが、macabre という点ではちょっと類がない。Opie 夫妻はもちろんこんなグロテスクな唄を認めないが、Sweeney が解説で言及しているように、これは伝承の唄の中では “classic” に属するいわば由緒ある唄なのである。Opie 夫妻がこの唄を採録しないのはこの唄があまりにもグロテスクだというせいもあるだろうが、この唄がほんらい童謡ではなく民話の一部だったからかもしれない。この唄はイギリスでは “The Rose Tree”, ドイツでは “Machandelboom” (=Juniper tree) という題名の、繼母が先妻の子を殺害する民話⁴⁾に由来している。繼母に殺されバラ (あるいはネズ) の木の根もとに埋められた娘 (ドイツ民話では息子)⁵⁾ が変身して鳥となり、その鳥が歌う唄がこの唄の原型なのである。イギリス民話の “The Rose Tree”⁶⁾ の中では次のようになっている。

My wicked mother slew me,
My dear father ate me,
My little brother whom I love
Sits below, and I sing above
Stick, stock, stone dead.

(意地悪の繼母が私を殺し、お父さんがその私を食べ、愛する弟がこの樹の下に坐っている。そして死んでしまった私は樹上で歌をさえずっている。) Sweeney が採録している version にきわめて近い形を、Jacobs は *English Fairy Tales* の巻末ノートにあげており、それが 19 世紀に英語圏で広く流布していた唄であることを明らかにしている。ドイツ民話と、このイギリス民話とが根を同じくすることは明らかであるが、いまはこの問題にこ

4) 邦訳「杜松(サ)の話」は角川文庫『グリム昔話集(2)』(関敬吾・川端豊彦訳) その他に、英訳 “The Juniper Tree” は Puffin Book の *Grimms' Fairy Tales* (Penguin, 1948; reissued 1971) その他に所収。

5) Sweeney 編童謡集の挿絵では男になっている。

6) *English Fairy Tales*, collected by Joseph Jacobs (1898) による。

れ以上立ち入らない。ただグリムがよりどころにしていたドイツの伝承の世界とマザー・グースの世界とのあいだに予想外の親近性があることに注意を喚起したい。

(アンデルセン童話の世界はこの点マザー・グースとのつながりは薄い。)

とにかく残酷なグロテスクなものを Opie 夫妻は好まない。前述したように夫妻は Sweeney 編の童謡集のことを知らないはずはないのだが、そこに採録されているアグの強い唄はほとんどすべて夫妻編の童謡集から除外されているのである。しかし、子供はおとなが考えるほど、こういうものに抵抗を感じない。むしろ、クリスティーがいうように、かえってそういうものに惹きつけられるのかもしれない。だから子供のあそび唄には、残酷な場面が平気で出てくる。たとえば

Mary Jane is no good,
Chop her up for kindling wood.⁷⁾

(メアリー・ジェーンはだめな子、
切り刻んでたきつけにしちゃえ。)

とか

If I were a Cassowary
On the shores of Timbuctoo,
I would eat a missionary,
Skin and bones and hymn-book too.⁸⁾

(もしほくがティンブクトゥーの
海岸に住むヒクイドリだったら、
宣教師を骨、皮、贊美歌集と
まるごとに食ってしまうんだが)

といった一見残酷な唄が、カナダの子供たちの間に遊び唄として伝承されている。しかし、こういう唄も、当の子供たちにとっては、無気味な唄というより、痛快な楽しい唄として受けとられているのである。

不敬と節度

Sweeney 編童謡集と Opie 編童謡集とのあいだの隔たりあるいは感覚のズレを調べてみると、なかなかおもしろい。Sweeney は Opie 夫妻と異なって “respectability” というものに対する顧慮がまったくないので、たとえば次のような唄を平気でのせる。

Here lies old Fred.

7) Edith Fowke. *Sally Go Round the Sun. 300 Songs, Rhymes & Games of Canadian Children* (Toronto, 1971), p. 119.

8) *ibid.*, p. 128.

It's a pity he's dead.
We would have rather
It had been his father;
Had it been his sister.
We would not have missed her;
If the whole generation,
So much the better for the nation,
But since it's only Fred
Who was alive, and is dead
There's no more to be said.⁹⁾

(ここに憩うはフレッド君。死んだのはお気の毒。死んだのがそのお父さんだったらよかったのに。また姉さんが死んだのならだれも歓かなかつたろう。フレッド君と同世代のやつらがみんな死んだのなら、それだけ国が助かるというもの。しかし、生きていたフレッド君が死んだということだから、なんにもいうことがない。)これは一説によれば、1751年に頭にテニス・ボールをぶつけられたのが原因で亡くなったときのイギリス皇太子 Frederick¹⁰⁾ を風刺した唄がもとになっているという。この唄は Sweeney の本のほか Baring-Gould 編の童謡集¹¹⁾にも採録されているが、こういうふうにイギリス王室を露骨に揶揄した唄を Opie 夫妻はあまり好まない (“Sing a Song of Sixpence” とか “Hark, hark, the dogs do bark” のように風刺のほこ先がそれほどはっきりしないもの¹²⁾、あるいは King Arthur や King Cole のような伝説的人物を歌ったものならかまわない)のである。したがって Sweeney その他が採録している次の Queen Anne (在位1702—14) の墓碑銘の戯作も、Opie 夫妻の童謡集にははいっていない。

I am Queen Anne, of whom 'tis said,
I'm chiefly famed for being dead...¹³⁾
(わたしはアン女王、世評によれば、
死んでいることで有名な女王…)

これは “as dead as Queen Anne” とか “Queen Anne

9) *Sweeney, op. cit.*, p. 180.

10) Frederick Louis, Prince of Wales (1707—51).

11) William S. Baring-Gould & Ceil Baring-Gould, eds., *The Annotated Mother Goose* (New York, 1962), p. 324.

12) それぞれ Henry VIII と William III を風刺したものと伝えられる。

13) *Sweeney, op. cit.*, p. 15; *The Annotated Mother Goose*, p. 134.

14) 「(その話は) もう古い」の意 (『岩波英和大辞典』)。

is dead”¹⁴⁾ という表現が成句として定着したあとで作られた唄と推定されるが、それにしても亡き女王に対しては不しつけな唄であることは免れない。これを採録した編者 Sweeney には若干 sacrilegious なところがあり、伝承童謡の編者としては Opie 夫妻などと同列に論じてはいけないのかもしれない。しかし Opie 夫妻編のいくつかの童謡集が充実しているながらもっているある限界に、おのずから照明をあたえてくれる点で Sweeney 編童謡集は貴重な存在であるように思われる。

Mother Goose Lost について

このように Opie 夫妻の集大成の網の目からこぼれ落ちたマザー・グースの唄のことをあれこれと考えることが多くなっていたところへ最近になってイギリスの出版社から *Mother Goose Lost*¹⁵⁾ という絵本が出たと聞いたのでわたくしは飛びつくようにしてそれを手に入れた。イギリスの童謡愛好家 Nicholas Tucker なる人が世間から忘れ去られた童謡のかずかずを「掘り起こし」(uncover), 「忘却から救った」(rescued from oblivion) という触れ込みだったので大いに期待したのだったが、これはいささか期待外れだった。Trevor Stuble による挿絵はなるほど美しいものだが、採録されている唄の数はわずか 31 篇、しかもそのほぼ半数は、Opie その他現在流布している童謡集に採録されているものである。「迷子になったマザー・グース」という意味の題名なのだろうが、「迷子」どころか、Opie の *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes* にちゃんと解説づきで収録されている童謡（たとえば “As I was going to Banbury/Upon a summer's day...” など）までがはいっているのである。編者 Tucker がいままで知らなかつた、というだけのことで、題名はいささか人をあざむく。しかし、それでも中には Opie その他のどの編者も見落したような珍しい唄もあるので、いくつか紹介してみたい。たとえばこういう唄がある。

This little man lived all alone,
And he was a man of sorrow;
For, if the weather was fair today,
He was sure it would rain tomorrow.
(この小柄な男は一人暮らし、／
悲しみの人だった。／きょう天気

がよくても／あすは雨天と信じこん
でいた。)

はるかに聖書の “a man of sorrows” (*Isaiah*, 53:3)とも呼応するところがあり、これはこれでおもしろい。あるいは

Alas! alas! for Miss Mackay!
Her knives and forks have run away;
And when the cups and spoons are going,
She's sure there is no way of knowing.

(ああ！ かわいそうなマッケイさん！
ナイフとフォークが逃げちゃった。
カップとスプーンがいつ逃げ出しか
分かったものじゃないと思っている。)

これは Tucker が新たに掘り出した唄ではなく、Baring-Gould の選集 (p. 317) などにすでに採録されている唄である。比較的新しく伝承童謡の仲間入りをした唄だと思われるが、あの有名なナンセンス唄 “Hey, diddle, diddle” の最終行 (“And the dish ran away with the spoon”) を想起させる。食器を擬人化したり、ときには派手な立ち回りを食器に演じさせたりする例は、イギリス伝承童謡のもっとも古い文献の一つである *The Famous Tommy Thumb's Little Story Book* (1760) にも出てくる。その一部をあげてみると

The dish jumped upon the table,
To see the pot swallow the ladle;
The spit that stood behind the door
Threw the pudding-stick on the floor.¹⁶⁾
(皿が食卓の上に飛びのった、
鍋が柄杓を呑み込むのを見るために、
戸のうしろに立っていた焼串が
攪拌棒を床に投げとばした。)

こうして並べてみると “Hey, diddle, diddle” でお皿がスプーンと駆け落ちするというのは、ある匿名童謡作家の奇想天外の発想というものでなく、ある意味で伝承童謡の伝統に即した発想であることが分かるのである。ナンセンスにちがいないが、あるパターンに即したナンセンスなのである。

15) *Mother Goose Lost. Nursery Rhymes collected by Nicholas Tucker with pictures by Trevor Stuble* (London: Hamish Hamilton, 1971).

16) *Mother Goose: The Classic Volland Edition* (1915) の version によった。Opie には採録されていない。

ナンセンスのパターン

ナンセンスのパターンといえば、カナダの子供の唄(1960年代のはじめトロントではやっていた)に次のようなナンセンス・ヴァースがある。

It was midnight on the ocean,
Not a street-car was in sight.
The sun was shining brightly,
And it rained all day that night.¹⁷⁾

(海上では真夜中だった、
電車1台見えやしない。
お日さまが照っていて、
その晩は一日じゅう雨だった。)

このでたらめ唄も、なにもない真空から突然発生したわけではけっしてない。マザー・グースの唄の中では古典ともいべき“Three children sliding on the ice/Upon a summer's day”¹⁸⁾ や、さらにルイス・キャロルの *Through the Looking Glass* の第4章に出てくる

The sun was shining on the sea
Shining with all his might.
He did his very best to make
The billows smooth and straight—
And this was odd, because it was
The middle of the night.
(お日さまが海に照っていた、
ちからいっぽい照っていた。
大なみのむれがなだらかに
かがやくようにと、こんかぎり—
そりゃあ、奇みょうなことだった
なにしろ真夜なかだったから。
——生野幸吉訳)

ではじまるナンセンス・ヴァースの古今の傑作の一つ ‘The Walrus and the Carpenter’ (‘セイウチと大工’)などと比べ合わせると、そこにはまぎれもなく一つのイメージあるいは発想の伝統があり、トロントの子供が口にする他愛のないでたらめ唄も、それなりに英語圏の伝

17) cf. Edith Fowke, *op. cit.*, p. 128.

18) 拙著『マザー・グースの唄』(中公新書)の中の解説を参照。さらにキャロルとマザー・グースの関係については拙稿「アリスの世界とマザー・グースの世界」(『別冊現代詩手帖・第2号』(1972年6月)所収)を参照していただきたい。

統に棹さしていることが分かる。ついボローニウスの口まねをして “Though this be nonsense, yet there's method in it” といいたくなってくるのである。

雨の唄3篇

さて Tucker の *Mother Goose Lost* に雨に関する唄が2篇はいっているので、最後にそれを紹介してみたい。一つは

When the rain raineth
And the Goose winketh,
Little wots the gosling
What the goose thinketh.¹⁹⁾
(雨が降って親鸞鳥が
ウインクをすると、子鸞鳥は
親鸞鳥がなにを考えて
いるのか見当もつかない。)

他愛のない唄だが、口調(特に脚韻)のよさと内容のとぼけた愛らしさは捨てがたい。Opie には採録されてない。

もう一つの雨の唄は

It's raining, it's raining,
There's pepper in the box,
And all the little ladies
Are holding up their frocks.
(雨が降ってる、雨が降る、
胡椒入れには胡椒がはいっている。
お嬢さんたちはみんな
裾をつまみ上げている。)

というのである。これは Opie 夫妻の *ONRB* にも雨への invocations の一つとして収録されており、他の童謡集にもはいっており、その上 Christopher Casson がレコード (*Treasury of Nursery Rhymes, Spoken Arts*) に吹きこんでいる。どうしてこの唄を *Mother Goose Lost* の一つとして編者が「忘却から救」い出さなければならないと思ったのか、わたくしにはまったく不可解である。わたくしは特にキャッソンが歌うこの唄のメロディーが好きなので、よく教室などで学生に聞かせるのだが、唄の意味が判然としないのが難だった。2行目の box は pepper box (胡椒入れ) に違いないと思われる

19) 第3行の wots は文法的には wet でもいい。Sweeney 編童謡集では wotteth となっている。

のだが、さてこの唄の context でどういう意味をもつのか、どうにも説明のしようがなかった。マザー・グースの唄にはもともと説明不可能の表現が多いので、特に困るということもないのだが、やはりなんとなく気になるのだった。ところが *Mother Goose Lost* のために T. Stubleby が描いた挿絵をみると、一つの解釈（？）が打ち出されていることに気がつく。つまり、雨雲の中に途方もなく大きな pepper box がひそんでいて、雨とともに胡椒を空から降らせていている。そしてその雨に打たれた御婦人たちが長いスカートの裾をつまみあげている——というふうに描かれているのである。しかし、空から胡椒を降らせるのはどういうことなのか、わたくしたちは、これに引っかかるのだが、平気でネコやイヌを降らせる（“rain cats and dogs”）イギリス人にとっては、胡椒を降らせることくらい朝飯前のことかもしれない。この挿絵で、この唄の 2 行目の謎が解けたわけでは決してないが、こういう受けとりかたもあるのかということ（つまりだれにもよく分らないのだということ）が分って、それなりに参考になった。

雨の唄をあげたついでにもう一篇、これは Opie 夫妻の童謡集にはいっていないが、アメリカでは広く愛好されている唄である。

It's raining, it's pouring,
The old man is snoring;
He got into bed
And bumped his head
And couldn't get up in the morning.²⁰⁾
(雨が降る降る、どしゃ降りだ
おやじはぐうぐう高いびき
ベットに入って頭をぶつけ
朝になっても起きられない。)

この唄の背景はあきらかでない。北米起源であることは間違いないようで、イギリスでは幼稚園の子供のあいだで人気があるという（Opie 夫妻の 1959 年の所見）。オーストラリアやカナダでも広く行なわれ、カナダでは上掲の唄の 3、4 行が “He went to bed with a hole in his head” という version が流布している。²¹⁾ なおこの唄を効果的に使ったものとして Peter, Paul & Mary

の傑作 “It's raining”（「雨の降る日」）²²⁾ がある。イギリスの伝承童謡を現代のフォーク・ソングにこれほどみごとに生かした例は他にないようと思われる。“It's raining, it's pouring...” の唄が refrain として使われているほか、例のテントウ虫（アメリカでは Ladybug）の唄その他が曲の中に巧みに歌いこまれており、およそイギリスの伝承童謡を愛好する者なら聴きのがしてはならない作品であるように思われる。これを聴くと、わたくしたちはいまさらのようにマザー・グースの豊かさと生命のたくましさを思い知らされるのである。

以上、主として Opie 夫妻の集大成からはみでたマザー・グースの唄のいくつかについて、とりとめのない紹介をしてみた。

（東京大学教授）

（p. 27 よりつづき）

省、ないしは心情的なレベルであるにしろ、あるいは論理的なレベルであるにせよ、戦争にかわる ethic というものが生まれるというふうにお考えになるか、それともやはり戦争の倫理というものは、もうこれは人類不変のものであり、変わることはアメリカにおいてもないのであろうということですか。

北沢 そんなことはないと思います。やはり変わるでしょうね。ただ変わって、それに対して一体どういう倫理が出てくるかということは、いまはまだ予測できないのですが、ただその counterculture の中では、たとえばそういう新しい ethic がすでに始めている状況ではないかと思います。

金山 本日はこのへんで終わりたいと思います。どうも長時間にわたってありがとうございました。

（速記：上山采子）



20) *The Annotated Mother Goose*, p. 322.

21) cf. Iona & Peter Opie, *The Lore and Language of Schoolchildren* (Oxford, 1959), p. 218; Edith Fowke, *op. cit.*, p. 94.

22) 1962 年の Warner Bros. Record (BP-7254) その他に収録。

世界における外国語教育（2）

—特にソ連と中国について—



HOSHIYAMA SABURO

星山三郎

I. 概観

世界には今140ほどの国がある。そのうち私が訪れた国々は24ヶ国であり、訪れた学校や外国語教育関係機関は合せて50にすぎないから、これが世界における学校教育の現状であるとはっきり言い切る自信はない。こと中国（本土）の場合は、戦後は見ていないから、最近の様子については、新聞や人の書いたものに頼らざるを得なかつた。しかし、今、中共の現状を知ることは不可欠であり、A little is better than noneと考えて敢えて筆を執つた。私は戦後4たび世界各地の外国語教育の様子を見てまわっているうちに、いつしかわが国の英語教育の将来のあり方について参考となる国は、まず次の4つではないかと考えるようになってきた。

1. The teaching of English as a foreign language
という問題に、内外で非常に力を入れている点でイギリス。
2. 英語教育に対する熱心さ、教材や方法論、教員の再教育制度について西ドイツ。
3. Special Schools（特別学校）の制度やカリキュラム等についてソビエト・ロシア。
4. 早期教育の研究と、視聴覚教育機器において、アメリカ合衆国。

東南アジア諸国や豪州などの英語教育にはその成果に見るべきものもあるが、わが国との国情のちがいから、すぐそれを参考としてわが学校教育の中に採り入れたらよいと思うものは少ない。

アフリカも1960年以降、続々と独立国ができる、教育活動も活発になりつつあるが、ここではむしろ文盲撲滅運動が先である。ただアフリカでは土語以外に、英語を話す国は仏語を、仏語を主とする国では英語をやっている。これはアフリカ統一（African unity）をめざす土民たちの心からの願いで、強く胸を打たれるものがあるが、これまた一握りの上層支配階級に限られているようであるから、民族全般の傾向と断定するのは早計の誹りを免れない。

南米諸国はA.A.諸国について文盲が多い。学校教育について言えば、ペルーなどは日本の教育や制度をそのまま真似ようとしているほどで、その達成目標は日本の教育レベルである。ブラジルなどでは学校教育は2部授業か3部授業、所によっては成人をも加えて4部授業で、音楽や図工や体育など、教科から外されている所もある。午前11時、午後3時、6時ごろになると校門の前の通りは、登校する生徒と、下校する生徒でごったがえしになる。これは校庭などがないためである。そのような国の制度、教科書や教授方法は、わが国の僻地校といえども参考とする所はほとんどないようと思われる。

ひるがえってわが日本はどうか。世界広しといえども日本人ほど英語の学習に熱心で、その莫大なエネルギーを費している国は他にはない。しかしそのエネルギーはもっぱら入試・受験準備のために消費され、その教育的効率については本誌読者がすでに知っている通りである。その上、最近は中学校の英語授業時数の減少、高校の英語選択制の採用によって英語教育界に危機意識が生じている。それと併行して、英語教育改善のために、これまでバラバラであった中・高・大の英語教育団体が大同団結しようとの運動の胎動が見られるが、その前進が期待される。

II. ソ連——特別学校（Special School）の外国語教育

およそ外国の学校での授業の実際を知ろうとする時に一番大切なことは、どこに、どんな学校があって、どんな研究をしているかということである。ソ連の学校を訪れようとする時、その紹介の労をとってくれるのは、他国のように大使館の文化担当者ではなくて、イントゥリスト（Intourist 国立ソ連観光局）と称する所で、ここが外国からの客一切を引き受ける窓口であり、わずか1人の見学者の場合でも案内（？）をつけ、何かと世話をしてくれる。その出張所は東京の大本木にもあるが、中つぎだけで、実際にはモスクワの赤い広場の近くにある下記の事務局である。

INTOURIST, Karl Marx Ave. 16, Moscow, U.S.S.R.

このイントゥリストで紹介され、私が若い清楚な English speaking guide の Maria さんに連れて行かれた（ついていて離れない）学校は次の通りである。

1) **SCHOOL, No. 437**

Parkovaya 1. A. Moscow (Manager : Mr. Senziber)

2) **ENGLISH SPECIAL SCHOOL, No. 20**

Vspolny Pereulok 2, Moscow

(Headmaster : Mr. Sheiman)

3) **Pedagogical Institute for Foreign Languages**
(5年制外大)

38 Metrostoyevskaya, Moscow

(Dean, English Faculty : Mrs. Barmina)

次の2つはレニングラードで、SCHOOL No. 169への案内役は青年であった。

4) **SCHOOL No. 169**

Kharkovskaya 13, Leningrad

(Headmaster : Takharov Ivan)

5) **DESKY SAD (=Children's Camp)**

Frunze str. 6, Leningrad

(Manager : Zaveduyushei)

ソ連の学校制度には小中高の別はない（該当する学年はある）。日本式に言えば小中高の3つが一緒になって1つの「学校」(School, 「シコーラ」という)を形成する。学校に特別な固有名詞はついておらず、SCHOOL No. 1, SCHOOL No. 2, SCHOOL No. 3……と番号順に何百番までも続く。1つの学校に天使のように可愛い子供から、変声期を過ぎて、ひげのはえかかった大きな入道のような生徒までいる（7歳—16歳）。モスクワにはこのような学校が700余、レニングラードには400余りある。これらの学校の外国語教員は主として、前述の Pedagogical Institute for Foreign Languages (外国语教員養成大学) で養成される。この大学は5年制で (SCHOOL を出た者が入る), 数年前までは6年制であった。この大学では、英・独・仏・西・伊・葡語やスエーデン語からアルメニア語などを教え、学生は2つの外国语を修得するのを原則とする。モスクワのこの大学の英語科には1,200名の学生がおり、それを教える教授、講師の数は約100名。授業は1クラスの人数がたいてい数名で、10名を越えないようしている。こんな話を英語科の主任教授 Mrs. Barmina さんから聞いてから校庭に出た。もう夕方だったがそこに居合わせた学生に話しかけてみる。「私は英語が第1、フランス語が第2、日本の映画が上映される時はよく見に行きます」などと話してくれたが、なかなかはっきりした British English であった。

ソ連の外国语教育で注目すべきものは「特別学校」(Special School) である。ここでは（小学校の）2年生（8歳）の時から外国语の学習を始める。ソビエトの事とて、統計的数字についてはあまりはっきりした答えを得る事はできなかったが、「学校」総数の約1割はこの Special School らしい。モスクワにおける Special School は全体で64校、そのうち40校が English, 10校が French, その他 Spanish, Indian, Chinese School が2, 3ある。日本語を教えている学校も1つあるが、それは選択のよし。この特別学校制度ができたのは1952年といふから現在では20年の歴史を持ったことになる。

授業を参観させてもらいまいかと頼むと、モスクワの Special School No. 20 の校長先生は、特に突然の参観者の私のために、自ら授業をやって見せてくれた。その概略を記すと次のようになる。

教授者：校長 Mr. Sheiman

学 級：10年生(最高学年) 1 クラス13名(内、女子9名)

教 材：1)Wilde: *The Importance of Being Earnest*

2)英字新聞 "Morning Star" (後半用)

授 業：上記 1)について、授業は次の順序ですすむ。

- 先ず英人吹込のテープを聞かせる。
- 手をあげさせ指名、生徒の間で問答させる。
- 教師によるパラフレイズと内容の説明（英語）
- 最後に仕上げとして、もの一度、初めにかけたテープを聞かせる。

授業（後半）、次に Current English として英字新聞 "Morning Star" を各生徒に1部ずつ配布、5分ていど読ませてから、その読んだ内容についてその概要を自分の英語で話させる。

Teacher: What is your article on?

Pupil: My article is on Vietnam, ... Nigeria, &c.

Teacher: Paraphrase your sentences——What does the word ____ mean? — Do come on, please, Ivan! Next, Maria, ...

Teacher: Good! Now, homework, ...

So much for the newspaper.

授業がすんでから、Mr. Sheiman は私に次の事を教えてくれた。本校の生徒数は920名。1クラス平均、下級生は40名、上級生は30名～35名、英語の授業の時にはこれを3つのグループに分けて行なう(10名内外)。全校の教員は53名。英語を受け持っている教員は18名(内1名は英人)。18名のうち Geography を英語で教える先生が1名、English literature 1名、Physics を英語で教える先生が2名。

次の授業は English Special School, No. 169, Leningrad の 5 年生 (10 歳～11 歳) [学び始めてから 4 年目に入ったところ] である。9 月初めの新学年に入ったばかり、先ず復習、生徒は 12 名 (内、女子 10 名)、教員は女の人が 25 歳ぐらいか。校長さんに案内されて教室に入ると相当のスピードで問答をしている。始めから終わりまで英語ばかりで、ロシア語は一言も入ってこない。

(T.=Teacher, P.=Pupil)

T. : At the beginning of the school year when you meet your friend, what do you say?

指命された生徒 2 人が教室の前方に出て会話をする。

P₁ : How are you?

P₂ : I am very well, thank you.

P₁ : How is your mother?

P₂ : She is well, too, thank you.

T. : When there comes a pupil whom you don't know about, what do you say?

P₁ : What is your name?

P₂ : How old are you?

P₃ : Where do you come from?

P₄ : What subject do you like best?

…これを生徒が順番に教室の前方にてて、同じ問答をくりかえす。

なおこの Special School では、いわゆる英語の時間のほかに他教科すなわち次の課目をも英語で教えている。

Geography; Physics; Chemistry; Mathematics;
English Literature.

レニングラードの幼稚園の英語教育は高く評価されていたので、見学を希望、再三再四申込んだが、「9 月初めのこと、まだ授業が始まらないから園児はない。来てもダメ」と断られた。次の問答は Intourist を通じて、私の依頼した問に対しての、Desky Sad の園長の電話による回答である。(①～⑦は問、*印は回答)

① How many times a week do you give English lessons to the kindergarten children?

* Twice a week.

② How many minutes do you teach in one period?
* 20+20 (minutes) a week.

③ How many children are there in one English class?
* Twenty-five.

④ Do you use an English textbook or not?
* No textbooks. But they use the teacher's manu-

al, pictures and dolls.

⑤ Is your English teacher a part-time teacher or not?

* Part-time; twice a week. She doesn't come to our garden every day.

⑥ How many kindergartens are there in Leningrad?

* About 1,200.

⑦ Could you give me the rough number of the kindergartens which offer English?

* About 480 (40%).

III. 中国(本土)——毛主席一色の英語教育

中華人民共和国の英語教育の目的と方法を一言で言えば、毛沢東主席の思想、中国共産主義の考え方を外国に知って貰うために学ぶのであり、教授方法は、ほんやぐよりも話すことばとしての英語をマスターする事に重点を置く。特にこのことは、本年(1972)2月米国大統領ニクソンが中国訪問直後、3月1日から上海放送局が英語の放送を、30分間ずつ毎日3回、放送し始めたことによって拍車をかけられた。英語のラジオ放送テキストは次の文から始まる。“Long live Chairman Mao, a long life to Chairman Mao.” Our party is a great party, our people is a great people. We are loyal to the Party, we are loyal to the people.” それから少し頁をめくると農民・労働者のための中共が顔を出してくる。

“I am a worker, you are a peasant, he is a People's Liberation Army man.” まさに毛主席万歳、英語教育における毛主席旋風が吹きまくっていると言つてもいい。この情況を説明するために本年3月17日のジャパン・タイムズは James Pringle の論説を載せ、その記事の見出しとして “Mao-Style English Sweeping Shanghai” と書き、筆者はこの論説の中で “Chairman Mao is our great leader. We must listen to Chairman Mao and follow the Party.” と記し、これこそ中国人民、大衆の声であり、このことばが中国人民の口から英語でくりかえされているのを聞いていると述べている。

現在の中国の学校における英語教育の方はどうなっているか。イギリスで発行されている「英語教授」("ENGLISH LANGUAGE TEACHING" Oct. 1971) の中でプライス氏 (R.F. Price) は次のとく述べている。中国の英語教育の目的はというと、

(a) 通訳・翻訳者の養成のため

(b) 外国の技術の導入のため

(c) 中国の共産主義の考え方を外国人に知つてもら

うため

こんなわけで中国の英語教科書は英米の風物や事情を知るとか、国際理解のための教材よりも、中国共产党や毛主席の考え方、これに奉仕する模範的な農民や労働者の物語など、ふんだんに入っていて、政治色がすこぶる濃い。

しかし中国では普通教育はまだ義務教育となっていないようであるし、中学や高校で英語に配当されている時間は週に2~3時間であるからその成果を見るには、中国流に、ゆっくりと時間をかけて、長い息で見る必要がある。ただし「外国语大学」では毎週14時間英語を学び、3年コースでは全体で1,400時間、5年のコースでは在学中に2,330時間やることになっている。1学級の学生数は10名から20名以内、それに教員が2名つく。うち1人はネーティブ・スピーカーで、他の1人は中国人の助手である。授業にあたっては聞き方・話し方を、読み方・書き方に優先させる。

1950年代には、ロシア語が第1外国語であったが、1960年代になると英語が再び第1外国語の座を占めるようになつた。これも中国の国連加盟の実現と共に、いよいよ国際的に動く中国の将来を暗示しているように思われる。

なお、中国の英語教員の使用参考書などが、日本のそれに近いことは興味深い。次に2~3あげる。

1. A.S. Hornby: *A Guide to Patterns and Usage in English*
2. W. Stannard Allen: *Living English Structure*
" : *Living English Speech*
3. H.E. Palmer; C.C. Fries; J.O. Gauntlet の著作
4. 耳の訓練に Linguaphone records, &c.

中国の教科書に見る英語教育の目的

中国で今広く採用されている教科に Xiu Guo-Zhang という人の編んだ "English Language" というのがある。その第3巻第6課に "The Study of English" がある。それは英語教育の目標や現状を明快に語っている。

The Study of English

It is over a year now since I began studying English. I am glad to say that I am getting on well with it.

First of all, I know clearly what I study English for. A year ago, although I was interested in the language, I wasn't clear about its usefulness. I think I have a better idea of that now. To know what is going on outside our country, to tell our friends abroad what is going on in China, to help the oppressed peoples in their struggle against imperialism and for freedom and happiness—to do all this, a good command of foreign language is necessary.

So the problem now is why I should study English but how to get the best result in the shortest possible time.

(中略).....I must speak and write English more, both in and out of class. I must listen and read more. Some day I am going to read Shakespeare and Barnard Shaw, Dickens and Mark Twain—all in the original! And the writings of William Z. Foster, Harry Pollitt, and other working-class leaders of Britain and the United States. ... They will teach me to use English effectively both as a tool and as a weapon.

(東洋女子短期大学教授)

ELEC 英語発音教材

ESSENTIAL ENGLISH PRONUNCIATION DRILLS

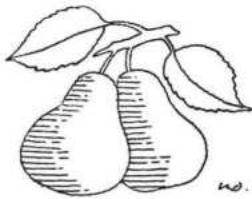
| | | |
|----------|-------|---------|
| 英語教育協議会著 | A 5 判 | ￥ 300 |
| オープン 全2巻 | 各 卷 | ￥ 1,500 |
| カセット 全2巻 | セッ ツ | ￥ 3,000 |

日本人にとって最も習得困難とされる基礎的英語音の集中的 drill を目的とするもので、大学における発音教材として、また英語科教員の自己研修のための教材として最適である。録音テープには Aural Comprehension と Aural Perception のテストが収録されている。

オーラル・アプローチ教本 1, 2

Archibald A. Hill 著 A 5 判 各巻 ￥ 790
オープン(1)一全2巻 (2)一全1巻 各巻 ￥1,300

英語の話し方・理解の仕方を反復練習するための教材。第1巻は発音を、第2巻は文型・文法・綴字等を組織的に扱っている。



日・英慣用表現の比較（2）

—日本文学の英訳作品を資料として—

HASEGAWA KIYOSH^{II}

長谷川潔

I-D 耳

明治44年1月号の雑誌『学生』を見ると、「身体に関する色々の言廻し」という論文で、芳賀矢一博士は耳に関する慣用句について次のように述べている。

「耳を傾けるといふのは、漢語が本で傾聴する容子。耳を塞ぐは聞くを厭ふので、聞いて心に感動を与へる場合には國語では耳立つといふ。これは見る時にも同様で目立つといふ語がある。目安い、耳安いなども目耳に通じて用ひられる。耳よりの話といふのは望ましい事を聞いた時にいふ。耳は顔の外に出て居るから、外気に触れ易い。随って外方から来る音声は一番早くはいる。その代り寒い風などは最も強く感じる。それ故耳を切るやうな寒さなどといふ。耳にたこの出来るほど聞いたといふのも面白い形容である。」

以上のように「耳」に関する日本語の慣用表現もいくつかあるが、文学作品のコンテクストの中で、これらの慣用表現がどのように訳されているのかみてみよう。

〔例48〕 And you will **listen to** me. You will be surprised at me, grieve for me, and scold me just as though I were alive.

（そして貴方は生きている私とお話なさるようにこの手紙の中の私の声に耳をお傾けになり、驚いたり悲しみたり叱ったりなさることでしょう。『獵銃』井上靖）

ただ単に **listen to** と訳されているが、助動詞の will を使うことによって、原文に含まれている説得的な促しの気持が出ているように思える。

〔例49〕 Besides, after constantly **receiving** compliments and **hearing** herself praised, she knew very well that she was beautiful.

（その上世間の評判や人々のお世辞が始終耳に這入るるので自分の器量のすぐれていることは良く承知していた。『春琴抄』谷崎）

ここでは前後の文脈にしたがって、receive と hear の2つの動詞を使ってうまく訳している。

〔例50〕 I felt no resentment at being talked about and no particular need to **hear** more.

（顔の話らしいが、それが苦にもならないし、聞耳を立てる氣にもならない程に、私は親しい気持になっていいのだった。『伊豆の踊子』川端）

「耳をそば立てて聞いている」という日本語の描写的で、しかも、なんとかして聞きたいというニュアンスが「聞耳を立てる」という表現の中にあるが、英語でそれを表わす慣用句はないのだろうか。ただ単に **hear** だけではものたりないが、「気にもならない」と否定形になっているので、これでよいのかもしれない。

〔例51〕 Teru says that some of his pupils felt sorry for him because he looked so shabby, and hinted that he ought to be a little more concerned about his appearance. But Sasuke **paid no attention**.

（てる女の言に依れば当時門弟達は佐助の身なりが余りみすぼらしいのを氣の毒がり、今少し辯幅を整えるよう諷諭する者があったけれど、耳にもかけなかった。*Ibid.*）

〔例52〕 “Don’t go makin’ yourself put up with it now and afterwards gettin’ into trouble for it,” said the others, but he **would not listen**.

（「瘦我慢をして、あとでお困りなさるな。」同役がこう言ったが、当人は耳にもかけない。『風』芥川）

『春琴抄』の方では、**paid no attention** という熟語を使って訳し、『風』の方では、主語の固執・拒絶を表わす助動詞の **would** を使って訳しているが、いずれも原文のニュアンスを伝えているように思える。

〔例53〕 A bell is ringing somewhere. Or is an old man’s **ear imagining** things? But I do hear a bell, behind the roaring in my ears. Not, it is my **imagination**.

（どこかで鈴の音がする。老人の空耳かな。耳鳴りのしている中から、鈴の音が確かに聞えてくる。いや、やっぱり空耳だろう。『比良のシャクナゲ』井上靖）

〔例54〕 It was the real thing.

（空耳でなし、ほんものであった。『帰郷』大佛次郎）

〔例53〕 では **imagine** によって日本語の「空耳」をう

まく訳しているのに対し、〔例54〕では省略されてしまっている。ここで注目したいのは、日本語では、身体の部分を使って巧みに心理的、抽象的なことを表わすのに対して、英語では、*heart* をのぞいては肉体的部分によって人間の精神的思考や感情を示すことがあまりないらしい。なお、この問題については、I-K 腹の項でさらにくわしく考察してみたいと思う。

〔例55〕 The Keisuke affair came quite **without warning**. A call from R. University, and Misa went to see what the difficulty was. Keisuke had been expelled because of trouble with some woman. I could not believe my ears.

(啓介の事件は全く寝耳に水だった。R大学から呼出しが来て、みさが行ってみると、啓介は女の問題で退校処分を受けるという。わしは書斎でみさからその報告を聞いて、全く己が耳を疑った。*Ibid.*)

「寝耳に水」は意味をくんで実にうまく訳してある。『大和英』には、「それは我々には全く寝耳に水であった」—It was a complete surprise to us.=It came as a thunderclap to us.=We were struck all of a heap (=all upset) at the news.と記載されているが、スタイルとか、ひとつひとつの単語のもつひびきを考えた場合、これらをすべて=という記号であっさりかたずけてしまってはたしてよいものであろうか。今では cliché になってしまったと思われる came as a thunderclap to などは、〔例55〕の came 以下にくっつけられなくもないが、文章のリズムが完全にみだれてしまう。やはりここは without warning でなければならない。「耳を疑った」は could not believe my ears と否定形ではあるがほぼ原文に近い訳がつけられている。日本語をそのまま直訳した例としては、西鶴の『好色五人女』の英訳の中に in a world full of **busy ears**—「耳せはしき世の中」というのが目についた。これは原文のニュアンスを巧みに訳した例であるが、英語に busy ears という慣用句はないように思える。筆者が調べた範囲では辞書にも記載されていないし、数人の英米人にたずねてみたが、誰も知っている人はいなかった。

〔例56〕 And from now on, set a time and stop at a decent hour. Sasuke's wailing gets on our nerves and none of us can sleep.

(もう此からは、時間を定めて夜が更けぬうちに止めたがよい、佐助のひいひい泣く声が耳について皆が寝られないで困りますと…『春琴抄』谷崎)

「耳につく」は『大和英』では strike one's ears と記載されているが、ここでは明らかに get on one's

nerves の方がよい訳であろう。

〔例57〕 But their tone was by no means strong.

(しかしその言葉の耳障りからいうと決して猛烈なものではなかった。『帰郷』)

再び『大和英』を引用すると「耳障り」は offensive to the ear; jarring to one's ear; discordant と訳されている。騒音、不愉快な物音などが耳障りの場合にはこれらの訳でもよいかもしれないが、「言葉の耳障り」と言った場合 tone (of voice) を使って訳す方がはるかによい。同じ『帰郷』の中に「耳に柔かい」という表現があったが、これは、in a gentle tone と訳されていた。

I-E 鼻

人間の顔の中でも鼻は目につきやすいので鼻にかんする慣用句は非常に多い。前述した芳賀博士のことばを再度引用してみよう。

「鼻は顔の中央に位して顔の品位を作るのに与って力がある。あぐらを書いた鼻は低くて上品でない。高いのが上等と思われたから、自慢することを鼻にかけるといひ、鼻を高くするといふ。少し得意になれば鼻をうごめかす。威張る人は鼻の先で人をあしらふことがある。この私がなどと鼻を指すのを見ても、個人は或意味に於て鼻を以て代表されるのである。昔は自分の事を鼻様とも言った。古い軍記物語で鼻白といふのはびっくりすること。びっくりすれば鼻が白くなるといふのは、恥かしい時に顔が赤くなるのと正反対である。鼻につく、鼻つまみなどは嗅覚の官能から出た言廻しである。」

鼻に関する日本語表現が、どういう発想から出たものであるか或程度はっきりしたが、ここで、文学作品の鼻に関する表現がどのように訳出されているかみてみよう。

〔例58〕 **Boastful** of his father's fortune and accustomed to lord it over others wherever he went, he regarded his fellow pupils with contempt, treating them as if they were his father's shop clerks.

(親の身代を鼻にかけ何処へ行っても若旦那で通るのをいい事にして威張る癖があり同門の子弟を店の番頭手代並みに心得見下す風があったので…『春琴抄』谷崎)

同じ「鼻にかけ」と言う表現でも、より日本語に近いのが…sticking up his nose because of his father…(親父を鼻にかけ『潮騒』三島)であろう。この stick up は「突き出る」または「自説を主張する」の意味でよく使われるが、stick up one's nose は英語の慣用句というよりもむしろ、訳者(Meredith Weatherby)が日本語にひかれて創り出した表現のように見える。

「鼻にかける」とほぼ同じ意味の「鼻を高くする」に当るものとしては、S. Maugham の “The Traitor” の中に、His master will be as proud as Punch. (彼の主人は鼻を高くするであろう) という英語らしい表現がある。

〔例59〕 Yet her allowance must have been large enough to live on without eking it out by teaching. She could afford to be arrogant toward her pupils.

(しかし尚且生活を支えて余りある金額であったから琴曲の教授などはどうでもよかったに違いなく、弟子に対して鼻息の荒かったのも当然である。Ibid.)

〔例60〕 Shunkin had always been coddled. Though severe in her demands on others, she herself had never known hardship or humiliation. There had been no one to humble her.

(彼女は從来甘やかされて来た。他人に求むる所は酷で自分は苦労も屈辱も知らなかった。誰も彼女の高慢の鼻を折る者がなかった。Ibid.)

「鼻を折る」と同じ意味の「鼻柱をくじく」などもhumbleと訳せるだろう。

〔例61〕 My heart leaps when I think how I've triumphed over that coward!

(卑怯な奴の裏を搔き鼻をあかしてやったかと思えば、胸がすぐようございます。Ibid.)

〔例62〕 The cattle dealer guessed the name "tobacco" successfully and got the best of the Devil.

(牛商人は、首尾よく、煙草と言う名を、言いあてて、悪魔に鼻をあかさせた。『煙草と悪魔』芥川)

『大和英』には「人の鼻を明かす」としてoutwit; balk; foilなどが記載されていたが、話の前後を考えみると上述の例文の中では、いざれも使うことができない。

〔例63〕 He thinks he can go through somebody's eye and nose without being seen. But I'm not as much of a child as that.

(それはあんな目から鼻へ抜けるような人ですから、そう思ふのも無理はないのですけれど、わたくしこれでもあの人の思ふ程赤ん坊ではない積なの。『雁』森鷗外)

この訳例では日本語の慣用句を忠実に訳出することによって効果を出しているが、筆者が尋ねた英・米人の中には意味がとれない人もあった。『大和英』の He is as sharp as a needle. を使えば、はっきりはするがこの表現も cliché になっているので訳者が意識的に使用を避けたのかも知れない。

〔例64〕 Whenever they met, they put their noses

together and chattered away at each other, as they loved to, on the subject of Kaga's pipe.

(彼等はよるとさわると、鼻をつき合せて、この「加賀の煙管」を材料に得意の饒舌を闘わせた。『煙管』芥川)

これも日本語をほぼ直訳しているが、前後の関係から意味もよく通じる。英語の慣用表現 face-to-face with～よりもおもしろい、この直訳の方が原文の気持をよく伝えているのではなかろうか。

〔例65〕 Ichikuro was somewhat taken aback.

(市九郎は、一寸出鼻を折られた。『恩讐の彼方に』菊地寛)

「不意をうたれる」の意味をもつ慣用句 be taken aback で表現している。これによく似た「出鼻をくじかれる」が『潮騒』に出ていたが、次のように直訳されている。

〔例66〕 Shinji had been just on the point of coming into the house for a minute, but these words seemed to wrench his nose.

無生物主語構文の比喩的な表現になっていて面白いが、英米人の読者にどこまで理解できるだろうか。

〔例67〕 "What!" said Suezo, smiling in spite of his scolding tone. "You haven't visited him yet? His house right at Ike-no-hata? In front of your nose?"

(末造は顔で笑って、叱るやうな物の言様をした。
「なんだ。つひ鼻の先の池の端に越して来てゐるのに、まだ行って見ないでゐたのか。『雁』森鷗外)

地理的な意味での「鼻の先」は、よくwithin a stone's throw of～という表現がよく引用されるが、東北大の英人講師 David Hale 氏によれば、cliché だから、現代文には使わない方が望ましいとのことである。

〔例68〕 Those who were fair and handsome were mostly unattractive to her, for they seemed shallow and conceited.

(色の白い、目鼻立ちの好い男は、兎角軽薄らしく、利いた風で懐かしくない。Ibid.)

〔例69〕 You and I have all our faculties, but she's far superior to us in every other way.

(わしやお前達は眼鼻が揃っているだけで外の事は何一つお師匠様に及ばぬ。『春琴抄』谷崎)

以上が鼻に関する主な慣用表現である。「鼻にかける」とか「鼻を高くする」とかの表現を「威張ったり」、「自慢したりする」の意味に使うのは日本人の発想であって肉体的に鼻が高い英米人にはこのようなことばの使い方

は思いもよらないことであろう。

I-F 口（歯・舌・喉を含む）

口は食物をとるところであると同時に、言語を発する機関である。したがって、芳賀博士も述べていられるように、食べ物からくる慣用句と、言語について述べている慣用句とがある。つまり、口に合わぬ、口が驕るなどは食物の方から言ったことばで、口が悪い、口が重いなどは言語についての慣用句である。口すぎは糊口というのと同様に、この語を聞くと、生きるために食べているのか、食べるため生きているのか、何となく生活難の感じをひきおこす。また一方では、口車ということばは、いかにも詐欺の多い世の中を眼の前に浮ばせる。口は禍の門ということは、主として物いう時の戒であろうが、暴飲暴食の戒にも応用できる。重宝の口、危いの口、とかく口を塞がうとしても人の口に戸は立てらぬものである。（『落窓物語』参照）

〔例70〕The servants will begin to talk, she thought; we must act quickly if we are to save the situation.

（人眼に立つようになってからでは奉公人の口がうるさい。今のうちなら兎角繕ろう道もある。『春琴抄』谷崎）

〔例71〕“Do tell us the man's name!” Despite their urging he refused to answer.

（是非相手の名をいって御覧と口を酸っぱくしても言わぬ。Ibid.）

いずれも原文の意味をくんで巧みに訳されてはいるが、あっさりしすぎていて、日本語にある強い意味あいが英語ではうすれてしまっている。

〔例72〕Now that things had gone this far, it would be best for her to marry as soon as possible, before people began to talk.

（此の上は人の口の端にかかるうちに早く一緒にさせる方がと…Ibid.）

日本語では、「口がうるさい」と「口の端にかかる」では、はっきりした違いがあるが、訳者(Seidensticker)は、いずれも begin to talk でかたずけてしまっている。「口の端にかかる」は begin to talk でぴったりするが、〔例70〕の訳は begin to gossip とでも訳す方がよいと思う。

〔例73〕Thus he joined Shunkin in whole hearted denial. The matter seemed as far from a solution as ever.

（今度は春琴に口を合わせ徹頭徹尾否認するのでいよ

いよ婿があかなくなる。Ibid.）

「口を合わせ」と同じ「口の裏をあわせ」は次のような例が『天声人語』にあった。

〔例74〕His wife helped him make an alibi.

（アリバイ工作は妻が口の裏をあわせたフシがある。『天声人語』Vol 7.）

いずれの場合も意味をくみとて訳してあるが、英語だけを読んだのでは、日本語独特の慣用表現は出てこないだろう。

〔例75〕And it seems that the servants would gossip among themselves, saying: “How do you suppose she acts when they're in bed together? I'd like to spy on them some time!”

（奉公人共はあれでこいさんはどんな顔をして佐助どんを口説くのだろうとこっそり立ち聞きしてやりたいと蔭口をいった。『春琴抄』谷崎）

「口説く」の訳が原文よりも大分どぎつくなってしまっている。『大和英』には make an amorous approach to～とあるが、こんな大時代な表現を奉公人が口にするはずもないので、ここで使うのは不適当。

〔例76〕The disciple, as the Naigu had expected, began eagerly to urge him to try the method.

（弟子の僧は、内供の予期通り、口を極めてこの法を試みることを勧め出した。）

〔例77〕I was all eagerness to say spiteful things, but...

（私は憎まれ口が喉まで出てきましたが…『愛と死』武者小路）

言葉が「喉まで出てくる」を英語では The word was on the tip of my tongue とも言うが、これなどは、英語の方が日本語よりも具体的で鮮かだ。このい例は日本語にくらべて英語には少ない。

〔例78〕I let word slip out about the paper, and Hiroyuki and Haruko set their eyes on it.

（それにその紙のことも、わしがつい口を滑らせたので、弘之も春子もそれを当てにし始めた。『比良のシャクナゲ』井上靖）

〔例79〕I was only talking mechanically, without serious thought.

（唯口の先で好い加減な挨拶をしていました。『こころ』夏目漱石）

〔例80〕That breaking the ice, we began again.

（二人は、それを緒口にまた話を始めた。Ibid.）

以上、言語についての慣用表現を日本語では口を使つて表わすことが多い。英語にも、He is a big mouth.

(彼はおしゃべりだ)/**Shut your mouth.** (黙っている)/
The news spread quickly **from mouth to mouth.** (そのニュースは人から人へと急速に広まった)などがあるが、日本語ほど多種多様ではない。

では、ここで、歯とか舌など口に関係のある言葉を使った言語に関する慣用句をみてみよう。

〔例81〕 He is a shrewed man who says just what he thinks **without pulling his punches.**

(歯にキスきせず思ったことをズバズバ言ってのける切れ者『平家物語』吉川英治)

pull one's punch (手心を加える) という英語の慣用句を使って訳している。このイディオムはボクシングからきたものであるから、日本語の発想からはでてこない。

〔例82〕 There should not be high-sounding words that **set our teeth on edge.**

(歯が浮くような名文句ではないはずである。『天声人語』Vol. 7)

「歯が浮く」という非常に感覚的な表現が英語にもあるのが面白い。この句はもともと聖書(*Jer. 31. 29*)のThat apple has **set my teeth on edge.** (そのリンゴで私の歯が浮いた)という句からきたもので、英語でも「不愉快な気持にさせる」の意味で使われている。

〔例83〕 Western aviation experts were **astonished and said**, "The United States has nothing to compete with these."

(「米国にはこれらに対抗できるほどのものは何もない」と西側の専門家も舌を巻いたという。『天声人語』1966年6月)

〔例84〕 ...possessed of a retentive memory, Tokitada's discernment often **left Kiyomori speechless.**

(記憶力はよく、慧敏、博識、清盛も舌を巻くことがしばしばである。『平家物語』)

同じ「舌を巻く」という表現であるが、文脈にしたがって訳も違っている。『大和英』には、marvel at; be wonder-struck; be astounded; be speechless with admirationなどの訳が記載されている。

「舌を巻いて驚く」に似た表現が「あいた口がふさがらぬ」で、『天声人語』の中に次の訳例があった。

〔例85〕 We are further flabbergasted to learn that the truck was to be used to transport policemen going out on a traffic clamp down.

(その輸送車は、「交通取締り」に出かけるため待機中のものだったから、あいた口がふさがらぬ。『天声人語』Vol. 7)

〔例86〕 Even Mori, despite his contrariness, would be **stumped.**

(いくら依怙地な毛利でも閉口するだろうと思ったからである。『毛利先生』芥川)

〔例87〕 Kikuji was in an **agony of apprehension.**

(菊治が閉口していると…『千羽鶴』)

「閉口」はもともと「口をつぐんで答えないこと」の意味であるが、「こまる」と「まいる」との意味でよく使われている。英訳は前後の脈絡によって上述のように違った表現になっている。

〔例88〕 The second time I came here, over the Keisuke affair, he was already paralyzed and **had trouble speaking.**

(わしが啓介の事件で二度目にここに来た時、すでにあの主人は中風で呂律が怪しかった。『比良のシャクナゲ』井上靖)

〔例89〕 I brought out the secret I **had never even hinted at** and laid it quietly before the thistles.

(私は何十年間ついぞおくびにも出さなかつた私の秘密を取り出して、薔薇の花の前に静かに置きました。『獵銃』井上靖)

〔例90〕 Chang and the other men could only stand and gaze **with breathless attention.**

(張を初めとして兵たちは固唾をのんで、ただそうした素勸の姿を見守っている許りであった。『洪水』井上靖)

「唾」に関する慣用句で、われわれがよく使うのは「ツバをつける」であろう。『天声人語』に次の例があった。

〔例91〕 There are already extremely brisk purchases of unripened fruit in the shape of university students who will be graduating in spring next year. Companies are **putting their brand mark on** prospective candidates, and jobs in the major companies will apparently be settled within June and July.

(来春、大学を卒業する学生の“人間青田買い”がすでに活発に始っているようだ。いわゆるツバをつけておくやり方で、大会社関係では大体6, 7月中に就職の予約がついてしまうらしい。『天声人語』1966/6/13)

会社がブランド・マークを学生につけてしまうという訳は、いかにも原文の感じがよく出ていて面白い。『大和英』をしらべてみたが、比喩的な意味での「ツバをつける」の訳例は記載されていなかった。

前述したように、口を使った食物に関する慣用句もあるはずなのだが、筆者が集めた用例の中にはあまり見当

らなかった。とにかく2, 3例文をあげてみよう。

〔例92〕 He was **not much of a drinker.**

(あまり行ける口ではなかった。『春琴抄』)

〔例93〕 We felt that they had not come up against any adults **with real backbone** in their homes and in their universities.

(この学生たちは、家庭でも大学でも**歯ごたえのある**おとなに出会っていないのではないか。『天声人語』Vol. 7)

比喩的な意味で使われている「歯ごたえのある」を、これも日本語化している「バックボーン(骨)のある」という表現を使ってうまく訳している。『大和英』には「仕事など」として tough という訳例があるが、a tough person と訳してしまうと、日本語のニュアンスとは大分違ったものになってしまう。

歯に関する慣用句では、英語、日本語とも、我慢、忍耐、くやしさなどの感情を示すときに用いられることがある。

〔例94〕 If you really want to become an artist, you've got to **grit your teeth** and bear it, no matter how much it hurts.

(芸道に精進せんとなれば、痛さ骨身にこたえるとも歯を喰いしばって堪え忍ぶがよい。『春琴抄』)

〔例95〕 **Clenching my teeth**, I would cry aloud and ask why it stood in my way.

(私は歯を喰いしばって何で他の邪魔をするのかと怒鳴り付けます。『こころ』)

〔例96〕 President Kennedy must be **gnashing his teeth** in vexation since the slamming of the EEC door has locked Britain and the United States out of Europe.

(ケネディ大統領も欧州からの米英締出しの感を抱いて歯ぎしりしているようだ。『天声人語』1963/2/2)

これらは、いずれも日本語と英語の発想も表現もほとんど同じものばかりである。

全体的に見て、口に関する慣用表現は日本語も英語も食べることと、言語に関することが中心になっていて、同一の発想から出ているものが多い。ただ、一般的に言って、日本語の表現の方が、多彩でより感覚的、具体的であるように思える。(次号へづく)

(お茶の水女子大学助教授)

実践英語教育

A5判上製
¥ 1,800

ELEC研究開発部長

山家保著

この本は英語教育実践の第一人者である著者が、各研究指定校・研究協力校などの先生方の協力を得て、過去20年にわたって進めてきた実践研究の結果をまとめたものであります。古くは Henry Sweet, Ferdinand de Saussure から Harold E. Palmer, Charles C. Fries を経て Noam Chomsky に至る言語学発展の跡を辿り、実際に役立つものであればなんでも取り入れようとする応用言語学の一部門としての英語教育の姿がここに示されています。なお豊富な研究・参考資料のほか著者が各地の実演授業で用いた教案が添えられています。

■内容

第1章 日本と世界と英語教育／第2章 言語観／第3章 言語の学習過程／第4章 指導理論の心理学的背景／第5章 教材論の変遷／第6章 発音指導／第7章 文法指導／第8章 英語の理解のための指導／第9章 暗誦のための指導／第10章 応用練習の指導／第11章 Writing の指導／第12章 中学校英語の学習指導／第13章 高校英語の学習指導

英語教育協議会

東京・神田神保町3の8
Tel. (03) 265-8911(代)





Oral Approach 実践の15年

MORI

HIROSHI

森

博

昭和32年6月、北海道英語教育大会が旭川市で開催されたが、この時はじめて Oral Approach による指導法が本格的に導入された。私はこの時、山家先生の模範授業を拝見して、その理論的に、実践的に筋の通った素晴らしい指導法に深く感銘し、即座に私が英語教師として探し求めっていたもの、私の今後とるべき道はこれだと心にきめた。この時に行なわれた O'Connor 女史の contrast についての講演も、私の脳裡に鮮明に焼きつけられている。

さて、一旦は Oral Approach の指導法をとり入れてみようとは思ってみたものの、勉強不足、pattern practice とは何か、contrast の理論はどう授業にとり入れたらよいのか皆目見当はつかず、山家先生の指導案を唯一の手がかりにして Oral Approach らしきものに一歩踏み出した。幸い、当市では素晴らしい先輩、友人に恵まれ理論・実践に少しづつ肉づけしてゆくことができた。

特に、昭和35年から7年間、毎夏、当市で ELEC の強力な御援助のもとに、全北海道の中・高英語教員を対象にして、2週間程度の講習会が持たれたが、私も全講習会に役員とし、或いは technical advisers の一員として関係させていただいた。この間に ELEC の各理事、主事先生方、派遣外人講師多数の御指導・御助言を直接にうけて、英語教育の何たるかを少しづつ理解できるようになった。

そして、更に、市の教育委員会や教育研究会のすすめもあって、昭和44年度から3年間、現在校で ELEC の研究協力校として実践研究に励んだが、年5~6回山家先生の御指導をうけて、私なりに理論・実践両面に自信らしきものを持てるようになった。思えば手探りで始めてから、どうやら自分で納得のいく指導法を身につけるまでに15年経たわけである。

この間に私が実践を通して感じたこと、学んだことを授業の流れにそって、思いつくまま述べさせていただく。

Review (挨拶・読み・暗誦)

始業のベルが鳴る3分前には職員室を出る。3人の英

語科担当が全部そうなので、校長もよくその事を話題にする。教室に着くと、生徒が真剣な面持ちで復習教材の暗誦をしている姿が目につく。学習のしつけが完全に身についたことを感ずる。

“Good morning, class.” … “How are you?” … 生徒の反応が大きいと、私も張りが出る。型通りのやりとりであるが、英語の雰囲気づくりに役立ち、立派な言語活動の一つだということを如実に感ずる。また、言語は習慣なりで、どこか一か所でも stress, intonation を狂わしたら、生徒は大笑いすることだろう。

前時の教材を思い出すための reading と暗誦も、前時の学習諸活動がうまくいった時はスピードがあり、時として、私のモデルより生徒の読み方が速いなどと冷やかされる。

Pattern Practice

Variation——初めの頃は、日本語や絵で cue を出していたが、いつの頃からか英語で cue を出すようになった。能率的で素早い。Substitution, conversion, expansion を巧みに織りませ、しかも次の selection への橋渡しを考慮しての programming には非常に技術を要するが、慣れてくると実に楽しい。Cue の与え方など適切さを欠くと、とたんに生徒の反応がつまづく。

一時、コーラスばかりで練習したが、授業に余裕が出てきた現在、本筋の個人——コーラスの練習ができるだけ心掛けるようにしている。Variation には substitution drills だけしかないといまだに信じている人があるが、conversion なども入れ、一段階変化の操作で wh-question を難なく作ってゆく生徒たちの姿を見ると、しみじみと満足感を覚える。

Selection——もとは regular type なども使っていたが、この頃はほとんど controlled conversation type を採用している。この辺から眞の言語活動らしい言語活動に入る。普通 general question → wh-question の順で行なう。C-I-I-C の順を C-I-C に変化したのも、この2, 3年のことで、よい technique だと思わいたら理論的に正しい限り、前向きにどんどん形を改めてゆくのも

この Approach の特徴だと思う。また、よい technique を実践の中から次々に採用して指導技術が多彩になってきたので、同じ Oral Approach の指導法でも、しばらくこれに接しなかった人々には非常に斬新な感じを与えることをしばしば見聞きした。

p-p dialogs——言語活動が実際場面での communication への最終的橋渡しになるとしたら、p-p dialogs ないしは free conversation が教室内での究極的な言語活動の場となろう。しかし、方法論的には私もまだ不十分で、目下いろいろの試みをしているというのがいつわらざるところである。だが、この p-p dialogs は Oral Approach による指導法では全く目新しいものではなく相当以前から唱道され、数年前、既述の ELEC 講習会で p-p dialogs を取入れた授業が行なわれたこともありまた、ELEC 協力校の期間中に、他の協力校の素晴らしい試みをいくつか聞かされたし、私たちもこの実施を示唆され、苦心をして場面を設定し、一步一步この実現に意を用いているわけである。

特に成績中位以上の生徒は、この活動を非常に喜び、意欲的に参加する。Audio visual aids の開発もさかんに行なわれているので、将来の展望も明るいのではないかと思う。

Written test

外国语学習の指導順は、理解——暗誦——応用練習といわれるが、その最後のしめくくりであり、生徒の学習到達度の診断にもなるのが written test で、私は 15 年前から一日もかかさず課している。和文英訳形式のものが多いが、生徒の毎日の伸び具合をチェックするよい方法の一つだと信じている。はじめの頃、現在校と同程度の質の学校で教えていたが、テスト結果は A, B の生徒の数が 50—60% 程度で、なぜ現在のように 70—80% のところまでに達しなかったか考えてみると、次のような指導上の欠陥があったことに気づく。

(1) 一時間に学習する教材の分量が多すぎた。現在は、新しい指導項目を 5 つ前後についている。また、完全学習を狙うので、1 時間の教材の行数も制限した方がよいと思う。

(2) 指導手順に甘さがあり、理解——暗誦——応用練習のいずれかに過不足があった。つまり時間配分がうまく行かず、消化不良を起していた。いわゆるムリ・ムダ・ムラのある授業であり、中学生には必要としない文法的説明を長々とやって得意になったり、私のモットーとしている one thing at a time から逸脱して、理解させるべきところで練習したり、暗誦や応用練習段階で理

解の自信が持てずに意味をいちいち日本語で確認したりして生徒の注意を散漫にしていた。

(3) 1 年前期の筆記体の書写指導に徹底を欠き、上學年になってもまだ writing に抵抗のある生徒がいた。

要するに、理解——暗誦——応用練習の基本的な指導手順を確実に押えてゆかないと、written test の結果に確実にあらわれてくることがデータを通してわかつた。

Oral introduction

はじめの頃、Oral Method 式の oral introduction をまねて新教材の導入をしていたが、いきおい story 中心になり、意味や文構造の把握を十分に徹底して指導するのに手間がかかり、いつもその後の練習や reading に支障をきたし、尻切れトンボの授業になっていた。しかし defining sentences の技法を身につけてからは、既習の文型、単語の中に新指導項目を入れて生徒に口頭で提示し、その意味を生徒に推測・理解させることが、文を直解する能力を伸ばし、hearing の訓練にいかに役立つかを知るようになった。さらに、defining sentences を作るにも、山家先生著の「実践英語教育」の中で示されている通り、実に 19 の方法があることを知り、日常の指導案作成に大いに役立ていただいている。

口頭導入は私の最も好むところであり、要を得て簡潔な defining sentences を与えて、生徒の理解の反応がよく現われ、その目にパット輝きが出たときはうれしいものである。

当初いわゆるハイカラ授業で理解の点検を英問英答一点ばかりで行なっていたが、今考えると defining sentences の作り方も、導入技術も未熟で、あれで本当に生徒に理解してもらえたかどうか今思っても懶愧にたえない。その後、山家先生に戦略と戦術のお話を聞き、生徒の能力により、又意味や文構造の難易により必ずしも理解の check は英問英答に限るものではなく、日本語での check の方法もあるとお聞きしてから臨機応変、日本語をおおいに活用するようになった。しかし究極的には英語で理解の点検をするのが本筋であろうし、またそのつもりで defining sentences を作り、口頭導入の技術もみがかなければならぬと思う。

Contrast

冒頭に述べた通り、この理論を知ったのは O'Connor 女史の講演の時であったが、英—英、日—英の單音、音調、強勢、語形、語順の対立的特徴を識別・理解し、更に発表練習することが非常に重要なことだと知った。実

際の指導場面では特に日本語にない音素を識別・理解させるために minimal pairs を組んで練習している。数年前の生徒にくらべると、現在の生徒達は英語の音に対する感覚がはるかによくなっているようだが、現在の生徒達をとりまく英語的環境が格段によくなってきたことを感ずる。

また、強勢・音調などの指導については、新教材の提示の場面ではもちろんのこと、reading、文型指導などの場面で有効に指導できる。もとはおぼろげながら強勢・音調の型を知っているつもりであったが、ELEC の講習会でいろいろ対立的特徴を教わり、実際練習を通して身につけていたが、自分の発音がいかいでたらめで単調であったがよくわかった。

よく、英語の発音には自信がないからと半ばあきらめているようなお話を聞くことがあるが、英語の教師の宿命なりと観念して、先輩や、native speakers に自分の発音を矯正してもらったり、native speakers の出席する会合には必ず出て、自分の発音を brush up してゆかねばならないとつくづく感ずる。また音響装置・教材も多く市販されているので native speakers と同じようにはゆかぬまでも、少しでも自然な英語になるように努力しなければならないと思う。自信を持って教壇に立たなければ、生徒はそれを敏感にとらえ、練習もあやふやになるのではなかろうか。

Mim-mem

新指導項目を口頭導入して理解させたあとの一連の暗誦の第一段階が mim-mem であろう。これは A.S.T.P の言語指導技術からいち早くこの指導法に導入されたので、私も早くから知っていたが、さすがに素晴らしい technique で、徹底すると非常に効果がある。

指を 1 本出したり、2 本出したりして single, double repetition をしたり、choral, half-choral、時に応じて row, individual practice など、生徒は新単語、新連語、新文型を何回練習することだろう。1 年の第 1 時間目から競争がしてあるので、mim-mem に限らず、どの学習作業もつぎつぎに抵抗なく生徒に参加させ集中させることができる。

よくこの指導法を千篇一律、いつも同じ指導手順だと非難し、挙句の果は無手勝流、個性に応じた教育はこの通りだと行きあたりばったり、指導案も用意しないで授業をする話をよく聞くが、生徒は本当にこれで戸惑わず学習に参加し、集中し、力を伸ばすことができるのだろうか。

ある時、プラス・バンドの指導で有数の先生が私の授

業見てを、「語学もやはり一に練習、二に練習、三に練習ですね」と感想をもらし、さらに「音楽も楽典の解釈だけでは決してよい演奏、よい鑑賞はできません。実際に楽器を扱わせ、数多くの名曲を聞かせ、体で音楽を理解させ、覚えさせることです」と述懐されていたが、至言だと思う。

私たちは初級の語学指導でいくら高遠な文法をひねりまわしたところで、余り練習の足しにはならないだろう。教室ではできるだけ多くの時間をさいて、練習量の確保につとめるべきだと思う。正しい英語の意味・構造を理解し、正しく使えることが、即、英語国民の文化的背景を知ることにつながるのだから。

Reading

もとは一文一文 intensive に練習して reading の定着をはかるなどはもちろん知らず、全文を 2~3 回ぐらいい私のあとにつかせて読ませ、あとは個人読みに時間を割いたものであったが、思えばずい分乱暴なことをしたものだ。しかも、読みの練習と、文意の把握との関係の真意がつかめず、またいわゆる逆三角形の指導技術などは全く知らなかった。この指導法では言語学的に、また心理学的に正しく、実践の中で正しいと実証された technique なら貪欲に取入れてゆく証左を reading の指導の中でも幾つも見ることができる。

Chorus で intensive reading を指導する場合、私は必ず机間をまわって個人個人の口の開け方や、発音を check するようにしている。落ちこぼれのないクラスを作るには、日常の小さな積み重ねが必要であり、これは pattern practice や、最後の暗誦練習指導にも言えることである。できるだけ目を四方八方に配って chorus の中の個人指導を心がけなければならないと思う。

Chorus ばかりの練習でも、やり方一つで、生徒は実際に reading の力がつくものであり、時間の余ったときなど相当数の生徒に指名して個人読みをやらせることがあるが、ほとんどの生徒が intonation や stress を巧みに入れ、normal speed で実に自然に読んでくれる。

Sequence signals の指導技術は非常に素晴らしい。私もこの研究はまだ不足であるが、文脈の中で意味のつながりをつける連続記号をさぐり、理解の不完全さを補い、stress や intonation の必然性を理解させることは文脈の意味把握に非常に有効であり、生徒も知的な興味を示す。1 時間の指導過程の中で私の最も楽しい一刻である。

新教材の本文の内容の check of understanding はもと全部英問英答で行なっていたが、昨年度私の学校の同

僚が、いわゆる B案による指導、すなわち日本語で理解の点検をして効果を上げている様子を見て、私も 2 年生の後半から 3 年生にかけては日本語で check するように改めた。もちろん前述の通り、英問英答で理解の点検をするのが本筋であろうが、私の学校のように玉石混淆の学校ではこの方が生徒の理解定着によいようであり、その余分の時間を練習に向けられるので、尻切れとんぼの授業は全くなくなった。

Consolidation

本校では夏季50分、冬季45分授業であるが、たとえ短縮40分授業でも consolidation の暗誦まで持ってゆく自信がついてきた。Consolidation はもともと時間の伸び縮みを調整する機能も持っていたのであろうが、私はもっぱら暗誦の強化に意を用いている。Full-choral single, double, triple repetitions をするわけであるが、ある時一文ずつ続けてこの作業をしたら、山家先生におほめをいただいて大へん恐縮した。また、reading や recitation の練習について生徒の意識調査をしたところ、単調で嫌いだという答を半ば予想していたのに反して、好きな学習作業の一つだと答えた生徒が比較的多かったのには驚いた。

書く作業は 1 年の前期に徹底してやらなければだめだ。私自身苦い経験があり反省しているが、やはり私の同僚で writing 指導には定評のある先生がいて、1 年生時代に筆記体の指導を徹底的にやっていただいたので現在私が受けついで指導している 3 年生は皆しっかりと字を書き、written 指導のあり方を遺憾なく示している。さらに、本校では written test 用紙を特製印刷して生徒が持っているので、四線に沿ってしっかりと書く習慣がついたようだ。今年度から市内の多数の学校で採用するようになって大へんうれしいと思っている。

家庭学習

時として、生徒の学習はすべて学校で完了して、家でする課題は何も与えない方がよいという意見を聞くことがあるが、私もそれが理想的であると思うけれども、週 3 ~ 4 時間の英語の時数で、これだけの教材を消化してゆくためにはやはり家庭学習、特に復習が必要だと思う。所詮、語学の学習はなまやさしいものでなく、学習のきびしさ、たえざる練習がつきものだということを知る必要があるのではなかろうか。

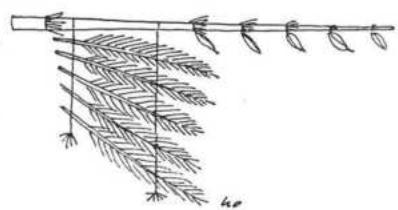
しかし、学校でできるだけの手だてを講じてやることはもちろんで、理解と暗誦だけは生徒のつまづきのないように徹底して帰す必要がある。家へ帰ってから、今日

習った教材の音読と、暗誦と、writing、これだけはかかさずやってくる習慣を身につけさせる。そのためには、written test は必ず check して翌日には生徒の手もとに戻す。成績の悪い子には励ましの言葉を与え、できた時に皆の前でほめたりすることが大切だろうと思う。

15 年間の Oral Approach 実践中には、いろいろな御批判をうけ、私も非常に迷いを生じた時期もあったが、今考えてみると、私の言語学的な勉強の足りなさ、英語の未熟さ、さらに指導技術のまづさから、多分にひとりよがりだったことを反省している。たとえば、山家先生の模範授業を拝見していてはっと思いついたことがあった。それは、生徒に問題意識を持たせ、自ら解決させるという教育のイロハを私がすっかり忘れていたことである。非常にはずかしいことである。Oral Approach の授業は生徒に受身の学習を強いる、とよく非難めいたことばを聞くことがあるが、私はそれが当らない批判であることが観念的に分っていたつもりでも、実践に移していないことに思いあたったのだ。山家先生の授業では、問題解決のプロセスを決しておろそかにしておられないことを目のあたりに拝見して、やっと自分のいたらなさに気がついたのである。ちょっとした technique の差異で、どんな大きな影響を生徒に及ぼすかに思いを至らしたとき、私は授業のむずかしさをしみじみと感じた。

ふとした機会で Oral Approach の指導法を知り、15 年間実践してきた過程で、私自身の語学力向上に相当役立ったし、また何よりもこの指導法を身につけてからは生徒に自信を持って指導できるようになったことを深く感謝している。諸科学の進歩とともに、指導技術は刻々と変化し改良されてゆくだろうが、この指導法の基本理念は変わらないであろう。オーラルの学習作業を通して生徒に基礎文型の完全学習を達成させるのに、理解——暗誦——応用練習のいずれが欠けてもだめだということを、私は実践を通して学んできたし、今後もこの信念をつらぬきたいと思っている。

(旭川市立常盤中学校教諭)





HŌJŌKI

方丈記

KUSAJIMA TOKISUKE

草 島 時 介

If I feel inclined, I dispense with saying prayers and reading books, for which no one could admonish me, and of which I was never ashamed before any friend. Although I make no special effort to keep silent, te solitude prevents me from the sins of the tongue. Having no companion, I have no chance to enter into conversations and thereby am saved from committing sins of the tongue. I have no chance to break the canons of Buddhism, even though I take no great pains not to do so.

When at morn I think of the white ripples left in ships' wake, I sit on the river-bank and watch boats passing to and from Okanoya, and compose verses in the mood of Manshami¹⁾; in the evening listening to the rustle of the cinnamon-leaves, I think of the scene in the Bay of Jinyō²⁾ and play on the Biwa after the style of Gen Totoku³⁾.

When my mood of amusement is not gone, I play sometimes the note of 'Autumnal Wind' accompanied by the echoes of pines. When I hear the water singing, I play the song of the 'Flowing Stream'⁴⁾. Unskilful as my art is, I am satisfied with playing for myself, not to refresh others.

At the foot of the hill stands another small cottage, built of brushwood, where the keeper of the hill lives. He has a young son who often visits me. When I have time to spare, I take a stroll with him. Separated in age as we are, he being sixteen and I sixty, we feel then equally refreshed and

若念佛物うく、讀經まめならぬ時は、みづからやすみ、身づからおこたる。さまたぐる人もなく、又はづべき人もなし。ことさらに無言をせざれども、獨りをれば、口業をさめつべし。必ず禁戒をまもるとしもなくとも境界なれば、なにとつけてかやぶらん。若又あとのしらなみにこの身をよするあしたには、をかのやにゆきかふ船をながめて、満沙彌が風情をぬすみ、もしかつらのかぜはをならすゆふべには薄陽のえをおもひやりて源都督のおこなひをならふ。若餘興あれば、しばしば松のひびきに秋風樂をたぐへ、水のおとに流泉の曲をあやつる。藝はこれつたなけれども人のみとをよろこばしめむとにはあらず。ひとりしらべ、ひとり詠じて、みづから情をやしなふばかりなり。

- 1) Abreviated name of Mansen-Shami. Shami is the man who has been just newly enlisted in Buddhism. Mansen is Kasano-asomimaro by secular name.
- 2) A place of China to which Hakurakuten, one of the most noted poets of China in the Age of Tō, was exiled. There he heard the verse of 'Jinyo-ko'. In this verse we find, '...rusling in cinnamon-leaves...'. Kamo-no-Chomei remembering this verse, he wrote this part in the same mood as that of Hakurakuten.
- 3) Minamoto-no Tsunenobu. He played 'biwa' skilfully. He made Katsura (Cinnamon) style of 'Biwa'.
- 4) A famous song of 'biwa'.

又ふもとに一のしばのいほりあり。すなはち、この山もりがをる所なり。かしこにこわらはあり。ときとききたりてあひとぶらふ。若つれつれなる時はこれをともとして遊行す。かれは十歳これは六十。そのよはひとこのほかなれど、心をなぐさむことこれおなじ。或はつばなをぬき、いはなしをとり、又ぬかごをもり、せりをつ

amused.

Sometimes we pluck the great rush flowers or gather cranberries; and sometimes we fill our baskets with wild potatoes or parsley. Occasionally we go down to the water-fields around the hill and gather fallen ears of corn to weave a mat. In fine weather I climb up the top of the hill to behold my native place in the distance and enjoy the views of Kowatayama, Fushimi, Toba, and Hatsukase—splendid views which belong to no one but him who looks at them. Thus I can amuse myself freely. When I am not tired and feel like walking farther, my mind flies afar along the tops of the hills. I cross over Sumiyama, pass beyond Kasadori, and make a pilgrimage to Iwama, and worship at Ishiyama. Sometimes I visit the remains of the old Semimaru⁵⁾ over the plain of Awazu or cross the River Tagami to worship at the tomb of Sarumaru Dayū⁶⁾. Often I return home with cherries, maple branches, ferns or fruits according to the season. Some of these I offer to Buddha and some I take as presents.

The moon shining in at my window on a calm night makes me remember the men of old, and monkeys' cries moisten my sleeve with tears. Fireflies in the sward gleam like torchlights of Makinoshima; a morning shower sounds to me like the wind rustling through the leaves; a wild-bird's note makes me wonder whether it is my father or mother; the hart coming close by my hut reminds me of how far I am from the world. Sometimes I stir up the ash-covered charcoal and make it an old man's companion after a midnight dream. Though the forest is not very dense and terrible, owls' moping voices arouse pity in me. Such scenes are never exhausted here on this hill. Those who think profoundly and feel sensitively would find more of interest here than I do.

When I first settled here, my idea was to stay in this hut only for a short time. Since then five years have passed; my temporary dwelling has become a permanent one; leaves accumulated deep under the eaves have decayed; moss grown on the floor. Since I came to the hill, I have heard that

む。或はすそわの田ゐにいたりておちほをひろひて、ほくみをつくる。若日うらゝかなれば、みねによぢのぼりて、はるかにふるさとのそらをのぞみ、こはた山、ふしみのさと、鳥羽、はつかせをみる。勝地はぬしなければ、心をなぐさむるにさはりなし。あゆみわづらひなく、心とほくいたるときは、これよりみねつゞき、すみ山をこえ、かさとりをすぎ、或は石間にまうで、或は石山ををがむ。若は又あはづのはらをわけつゝ蟬歌のおきながあとをとふらひ、たなかみ河をわたりてさるまろまうちきみがはかをたづぬ。かへるさにはをりにつけつゝさくらをかり、もみぢをもとめ、わらびをゝり、このみをひろひて、かつは佛にたてまつり、かつは家づとにす。若夜しづかなければ、まどの月に故人をしのび、さるのこゑにそでをうるほす。くさむらのほたるはとほく眞木の島のかゝりびにまがひ、あか月のあめは、おのづからこのはふくあらしににたり。山どりのほろとなぐをきゝても、ちゝかはゝかとうたがひ、みねのかせぎのちかくなれたるにつけても、よにとほざかるほどをしる。或は、又うづみ火をかきおこして、おいのねざめのともとす。おそろしき山ならねばふくろふのこゑをあはれむにつけても、山中の景氣、をりにつけてつくる事なし。いはむや、ふかくおもひ、ふかくしらむ人のためにはこれにしもかぎるべからず。

5) Noted player of 'biwa'.

6) Noted poet in the beginning of the Heian Era.

おほかた、この所にすみはじめし時は、あからさまとおもひしかども、いますでにいつとせをへたり。かりのいほりもやゝふるさととなりて、のきにくちばふかく、つちゐにはこけむせり。おのづから、ことのたよりに、みやこをきけば、この山にこもりゐてのち、やむことなき人のかくれ給へるも、あまたきこゆ。まして、そのか

many noble persons have passed away. Still more of the humble must have left this world. How many houses I can count which were burnt in raging fire! Only this small shed is cozy and free from such fear. Though not spacious, it is enough to shelter me; I have a bed by night and a seat by day. The gona likes a little shell to live in, because he knows content: the fish-hawk lives on a rough beach, for it is afraid of men. In such a way I think of myself. Aware of myself and of the world, I have nothing to desire and no friend of seek. To be quiet in mind, to be troubled with nothing—these are my happiness.

People generally do not build their houses for themselves, but for their families, or friends, or tutors and lords, or even for their oxen, horses and treasure. I, however, made a house for myself alone, because I have no such things to consider, live with, or rely upon.

What is called friendship in this world is respect for the rich and openhanded and indifference to the righteous and kind. It would be better for us to make friends with music and nature. Servants mind only rewards and punishments and think highly for those who favour them. No matter how kindly they may be treated, they are never quiet, but always complaining about something. It would be better to make ourselves our own servants. Then if we have something to do, we can use our own hands and legs. This, though somewhat troublesome, is far easier than employing others. When I have somewhere to go, I employ my own legs. This is far less irksome, though painful, than to care for a horse or vehicle.

Now we use ourselves in a double way, employing our hands as our servants and our legs as our vehicles. The mind is satisfied with them. It knows our body's troubles; it may employ them when fresh, and allow them to rest when tired. So it need never become mortified, if the body is idle. Moderate walking and work are good for health; how then should we sit doing nothing? To trouble others is a sin; why should we ask others for help? I live substantially the same way with re-

ずならぬたぐひ，つくしてこれをしるべからず。たびたびの炎上にほろびたる家，又いくそばくぞ。ただかりのいほりのみのどけくして，おそれなし。ほどせばしといへども，よるふすゆかあり，ひるゐる座あり。一身をやどすに不足なし。寄居はちひさきかひをこのむ。これ身しれるによりてなり。みさごはあらいそにある。すなはち人をおそるゝがゆゑなり。われまたかくのごとし。身をしり，よをしれゝば，ねがはず，わしらず。ただしづかなるを望みとし，うれへ無きをたのしみとす。惣てよの人のすみかをつくるならひ，必ずしも身のためにせず。或は妻子眷属の為につくり，或は親昵朋友の為につくる。或は主君師匠および，財寶牛馬の為にさへこれをつくる。われ今身の為にむすべり，人の為につくらず。ゆゑいかんとなれば，今のよのならひ，此の身のありさま，ともなふべき人もなく，たのむべきやつこもなし。

夫人のともとあるものは，とめるたふとみ，ねむごろなるをさきとす。必ずしもなさけあるとすなほなるとをば愛せず。只絲竹花月をともとせんにはしかじ。人のやつこたる物は賞罰はなはだしく，恩顧あつきをさきとす。更にはくゝみあはれむと，やすくしづかなるとをばねがはず。只わが身を奴婢とするにはしかず。いかゞ奴婢となるとならば，若なすべき事あれば，すなはちおのが身をつかふ。たゆからずしもあらねど，人をしたがへ，人をかへりみるよりやすし。若，ありくべき事あれば，みづからあゆむ。くるしといへども，馬くら牛車と心をなやすにはしかず。今一身をわかちて二の用をなす。手のやつこ，足ののりものよくわが心にかなへり。心身のくるしみをしれゝば，くるしむ時はやすめつ，まめなればつかふ。つかふとてもたひたびすぐさず。物うししても心をうごかす事なし。いかにいはむや，つねにありき，つねにはたらくは，養性なるべし。なんぞいたづらに，やすみをらん。人をなやますは又罪業なり。いかゞ他の力をかるべき。衣食のたぐひ又おなじ。ふぢの衣，あさのふすま，うるにしたがひて，はだへをかくし，野邊のをはぎ，みねのこのみ，わづかに命をつぐばかりなり。

gard to diet and clothes. A garment of fuji and a bed-quilt of hemp are enough to cover my body. And the great rush flowers in the field and fruits from the hills will preserve me from hunger.

All things in the world come from only one mind. How useless treasures and palaces are, if the mind is uneasy. Here in solitude, I love my lonely cottage and feel pity for those who toil in the dusty city, though I should be ashamed to become a beggar there. If you doubt what I say, you have only to look at birds and fishes. Fishes like water; none but fishes know the reason. Birds are fond of woods; but only birds know way. It is the same with my seclusion. Its pleasure can never be enjoyed by those who have not.

I have but little left of life now; I approach nearer and nearer to the peak of death, as the moon slides down the sky toward the mountain top. Just as I am about to start for the dark land of death, how should I trouble myself with earthly cares? The teaching of Buddha is to love no earthly things. It would be a sin even to love this mossy cottage; it might also be an obstruction in the way of salvation, should I repose on the lap of tranquility. Woe to them who waste their time wallowing in pleasures of no value!

One still morning when I was sunk in meditation over this, I asked myself:

"To escape from the world and live among woods and hills is only to set one's mind at ease and practise one's principles. And yet you, although you look like a sage, have an impure mind. Your conduct is even inferior to that of Shuribandoku,⁷⁾ though your hut resembles that of Jyōnyōkōji⁸⁾. Is it the effect of poverty that troubles you? Or is it the influence of impurity that makes you mad?"

I could answer nothing to the question, but said prayers twice or thrice for mere form's sake.

The last day of March, the Second year of Kenreki (1211)⁹⁾

Monk Ren-in, at the hut of Toyama.

夫三界は只心ひとつなり。心若やすからずば、象馬七珍もよしなく、宮殿樓閣ものぞみなし。今さびしきすまひ、ひとまのいほり、みづからこれを愛す。おのづからみやこにいでゝ、身の乞匂となれる事をはづといへども、かへりてここにをる時は他の俗塵にはする事をあはれむ。若、人このいへる事をうたがはゞ、魚と鳥とのありさまを見よ。魚は水にあかず。いをにあらざれば、その心をしらず。とりは林をねがふ。鳥にあらざれば、其の心をしらず。閑居の氣味も又おなじ。すますして、誰かさとらむ。抑一期の月かけかたぶきて、餘算の山のはにちかし。たちまちに三途のやみにむかはむとす。なにのわざをかゝこたむとする。佛のをしへ給ふおもむきは事にふれて執心なかれとなり。今草庵をあいするも咎とす、閑寂に着するもさはりなるべし。いかが要なきたのしみをのべて、あたら時をすぐさま。しづかなるあか月、この理をおもひつゝけて、みづから心にとひていはく、よをのがれて、山林にまじはるは心をよさめて、道をおこなはむとなり。しかるを汝すがたは聖人に似て心はにごりにしめり、すみかはすなはち淨名居士のあとをけがせりといへども、たもつところはわづかに周梨槃特が行にだにおよばず。若、これ貧賤の報のみづからなやますか、はた又妄心のいたりて狂せるか。そのとき、心更にこたふる事なし。只かたはらに舌根をやとひて不謗の阿彌陀佛兩三遍申て、やみぬ。

于時建暦のふたとせやよひのつこもりごろ、柔門の蓮胤とやまいのいほりにしてこれをしるす。

- 7) The most stupid deciple of Gantama.
8) Lived in a small hut, 6 feet by 6 in the same age of Gantama.
9) 1872. In the reign of the Emperor Juntoku.

『実践英語教育』

山家保著, ELEC 出版部
416 pp., ¥ 1,800

SATO HIDEKI
佐藤秀志

著者は、はしがきで、この大部な本を書いた動機を2つ述べておられる。

「ひとつは定年を2,3年後にひかえて、各研究指定校・研究協力校の先生方のご協力を得て、過去20年間に亘って進めてきた英語教育の実践研究の結果を一応まとめて発表し、ご協力に感謝の意を表したかったこと、ともうひとつはこの研究の成果をこれから英語教育に携わろうという方々や、まだ英語教育界に入って日の浅い方々に是非識として知っておいていただきたいということであった。」

第5章までを一気に読んだ書評子は、できるだけ多くの現場教師のみならず、大学の英語科教育法担当教官にもぜひこの本を読みでもらいたいと思った。日本には理論家や批評家が多すぎるのである。

「Pattern Practice は意味を考えない、situation を離れて、ことばをあやつる機械的なプラクティスだ、pattern practice は言語活動ではない」といった見当はずれの批評をしてきた人たちは、この本に示された指導理論と指導技術を見なおしてほしいと思う。また、上級学年に進むにつれて英語嫌いがふえてくるのが普通なのに、この本に紹介された研究指定校の生徒たちが、例外なく英語が好きになり、成績も向上したデータを検討することは、現場教師にとって何よりの刺戟剤となろう。

指導要領の改訂による授業時間の削減、依然として変わぬお粗末な教員養成・研修制度、現場教師の選択を許さぬ教科書採択制度...etc 数多くのハンディを背負わされ、ややもすれば挫折感の日々を送りがちな教師たちへの、この本は情熱溢れる啓蒙の書である。

まず、目次によって内容を紹介しよう。

- 第1章 日本と世界と英語教育
- 第2章 言語観——指導理論の言語学的背景
- 第3章 言語の学習過程
- 第4章 指導理論の心理学的背景
- 第5章 教材論の変遷

- 第6章 発音指導
- 第7章 文法指導
- 第8章 英語の理解のための指導（新教材の導入）
- 第9章 暗誦のための指導
- 第10章 応用練習の指導
- 第11章 Writing の指導
- 第12章 中学校英語の学習指導
- 第13章 高校英語の学習指導

初心者にも読みやすいようにという配慮から、英文の引用はできるだけ少なくなっているが、その代り脚注や巻末にある充実した参考文献リストは読者の研究意欲をそそる。とくに、この本には山家氏が編集した *Applied Linguistics and the Teaching of English* (ELEC 1970) からの引用が多いので、読者は原典にあたられるようお奨めしたい。

目次だけを見てもわかるように、英語教育目的論から書き起すこの本は、理論と実践の記述がバランスを保った、類書に比を見ない包括的な書である。書評子は、現場における最善の教授法は折衷主義であると常々思っているが、著者もはしがきで、「英語教育の前進に実際に役立つものは、どしどし受入れてゆくべきものである。Fries や Chomsky から学ぶだけではない。Sweet からも de Saussure からも、そしてとくに Palmer からも学ぶところが多いのである」と述べている。何よりも書評子にとって嬉しいのは、そしてすべての読者にとって説得力があるのは、著者が理論をうのみにせず、長期にわたって教育の現場で実践した結果を自信をもって発表する態度である。この態度は科学的態度であり、われわれの英語教育の進歩を約束するものである。山家のこの態度はまさに R. Lado を思わせる。

R. Lado は 1971 年 ELEC 会館で連続講演をし、言語教育はひじょうに複雑なので、「科学的態度」を必要とするのだと次のように述べたことが想い起されるのである。

"... The scientific attitude is not the perfect method. It is not "the" method. It's an attitude that attempts to clarify, to rationalize, and to experiment in each one of the aspects of language teaching and that is willing to change each element as new evidence and new insights appear."

ガリオア留学生として Fries の *Teaching and Learning English as a Foreign Language* (1945) で目を開かれた著者だけあって、この本には構造言語学者のうち、とくに Fries や Twaddell からの引用が多い。著者の言語観は「言語の本質は音声である」(p.18), 「言語は一連の習慣である」(p.20)などの表現でわかるように、構造言語学と行動心理学が支えになっているようである。したがって、W. Rivers: *The Psychologist and the Foreign Language Teacher* (1964) はしばしば引用されるが、Bruner や J. B. Carroll の主張は聞かれない。著者が Palmer を見る目も是非主義である。p.88 で「Palmer の言語の学習とは所詮暗誦するという行為の連続に過ぎない」という言葉の意味の深さを今更ながら痛感させられるのである」と述べているかと思うと、p.74 では「彼の Direct Oral Method が現在の言語観から見ると大きな誤りを含んでいる」ときびしい批判を加えている。生成文法については、著者がむかし指導主事の頃、仙台高1年の授業をしたとき、バタンプラクティスの最中にある生徒が教科書に出たこともない What does she keep warm in her pocket? という文を反射的に作れることを語り、バタンプラクティスの転換の練習の理論的裏付けをしてくれたのが Chomsky の *Syntactic Structures* (1957) であったと述べている。「中核文の変形や nominalization や embedding などは大いに英語教室で役立つものである。われわれの任務は生徒に文法理論ではなく、usage を教えることである」(p.68) という考えには、書評子は双手をあげて賛成である。したがって文法指導も usage 研究の観点から見ることが大切なので、大学に学ぶ prospective teachers of English は、必ず伝統文法（歴史的言語学派）を学ぶことが生徒のためにも幸福ではないかと思われる。

この本は、明治時代に偉大な足跡を残したわが国の英語教育者にはふれていないが、外国語学習において、耳、眼、口、手を使うことの重要さを、既に明治30年(1897)の昔に外山正一が『英語教授法』で述べている。

「外国語の授業に於ては、教師は舌を惜まずしゃべらざるべからず、手を惜まず黒板を使用せざるべからず、同じ語句、同じ文章を、何度も、言ふて聞かせ、書いて見せること必要なり。亦生徒をして、耳と口と、眼

と手とを怠りなく働かしむるように努めざるべからず」明治44年岡倉由三郎は『英語教育』で正確に読むことのほかに敏速に読むことを強調して、「この正確 (accuracy) と敏速 (velocity) とは英語を直読直解するによりて始めて達せられる」と述べているが、山家のこの本にも、浅野高校の実践例が紹介されているのは嬉しいことである。(pp.402-9)

新指導要領ができるから、「言語活動」をどうするかが論議の的であるが、本書に詳しく述べられている controlled conversation から pupil-pupil dialogs (pp. 260-6) の方法が聞くこと・話すことの領域の「言語活動」に、貴重な指針を与えてくれる。Free conversation は40人～50人もいる普通教室では不可能だと思う。第一、学校は、いわゆる conversation を教えるところではないのだ！

授業が能率的・効果的に行なわれるには、どうしたらよいかは現場教師の最大の関心事であるが、これは教師が次のような実践をやり通す意志があるかどうかにかかっているように思う。そしてこれは教師の個人プレイでは不可能である。緊密なチームワークが必要であろう。

(現在も将来も1年から3年までクラスがそのまま持ち上ることはまずないであろうから)

「生徒に英語に興味を持たせるためには、先ず英語をわからせることが先決問題である。筆者は昭和29年以来毎年中学校の英語の研究指定校・研究協力校というものを手がけて来た経験を持っている。これらの学校では例外なく、毎時間学習した英語の教材を、その次の時間までに全部暗誦して、本を見なくても書けるようになってくることを宿題として課し、そしてつぎの時間には、必ず英語で書いて発表する5分間のテストを行なってきた。」

次に書評子の考え方ではないかと怖れながら、あえて卓見を述べさせて頂きたいことが2,3ある。

音読の練習は7,8分～10分かけよと述べている(p.232)のは大賛成であるが、著者は齊読において生徒全體が、大きな声で、そろって、速く読んでいれば、個人に読ませてみなくとも reading の指導効果は、はかられる筈である」(p.230)と記しておられる。これは中学生にはあてはまるであろうが、筆者の13年間の高校の経験では、齊読に時間をとるのは、高校では効果的ではないように思えるのである。この本の高校の Teaching Plan を見ると review reading もすべて齊読となっている。理論上は齊読が完全に行なわれるならば、そのあとで、中位以下の2,3の生徒に読ませて正しく読んで

いるかどうかを check する程度ですむことになる。齊読はたしかに有益な pedagogical device ではあるが、中学上級から高校に進むにつれて、へらして行くべきであると思う。上級に進み文が長くなるほど齊読はしにくくなり、また心理的に生徒は齊読に興味を感じなくなり、むしろよくやってきた生徒は指名読みを好むようになる。齊読をさせると生徒は声をそろえることにこだわって意味を考えるひまがない。Sibayan が齊読は “objectionable” と述べているのもこの弊害を認めるからであろう。くりかえして言うが中学では Chorus Reading を主体にし、せめて復習の時間には、個人読みも加えたいのである。

書評子が山家氏の著書によって啓蒙されたのは “Pattern Practice と Contrast” (開隆堂 1956) であった。研究社英語科ハンドブックスの中の「オーラル アプローチ」(1959) にも 1 時間の授業の配分が解説されているのであるが、この両者に、新教材の導入・展開の一作業として、translation に 10 分をかけることを含めた作業が「バランスのとれた合理的なもの」と述べられており、今日に至るまで大きな疑問を持ってきたのである。10 分間も翻訳・訳読作業にかけることは、直読直解の習慣を養う目的とは正反対のものに思えるからである。因みに「オーラル アプローチ」には次のように書かれている。

「…従って、最初から model reading に従って正しく読む練習を徹底させた後、始めて translation に入るのである。」

Translation は one sentence ずつ 3 つの段階を経て行なう。(1)まず生徒に必ず読ませてから訳させる。この場合、必ず要所要所はつっこんで、生徒が虎の巻の訳文をさっと流すようなことは許さない。(2)次に正しい訳を確認させる意味で、教師が読んでから明確な訳をつける。(3)この教師の訳が確實に消化されたかどうかを確かるために、他の幾分能力の劣る生徒に読んで訳させる…後略」(pp. 236-7)

このような徹底した訳読作業をやっていると、これだけで 10 分はかかってしまうだろう。しかもこれが「宮城県で 4 年間に 5 つの研究指定校について Oral Approach の実践研究を行なった実験に基く結論である」(p. 231) と断言されると、新しい英語教育を考えている書評子などには、納得の行かない結論として心に残るのである。このたびの『実践英語教育』は山家氏が今まで著述された英語教育実践論の集大成であり、“山家メソッド”的決定版と言えるものであるから、この translation の作業がどうなっているかは書評子の一大関心事であっ

た。この本では教案が *Oral translation with the textbooks closed* (p. 288) と改められている。まさに “radical change for the better” であると思う。

日本の英語教育界に根強く残っている Grammar-Translation の功罪について、とくに関心を持ち、この方法が英語教育の主流をなしている間は、生徒が English for Communication の基礎力さえつけることができないと信じている書評子にとっては、本書でもう少しページをさいて、著者自身のつっこんだ翻訳・訳読論を展開して頂きたかったと願うのは、望蜀の感であろうか。

次に、時期尚早の予習の弊害について論じられたのは同感であるが、「予習の準備ができるのは 3 年生の第 2 学期の後半から」(p. 318) という考え方も論議のわかれどころであろう。書評子は 3 年の後半から予習指導をさせていたのでは、高校入学後生徒はとまどうこと必定と思うのである。2 年の初め頃から少しづつ辞書のひき方を教え、以後、徐々に予習する習慣をつけさせるべきだと思う。いわゆる「完全学習」で身についた言語習慣や知識を実際に活用させる作業は予習であろう。そしてこの予習の習慣も急に身につくものではない。ことばに対して積極的な興味を感じさせるのは予習の大きな効用であろう。勿論英語の学習で、復習の大切なことはいくら強調してもしすぎることはない。3 年まで全く予習をさせない purist 的考え方方に疑問を持つのである。(cf. ELEC Bulletin No. 20, 1967)

次に日本語のがんの発音を解説した例について(p. 40)(1), (2)はもちろんよいが(3)の日本語がどう見ても不自然である。2, .3 の友人に聞いたがこんな日本語はないという。

- (1) 「それはどんな鳥ですか」「それはがんです」
- (2) 「がんが飛ぶ」
- (3) 「がんまでが飛ぶ」

(3)は要するに「がん」のつぎにマ行の音がくればよいのであるから、例えば、「近頃はがんも見えなくなった(こなくなった)」とでもしてはどうであろうか。

次は p. 50 の *The Making of English* の引用の訳で、 “It is not wonderful that the tendency to simplification of *accidence* should be widely prevalent.” の *accidence* を「語形論」とされているのは misleading で、「語形変化(が単純化してゆく傾向)」のことではないだろうか。

「It is wonderful. というのは現代ではそれはすばらしい」という意味であるから、It is not wonderful. はそれはすばらしくないという意味かと思えば、そうではない…」

(p. 64 へつづく)

『英語の測定と評価』

デイビット・ハリス著、大友賢二訳注
ELEC 出版部、xii+194 pp. ₩ 950

WAKABAYASHI SHUNSUKE

若林俊輔

言語テストに関する一般の関心は、現在のところ十分と言うには程遠い状態である。英語教師は、日常四六時中、テストと同居しているはずだが、とかく、テストはどうしたら正しく行なえるかを考えたがらない。評者の推測だが、これはおそらくテストの理論というものが、一般教師には難解すぎるというところにある。一時、テストというと教育統計学（らしきもの）で、こけおどしをする風潮があった（評者自身これに加担したことがあった。恥愧に耐えない）。このこけおどしが、英語教師をテストの理論から遠ざけてしまったようだ。「統計がわかるくらいなら、英語教師にはならなかった」などといふ、どうにも扱いかねる言いわけのことばを作り出してしまった。

こういうときに、David P. Harris 教授の *Testing English as a Second Language* が、日本における言語テスト研究の第一人者である大友賢二氏によって訳出され、公にされたことは最近にない朗報である。英語教師の必読書として、広く読まれ、「指導理論から指導へ、さらに指導から指導理論の検証へ」というサイクルにおいて、「指導理論の検証のための基礎づくり」（訳者はしがき）が誤りなく行なわれるようになることを期待したい。

それにしても、この本を読んで何よりもまず気づくのは、評者を含めて、一般にテストに関する認識が非常に浅薄だということである。たとえば、p. 176 に「訳者注」として訳者自身の見解が述べられている：

「ここで考えさせられる点は、話す能力を聞く能力と切りはなして考えることは、いったい不可能なのだろうかということである。つまり、listening の能力がなければ speaking ができないのかという問題である。たとえば他のひとによって話された 2 つの外国語の音〔「2 つの外国語音」としたほうがわかりやすい——評者〕を識別できなければ、それを発音することはできないのか；逆に、発表はできるが、それを耳で聞いても理解できな

いという場合はないだろうか」という疑問であろう。この疑問に答えてくれる発言はいくつかあるが、…」

評者自身、以前から、「学習指導要領」が「聞くこと・話すこと」という領域を設定し、これを「読むこと」「書くこと」と対置していることに疑問を持っていたし批判も加えてきた（石井正之助編『聞き・話す領域の指導』研究社、昭和 45 年、など）。だが、聞くことができなくとも話せる、話せるが聞くことはできない、というような発想は、教室における具体的な指導手順にがんじがらめになって到底不可能だったわけで、訳者大友氏のこの発言には全く驚いた。そして、もう一度頭の中を整理しなおさなければならないと痛感した。

著者 Harris 教授には、少々失礼な言い方になるが、この訳書の見どころのひとつは、今も引用した、巻末の「訳者注」にある。ほんのいくつか例にあげると、「Reading Test の項目形式：Clozentropy Procedure」(pp. 169—172), 「Speaking の能力測定に関する問題点」(pp. 175—177), 「絵の刺激に対する応答」(pp. 178—180)。そして、「訳者注」は単なる解説にとどまらず、訳者自身の研究と経験に基づく見解の表明となっている。たとえば「テストの信頼性と妥当性の関係」(p. 162) において：

「英語の発音が正しくできるかどうかを測定するのに用いられる筆記試験は、それが客観テスト形式である場合には、きわめて首尾一貫した結果を示し、高い信頼性をもつものと考えられる。ところが、そのテストは、「発音が正しくできるか」という目的をもったテストとして満足のゆく妥当性をもっているかということになると、いささか疑問があると言えるのである。」

評者としては、「おおいに疑問がある」と書いてほしいところだが、いずれにせよ、この種の発言は、現在でもなおくり返し行なわれる必要を感じる。

冒頭に少々触れたが、テストを考えるには、いつかはどうしても初步的な統計の考え方を知らないければならない。たとえば、素点をそのままうのみにしてはならない、「相対的な位置を決定する場合は、…平均点と標準偏差を考慮に入れて行なうことが大切」(訳者注「標準得点 (standard score), p. 184) というようなことである。本書の第1章「言語テストの目的と方法」や、第2章「すぐれたテストの特性」は、その多くを、テストのこういう基本理論にあてている。テストの考え方を知るには、やはり必須の事項であろう。だが、一般読者は、第3章から読み始めてよいと思う。第3章「文法構造のテスト」、第4章「聴取識別と理解のテスト」、第5章「語いのテスト」、第6章「読解力のテスト」、第7章「書くことのテスト」、第8章「口頭発表能力のテスト」。以上は、英語教師である我々が、日夜どのようにしたらよいかと、ひそかに悩んでいる話題ばかりで、具体例を示した具体的な説明・解説は、すぐにでも役だつものである。このどこからでも読み始めてよいと思う。

第9章以下は、再びやや専門的な領域に属する。第9章「テストの作成」、第10章「テストの実施」、第11章「テスト結果の解釈と利用」、第12章「基本的テスト統計の算出方法」、そして「精選参考文献」。

さきにも述べたように、この訳書の面目は訳者の「訳者注」にある。これをまとめただけで、優に一冊の「言語テスト入門書」となろう。そこで、ここまで仕上げたのだからもうひと押し、と評者は欲張りたくなる。たとえば面接テストについて：――

「…それがあらゆる可能な最もすぐれた技術であるという強い確信から生まれてきたのではなくて、彼らの学生の口頭能力を評価するにはそれよりよい方法がないからということだけの理由である」(p. 7)

確かにそのとおりなので異存はないが、ここでさっそく John A. Upshur の構想に触れておいたほうがよかったと思う。Upshur 構想については第8章の注で触れているが、もっと早めるべきである。著者の発言を「ああそうか」と読み流すだけで終わってしまう。また、この文章の近くにある注で：――

「はっきりと例外として考えられるのは、テープに録音された面接テストである〔この部分は「面接テストにおいて、その内容を録音にとることである〕のようにしたほうがわかりやすい――評者〕。しかしほんどの面接の場においては、受験者への影響を考えるとテー

プの使用は非実用的であり〔「実際的ではないし」ということか――評者〕、のぞましいことではない」(p. 6 fn.)

素人的判断によると「かくしマイク」の方法だってあるのではないか、となるわけで、やはり、訳者の見解を聞きたいところである。もうひとつ例をあげると、信頼性の測定について Kuder-Richardson の方式に触れ：――

「しかし、ここでは、各項目を通過した者と通過しなかった者との割合によって決定される 内部項目均一性 (inter-item consistency) と関係してくるものである」(pp. 16-17)

Kuder-Richardson については、第12章の「訳者注」で簡単な説明があるが、ここ(第2章)すでに解説が必要であろう。そうしないと「通過した者」とか「通過しなかった者」が信頼性とどういう関係があるのか全く理解できない。それに inter-item consistency [これは「項目間の均質性」ということになろう] とはどういうことかも知らなければならないだろう。これについては p. 188 の注にもない。

こういう注文を出したのは、これも冒頭で述べた「かけおどし」と関係がある。とにかく「統計」はむずかしい。「ガウス分布」だとか「分散」だとかいう用語を聞いただけで、英語教師は卒倒するか逃げ出すかしてしまう。第3章から読み始めてよい、と書いたけれども、所詮は難解な用語が飛び出すところに行きつかなければならない。ここで読者に逃げ出されることは、訳者としての大友氏のみならず、研究者としての大友氏も非常に困惑するであろうし、積み重ねが必要であると「訳者はしがき」で説く、その趣旨にも反する結果になることをおそれるのである。

訳者の見解を聞きたいところは、ほかにある。たとえば「文構造のテスト」のところで、悪い項目の例をあげ [structur の訳が「構造」となっているところと「構文」となっているところ (たとえば、p. 103 の表) があり不統一]：――

“Do you drink coffee?”

“Not any more, but I —.”

- A. used to
- B. am used to
- C. use to
- D. used to do

この問題は bad item である、なぜなら、A. と C. は発音は同じで、問題はつづりだけである、したがって C. を used to drink とすればよい、と説明がある。これはどうもすっきりと納得がいかない。そこでやはり、「訳者注」がほしいということになる。

読んでいて、はたと行き詰ったところがあった。その一例、標準偏差に関する説明で、平均 61.90、1 標準偏差 15.98 というテストを受けて 80 点をとった者は、83.99 パーセントよりすぐれている、という説明のところである (p. 130)。この 83.99 がわからない。1 標準偏差未満よりはすぐれている というのであれば (80 点の位置は、 1.12σ となる)、83.89 パーセント——これは 0.99σ の値——でなければならない。 1.11σ よりもすぐれているとすると、86.65 パーセントとなる。結局わからずじまい、やはり解説がほしかった。原文の説明の仕方が不親切だからなおさらである。

訳語について、専門用語の訳は、統計用語、教育用語とも、非常に苦心を払っているのがわかる。英語の教師は、原語のまま言ってしまうくせがあるから、consistency を「均一性」とするか「一貫性」とするか考えたこともない。そこが訳者の苦しむところである。coefficient, quotient, index のようなことばが次々と出てきては、全く汗みどろであろう。——temporal stability を「一時の安定度」としてあるが (p. 15)，これは「時間

的安定度」ではないだろうか。scorer's stability に対するものと思うがいかがであろうか。もうひとつ measures of central tendency を「中心的傾向の測定」としてあるが (p. 129)，measure は「度合い」というようなことではなかろうか。Any measure of central tendency is known as an average という文を読んだことがある。どうも自信はないが、不審に思ったのでご教示いただきたい。もうひとつ disadvantaged (children) の訳。「たち遅れている」とあるが (p. 25 fn.)，これは文字どおり、不利な条件下にあるということで、日本でいえばさしづめ「特殊教育対象児童・生徒」(文部省『わが国の教育水準』など参照) ということになろう。アメリカであつたら、これに Sesame Street が対象としたような子どもも含むことになろう。

後半は妄言を並べてしまったが、最初にも述べたとおり、language testing の現状を考えると、現われるべくして現われた訳書である。原文は英語だから、英語の教師たるもの、原文で読むべし、という意見も出るかもしれないが、この類の本はそういうわけにはいかないと、しみじみ思い知らされた。大友氏が、さらに「訳者注」を充実して版を新たにされ、我々に testing に関するより明瞭な知識を与えられることを、心から期待する。

(東京学芸大学教授)

(p. 61 よりつづき)

と説明されているが、wonderful は現代英語でも that causes wonder; surprising が第一義で、どの辞書にも「すばらしい」の語義は ((話)) (=colloq.) とある。この説明は著者の思いがいではなかろうか。(勿論 It is no wonder... と同じ意味)

些細なミスプリントを指摘させて頂くと、

p. 42 l. 12 環元→還元

p. 52 文野→分野

p. 91, 98 あ。→ある。

p. 128 例えがが→例えば

p. 149, 150 Jesperson→Jespersen

p. 267 上掲の図表→p. 24 の図表

p. 356 高等学校初級英語の記述で、「標準単位 6 全部

を履修するとしても一週 2 時間であり…」とあるのは、一週 3 時間のあやまり。(初級英語は全 2 冊で、2 年間で終了する)

p. 360 「このような音声面のテストが大学入試に入っ

てくるのは、もう時間の問題であると関係者は見ている」書評子もかくありたいと切に望むのであるが、最近は、大学から必修科目としての英語、体育をやめよ(中教審)とか、高校の英語が選択になった以上、大学入試に英語をいれるのはおかしい、入試科目から英語をはずせという声も大学内外から起ってきているので、入試の英語がどのように変貌するかは予断ができるのではないか。いずれにしても日本の英語教育が入試のための英語にとらわれてゐる限り、教師にも生徒にも、苦斗の日々が続くであろう。このように考えてみると、この本の第 1 章「日本と世界と英語教育」を再読吟味して、日本における英語教育の目標を改めて考え直すことが必要になってくる。

『実践英語教育』の上梓は 1972 年の英語教育界にとってまことに大きな収穫である。進歩をめざすすべての英語教師にとって must の書であることを書評子は断言してはばかりない。

(奈良教育大学助教授)

新刊紹介



■ *Active Methods and Modern Aids in the Teaching of Foreign Language*

ed. R. Filipović

これは我国でも広く親しまれている Oxford Univ. Press の白表紙 Series "Language & Language Learning" の 32 冊目として出版されたばかりの論文集である。所収の論文は 20 編あり、すべて 1968 年 4 月に Yugoslavia 西北部の都市 Zagreb で開催された FIPLV の第 10 回大会で発表されたものである。FIPLV とは Fédération Internationale des Professeurs de Langues Vivantes の略称で国際的機関であるだけに発表も英、独、仏語（そしておそらくそれ以外に露語）で行なわれ、極めて多彩である。Yugoslavia 自身多言語国家であるから、外国語教育のみならず、いわゆる second language の駆使力を授ける積極的方法には深い関心をもっているに相違なく、発表の中には地元の学者のものが少なくない。大会は総会のほかに 6 部会にわかつて運営され、取り上げられた主題も L. Zabrocki の Kybernetische Lernmodelle und Programmierter Fremdsprachenunterricht (サイバネティクス的学習モデルと外国語のプログラム教育) の如き高度の予備知識を前提とするものから、Denis Girard の Méthode directe et méthodes audio-visuelles (ダイレクト・メソッドと視聴覚

教育法) のように極く具体的で、今日では classical と言える理論を土台に据えたものもあり、H. Marchl: *Fremdsprachenunterricht im Hörfunk und Fernsehen. Erreichte Ziele—erstrebte Ziele* (ラジオ及びテレビの外国语教育、現時点と将来の展望) の如く具体的に現行の方法論を批判しつつ将来の展望を試みたものもある。詳細な序文があり英文の summary が英語以外の発表の前に付けてあるので、誰でも会得できる便利で示唆に富む冊子だと思う。特に第 4 部の文学に関するもの第 6 部の変形文法を取り入れたもの等は歐州の傾向を見るのに便利である。
(Oxford U. P., 1972, ₩ 1,850)

(早稲田大学教授 宮田 齊)

■ 『現代英語学』

増田 貢著

著者はしがきに述べられているように、初学者に英語学全般にわたって基礎的な知識を与えることが本書のねらいである。題名から察せられるように、英語を共時言語学の観点から扱ったもので、その通時的側面（英語史）は本書の範囲外であるが、文学論と方言論では通時的観察も加えられている。7 章から成り、参考文献目録、論題索引、および単語索引が付されている。

第 I 章では英語学の領域を規定し、初期から変形文法に至る英語学史の概要を述べ、第 II 章は英語音韻

論の下に音声学と音素論を関係づけて扱っている。基本的には分布に重きをおくブルームフィールド系の構造言語学的音素論に立つ解説と言えよう。第 III 章では形態素と異形を解説し、語形変化を考察し、屈折と派生にふれている。立場は上と同様と見られる。第 IV 章では IC 分析を解説し、句構造文法、外心構造と内心構造にふれ、さらに変形生成文法に言及し、樹木図表により解説している。第 V 章では意味の意味を論じ、意味の特徴、意味の成文分析、同意・反意性を扱い、翻訳の問題に言及している。第 VI 章では英語の書記体系を他の言語の書記体系の通時的・共時的バースペクティヴの中で捉え、かつ音声言語と書記体系の関係や綴字改革の問題を論じ、第 VII 章では方言の概念を明らかにし、等語線と方言境界、英語諸方言の由来とそれぞれの特徴、第 2 言語としての英語の問題に言及している。

英語学を志す人々がその範囲と問題点の概観を得るのに手頃な参考書であろう。統語分析や意味の成分分析にはかなり詳しい図表があるが、ところどころもう少し解説の敷衍や例示、図解がほしい箇所もある。たとえば統語論について基底文に変形規則が適用されて派生文の出て来る過程とか、音韻論の中で超分節音素の位置づけについての解説、調音器官の図解や方言地図例など、あれば有難い。

(篠崎書林 312 頁 ₩ 850)

(津田塾大学教授 大東百合子)

■ 『英語・米語・世界の英語—Varieties of Spoken English—』

黒田 巍 序

長谷川潔・清水克祐 編著
鈴木 進・鳥岡 丘

英語学習も昔の語学といいういかめ

しいイメージから脱却し、日常生活上のひとつの技術の習得という点から考えなくてはならなくなつたよう気がする。

ともあれ表題のテープは基礎編(Sounds of English)と応用編(Varieties of English)にわかれています。それぞれに親切な解説がつけられています。

従来英語や米語の相違を語る書物も多くあったが、これ程簡明な実物をわずか2本のテープの中に収めたものは数少ないであろう。各項ごとのポイントの解説が簡潔で、英語教師はもちろんのこと、英語を専門としない一般人にもよくわかるように説明されている。かなり専門的な内容をも歯切れよく解説している点は、多少の助言を加えれば初学者にさえ十分理解されるだろう。

基礎編ではやや単調になりがちなテープに、米・英音の差異を中心に入学者への注意も忘れず極めて親切な解説をつけ加えている点は気持ちがいい。

基礎編から応用編は全く一足とびであるが、実質的に国籍・階層・職業の異なる人々のVarieties of Englishが集録されている。各人の母国語のイントネーションが伺えるような訛りをもった、種々の英語を1本のテープに集めた点でユニークである。また「日本人が文法的な正確さを期するのあまりろくろくものが言えないのをすぐうべく、少しぐらいの日本語の訛りのある英語であっても、相手が理解してくれさえすればよい。大切なのは人間としての内容である」という立場から編集されている点は、この種の教材の必要性を裏書きするものであろう。

初版にありがちな誤植も少なく、格調高いケネディーのスピーチからノールウェイの一主婦の文法的な間違いを越えた人間的な血のかよった

借物でない英語の持つ親しさや、今は亡きキング牧師の胸を打つ英語の余韻は、テープが止まってからも深く耳底に残ることであろう。

(大修館書店 テープ全2巻、解説書、演習用テキスト各1冊、セット ¥5,000)

(ELEC教務部長補佐 佐藤貞友)

■『ラドー英語シリーズ』

Robert Lado 著

どんな教材でも、教材の真価はそれを実験してみなければわかるものではあるまい。従ってここではそのoutlineを紹介し、気のついた2,3の点を述べてみたい。

ラドーは Pattern Practice を言語学習のもっとも重要な作業と考えており、その立場からこのシリーズを完成したものと思われる。このシリーズの特徴は一口にいって simple で systematic な配列ということができる。音声教材も最近とみにふえてきたが、これ程オールラウンドでよくまとまった教材はまだ少ない。

全くの初学者から一般までを対象として、全3巻の中に相当豊富な内容まで盛りこんでいる。各ユニットは memorize からはじまる9つのステップで構成されているが、各ステップの学習がたった一語で明快に指示されていて各課の話題も新鮮である。

まず① Memorize で基本文を暗記させ、つぎに② Substitute で variation の練習をねらっている。③の Study ではちょっぴり変形文法や意味論の概念も応用して、文法という言葉にとらわれずに、英語を使いつながら同時に文法の規則やパターンを習得させようと工夫されています。④の Practice ではやや複雑な variation の作業をねらい、⑤の

Speak で絵を見せて生徒同志で話すけいこをさせる所謂 pupil-pupil-dialog をねらっている。⑥の Read では aural comprehension と reading のドリルをし、そのあと理解をチェックすることもできるようになっている。⑦の Think で絵を見ながらそれぞれ説明したり、考える練習を狙っている。⑧の Pronounce では、発音を口形図を見せたりして mim-mem や contrast によって習得させようとしている。最後に⑨の Copy で新語の筆写をさせたり、空所補充の問題をさせることにより spelling の力をつけることを工夫している。

各巻の教材はデラックスな教科書・解説書そしてワークブックとともに、それぞれ12本のカセットテープを含めて大きな本型のボックスにばっちりと収められている。この点これだけ揃っていればどこの田舎に持って行っても独学できるし、暗誦しさえすればかなりなところまで実力はつく筈である。

音声教材としてのカセットの録音も比較的よくとれているが、3巻になってから少しノイズが出たり、あまり speed が遅すぎて、かえって repeat しにくかったりする箇所も二、三耳についた。例えば BK III p.113 のつぎの文で

4. I...I/would like to see/some of the paintings/that he has done. (...WE)

というのがそれである。one sentence にポーズが3つもあるため、WE という cue が出されたときには key sentence が記憶から少しはなれてしまっていた。

ラドーもつぎのように強調している。

In pattern practice, the student produces a sentence after each cue at normal conversation speed. A

class may produce 20 to 30 different sentences per minute following as many cues supplied by the teacher. This presents 1,000 to 1,500 recitations in a fifty minute class.

(*Language Teaching* pp. 105—106)

短時間に多くの学習量をあげるには、何といってもその英語のスピードが問題となる。従ってはじめは少しゆっくりしたスピードでも徐々に速くして所謂 natural speed にまで持って行かなければ、どうしても間のびがしてしまう。しかしスピードに注意し、根気よく暗誦し練習しは行けば、確実に上達する筈である。いやが応でも力がつくように、計算づくめで作られた教材ということができる。

(各コース共カットテープ全12巻、テキスト、ワークブック、解説書各1冊、セット ¥ 16,500)

(ELEC教務部長補佐 佐藤貞友)

■『国際英語のすすめ』

國弘正雄著

國弘氏の『英語の話し方』は「只管朗読」「只管筆写」「脱英米化」など英語修得に参考になる意見に富んでいる。

同氏の『国際英語のすすめ』も氏の原体験にふれて、小生の幼稚な英語運用能力を多少でも向上させる指針をさらに発見できることを期待して読みはじめてみた。

第5章「英語をどうやって学ぶか」は現場の一教師にとって役立つ章である。「英会話などは存在しない」という氏の主張は傾聴すべきである。かつて British Council の夏季講習会で、Bickley 氏が一受講生の“Classroom English”という意味を

理解できなかった情景を想い浮かべた。「音声教材はかんづめ」であるという考え方もテープに振り廻されている現場の教師にとっては苦い良薬である。「活用自在の実力をつけること」という項目は、言語活動に焦点を合わせて教室で実践してみたい。またカミソリの鋭さのみを生徒に求めて青竜刀の持つ豪快さを忘れてはいけないと思う。

しかし一読後の印象は予測とは異なり哲学的なものであった。英語学習を通しての氏のまじめな生活態度、人生感が「生死一如、煩惱即菩提」の引用に見られるように随所に感ぜられる。「アメリカ人のユーモアとはどんなものか」、「なぜ英語を勉強しなければならないか」などの章に見られる氏の喜怒哀楽や、人類愛に満ちた氏の考え方には大いに共感する。「語学修得即人生」が第一印象であった。

また国際人になることをすすめる一方、日本人であることを放棄する必要はないと主張したり、野外学習を書斎学習を通して得たと思われる知識や引用を通してすすめている、はなはだ「二值的」な好エッセイ集である。

(実業之日本社 253 頁 ¥ 380)
(新宿区立西戸山中学校教諭 中田実)

■『アンカー英和辞典』

柴田徹士・小林清一
編 小西友七

辞典の記述は明快であると同時に細かい点に対しての配慮も必要である。本辞典は限られたスペースの中で、日本人が英語を正しく理解する上での種々の工夫がなされ、本辞典の基本方針である「明快」と「親切」がいたるところにうかがえる。

本辞典の特色は、統語論的な面(個

個の単語よりもその単語の文中での機能のほう)が重視され、全体的に語学的な雰囲気を漂わせている点である。いわゆる辞書的意味にとどまらず、構造的(文法的)意味に対する示唆もあり、機能的な面の理解がしやすく、英語の実際の用法に細心の注意が払われている。動詞を例にとれば、他動詞の語義には必ず助詞(いわゆる「てにをは」など)が用いられ、目的語との関係や目的語の性格などが明示され、その主語となるべき語の性格にまで言及している。構文上注意を要するものには、語義の前に「文型表示」(文または文の一部を公式化したもの)を示して直感的に語の機能を把握させ、語義の後に示される用例とあいまって理解を一層深めている。実際的な運用という面で非常に参考になる。(この「文型表示」は名詞・形容詞についても示されている) その他の品詞についても、意味上の補足説明は()に、文法上の説明は〔 〕の中に示され、特に語法上注意を要するものには別に解説を加えるといった親切ぶりである。その他、分離合成語の強勢の表示、類語の解説、同意語・反意語の提示、派生語・他品詞形の指示、そして見出し語の理解・記憶に便利であり、他の語との関連を知る助けとなる「語根分析」などいたれりつくせりである。

この辞典は、いわば表現辞典・活用辞典的な性格を持っており、英作文辞典として活用することができると思う。

(学习研究社 1,455 頁 ¥ 1,200)
(埼玉大学教育学部講師 渡辺益好)

* * *

展望通信

◆第8回 ELEC英語教育研究大会

本年の ELEC 英語教育研究大会はつぎの通り開催されます。

期日 1972年11月4日(土)

場所 ELEC 会館(東京都千代田区神田神保町3の8)

日程 10:10—11:00 講演「英語教育の指導理念」高橋源次博士(ELEC 専務理事・明治学院大学名誉教授)

11:10—12:00 講演「アジアと英語」

Dr. James Stewart(アジア財団日本代表)

12:00—12:10 ELEC 賞授与式

1:50—2:40 実演授業(川口市立西中学校2年生)

和田 尚氏(西中学校教諭)

2:50—3:20 質疑応答

3:30—4:50 研究討議

50:0—6:00 親睦会

◆ELEC 月例研究会

ELEC 会館を会場としてつぎの通り月例研究会が開催されます。入場無料。

第58回 9月16日(土) 2:30—4:30

講演「転機に立つ大学入試と英語教育」

東京外国语大学教授 梶木隆一氏

第59回 10月14日(土) 2:30—4:30

講演「小笠原における英語教育」

都立上野高等学校長 犬飼基義氏

◆ELEC 海外留学英語試験

ELEC では、海外留学希望者、TOEFL 受験者、海外出張者等を対象に、英語能力検定・診断・指導を行なっていますが、次回は10月6日(金)に実施する予定あります。希望者は ELEC 宛に願書を請求して下さい。

◆English Teaching Forum の配布

ELEC では USIA 発行の英語教育専門誌 *English Teaching Forum*(隔月刊)の配布を行なっているので、講読を希望される方は ELEC 出版部宛お申し込み下さい。講読料は年額 1,000円(含送料)。

◆ELEC PUBLICATIONS の発行

ELEC の創立15周年を記念して ELEC PUBLICATIONS の第9号が研究社から発行されました。定価は1部¥1,300。

収録論文は English as a Means of International Communication, Linguistics Theoretical or Applied, Teaching English as a Foreign Language の3分野にわたる11篇。

◆『英語展望』の合本

『英語展望』の第25号から第36号までの合本第3巻(定価3,000円)ができております。ご希望の方は ELEC 出版部へお申し込み下さい。

なお、合本の第1巻(第1号~第12号)および第2巻(第13号~第24号)の在庫が若干部あります。定価は各3,000円。

◆研究会に対する講師の派遣

ELEC では、英語科教員で組織されている全国各地の英語教育研究団体等の要請に応じ、講師を派遣し、英語教育に関する研究活動に対して援助助言を行なうことになっています。講師派遣の希望のある方は ELEC 研究開発部宛お申し込み下さい。

◆ELEC 賞研究論文・実践記録の募集

ELEC では、わが国の英語教育の水準向上、あるいは英語教授法の改善に直接役立つ実践研究を奨励する目的で「研究論文」または「実践記録」を広く一般に募集しています。

原稿の締切は毎年9月末日で、わが国の英語教育の水準向上、あるいは英語教授法の改善に直接貢献するところ大と認められたもの一件に対し、ELEC 賞が11月初旬に授与されることになっています。

◆原稿募集

『英語展望』では読者からの原稿を募集しております。内容・分量とも制限がありません。ただし未発表のものに限りません。掲載分には規定の原稿料をお贈りします。

英語展望(ELEC Bulletin)

第39号

定価300円(送料85円)

昭和47年10月1日発行

◎編集人 中島文雄

発行人 竹内俊一

印刷所 大日本印刷株式会社

東京都新宿区市谷加賀町1の12

電話(269)1111(大代表)

発行所 ELEC(財団法人英語教育協議会)

東京都千代田区神田神保町3の8

電話(265)8911~8916

振替 東京11798

ELEC BULLETIN

ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC